

四九八九

(御触書寛保集成 一八〇九号)

島津家歴代制度卷之六十六 自享保二年九月
至寛政八年八月

一新金出来候ニ随ヒ、乾字金モ段々引替候付、世上ニ相
残リ候員数追日減少候、依之乾字金通用ノ事、当酉年
ヨリ来亥年迄三ケ年ヲ限り、翌子ノ年ヨリ世上之通用
一切可為停止事、

四九八七

一霧島山新燃之儀、神火又ハ御神之火杯卜唱候儀申違二

テ候間、向後燃卜唱可然候、

(朱書)享保二年
九月

(肝付兼柄)
主殿

四九八八

(卷之四九 三七七三)

一支配有之候御役人、支配中ノ儀付諸事表方へ申出可達

貴間儀且又御家老承程ノ事ハ自身罷出御用人へ其旨可

申達候、御用人迄承相濟候事者品ニヨリ下役ヲ以可申

出通、去ル亥年被 仰付候旨其節申渡置候、然処至頃

日区々ニ有之由相聞得候条、弥以向後右之旨相守候様、

支配有之御役人へ可致通達候、

(朱書)享保二年

九月廿五日

主殿

事、

右之趣、国々所々ニ至迄可改此旨者也、
(朱書)享保二年
西八月

(行間朱書) 右ノ通、從、公義御書付ヲ以被 仰渡候、

四九九〇

一近年諸所於山方御用木致聊企候者每度有之不屈候、此

節モ末吉衆中大川内五右衛門・迫田諸右衛門、同所之

百姓御用木致盜伐候儀令露頭不屈ノ至、就中為衆中不

成合ノ仕形候、右体ノ者ハ依輕重任先例相当ニ其咎申

来候へトモ、此節ヨリ相改、伐取候本木取揚科錢申付、

其上衆中被召放家内札申付、百姓ハ移宿ニ申付候、自

今以後致聊企候者於有之ハ此節ノ任例其咎可申付候条、

此旨申渡候、

(朱書)享保二年

西十月十三日

(島津久当)
将監

四九九一

一 今度二本松地藏從 御前様御再興ニテ菩薩堂へ御引移

ノ咎候、

(朱書)享保二年

九月

四九九二

一 御咎目被仰付置候内相果候者ノ子共、不案内ニテ繼目

之願申出者モ可有之候間、組頭並小与頭ヨリモ氣ヲ付

其沙汰可致候、尤、右体ノ子共繼目申上様ノ儀、御内

意可申出候、御吟味次第御差図可有之候、以上、

(朱書)享保二年

十二月五日

(朱書)御取次
薬丸与次右衛門

四九九三

一 正月三日一所持・諸地頭、年首御太刀例之通進上可有

之候、且又御太刀進上不仕歴々差立候人之子共、又ハ

月並御礼罷出候諸御役人并諸士、御勝手方ヨリ罷出御
礼可申上候、

一 外城衆中ハ四日ヨリ六日迄ノ内、参合次第 御目見被

仰付候間、罷出候節御用人へ首尾可申達候、

一 御太刀進上人数ノ内、当病ニテ納太刀仕人ハ前以御用

人へ其届可有之候、

一 右人数ノ内、他行又ハ差合有之人ハ年内其御断御用人

へ届可有之候、

右四ヶ条、毎年時々相触間敷候条、右之心得ニテ三日

ヨリ廿八日迄ノ内、例年年頭御礼罷出候面々、朝四ツ

時前 御城へ可相揃候、

一 三日御謡初二付罷出候面々、晚七ツ半時無遲滞相揃可

申候、

(朱書)享保二年

十二月廿六日

(朱書)
一御家老座印

四九九四

一 御側廻へ相勤候者、外城衆中ノ様縁組仕候儀、向後ハ

無用可仕旨 御意候、

(朱書)同

十二月廿六日

写

一 諸座付ノ者、其外御奉公ノ依功ハ以前ヨリ士ニ御赦免被仰付事候、此以前ハ御人少ノ事ニテ他所ヨリモ被召抱候儀モ有之候故、右通御赦免為被仰付事ニテ、子孫迄モ士ニテ罷在儀候、然ハ士ノ二男三男迄大分ノ人数ニ罷成、近年ハ他所ヨリ無拠被仰付方有之候テモ御断被仰達不被召抱事、右之次第ニテ御人御不足モ無之候、依之向後御赦免ハ左之通御法被相定候、

一 諸御座付ノ者、別テ勤ノ功モ積、御調法罷成候者ハ其身一代座付士ニ可被仰付候、左候ヘハ其子親同前ノ宜勤ノ者候ハ、其子モ一代士可被仰付候、三代相統首尾能相勤候ハ、三代目ヨリ永々座付士ニ可被仰付候、

一 右同断ノ者、無隠働ノ者又ハ及数十年勝テ勤方宜者ハ其身永々座付士可被仰付候、

一 御船頭ノ儀ハ有来候通、永々士ニ可被仰付候、

一 脇船頭ノ儀ハ当分ハ外城衆中御赦免被仰付事候ヘトモ、向後座付士同前、依功ハ其身一代御船手付士ニ被仰付、三代相統脇船頭ヲモ相勤功有之候ハ、永々御船手付士

可被仰付候、若子孫至リ御船手士^(付脱カ)ノ御奉公ノ御用無之者ハ御納戸・御兵具所座付士可被仰付候、勿論御船頭ヲモ相勤候程ノ功有之者ハ有来候通其身ヨリ永々士ニ可被仰付候、

一 何ソ御用立候程ノ儀有之者ハ吟味ノ上外城衆中可被仰付候、

一 右同断ニテ座付士又ハ一身者体ノ者被召出候ハ、其身計可被仰付候、三代相統御用向首尾能相勤候ハ、永々座付士可被仰付候、

右之通、此節被相定候、勿論右之外何ソニ付テ被召出候者有之節ハ右ニ準、其節ノ様子次第可被仰付候、
(朱書)享保三年戊辰
二月廿二日
(島津久当) 将監

四九九六

(卷之四七 三六〇五)

写

一 所持ヨリ寄合並迄^ト

但、右之嫡子迄ハ御内証ヨリ御目錄進上有之候ヘトモ、向後ハ御内証ヨリノ進上不被仰付候、当分進上仕来候面々迄ハ此内之通被仰付候、重テハ不被仰付

候、当分進上仕候者ノ子ヨリハ進上不被仰付候、尤、

四九九七

(卷之三〇 一九〇二)

進上仕候者ニテモ小普請杯ニ被仰付候ハ、其者ハ

写

進上無之筈候、

一此間御馬廻卜書記候ハ小番卜書可申候、此跡御馬廻卜

一 小役人ノ内ニテモ御内証ヨリ御目錄進上仕候者有之候、

書記有之候所モ小番卜相直可申候、小番相勤候者モ江

向後右御役ノ者ヨリ進上不被仰付候、当分上ケ来候者

戸ハ御馬廻ニテ不參者モ有之候間、御国元ニテハ右

ハ、役儀相勤候内ハ此内之通被仰付候、御内証ヨリ御

之通書調可申候、

目錄進上無之役ニ役替被仰付候節ハ進上無之筈ニテ候、

四月十一日

(伊集院久雄)

小役人ノ内ニ御包丁人頭・御看經山伏ハ有来候通被仰

付候、

四九九八

一 無役又ハ御役人ノ内ニテモ諷有之、御内証ヨリ御目錄

一御当地於テ御供触等ノ節、小番勤ヲ御馬廻卜書、唱ニ

進上仕候者有之候、右ノ面々モ其身一代ハ進上被仰付

モ其通仕来候、小番ノ内ニハ御馬廻ニ被仰付候者モ有

候、其子ノ代ニ罷成候ハ、進上不被仰付候、

之、又ハ新御番御步行ニテ江戸ハ參者モ有之候ヘトモ、

一 御側ハ被召仕候者表方被召出候節、御内証ヨリ御目錄

於御当地ハ入交御供相勤儀候、右通段々為入交勤方ニ

進上ノ儀ハ時々可得御差図候、

テ候処、惣名ヲ御馬廻卜書付、唱ニモ仕候儀不宜候条、

一 隅州様御方モ右ニ準可申候、

向後御供触等ノ節ハ小番幾人卜書、唱ニモ可仕候、尤、

右之通可致通達旨、(北志島親野) 隼人殿御差図ニテ候、以上、

御供触外ノ書留等此跡御馬廻卜相直可申候、御使者等

(朱書)享保三年 戊二月廿九日

相良清兵衛(頼唐)

ノ勤ニ付テハ勿論御馬廻新御番卜唱、書付ニモ其通可

仕候、

(朱書)同一 四月廿七日

藏人

四九九九

一 御役人へ被下候御米並御銀ノ儀、御役料米・御役料銀
卜唱、又ハ証文等ニモ書可申候、

一 小役人へ被下候御切米並銀ノ儀、役料米・役料銀卜唱、
又ハ証文等ニモ書可申候、

一 為稽古扶持被下候御切米ノ儀、為稽古扶持御切米何程
被下候卜唱、又ハ証文等ニモ書可申候、

一家ニ付被下候御切米ノ儀ハ有来通御切米何程被下候卜
唱、又ハ証文等ニモ書可申候、

右之通、名越右膳ヲ以奉伺被相定候、
(恒遊)
(朱書「同」) 戊五月十日 作左衛門 (北郷久嘉)

五〇〇〇

(五〇〇一号行簡朱書)
一 御上下ノ節、道中・船中共ニ御供立ニ出家ヲ召列候者

モ有之候、向後無用可仕候、

一 出家計ニテモ無之、其外ニテモ奉公人ノ外召列候儀無
用可仕候、

享保三年五月廿八日

(島津久当)
将監

五〇〇一

内御玄關脇高奉行御役座入口ニ高所卜札ニ書付有之候、
高所卜申候テハ不道理ニ相聞得候間、高奉行座卜書直、

高所卜ハ唱申間敷候、
(朱書「享保三年戊」)
六月二日

(名越恒遊)
右膳

五〇〇二

(卷之四六 三四二八)

御奉公方不被仰付者、此中ノ高持ハ小普請、無高ハ小普
請並、一世御奉公支候者、今程御奉公支候者卜四通ニ有
之候ヘトモ、向後ハ一世御奉公支候者ノ内、高持ハ小普
請、無高ハ小普請並唱、書付等ニモ其通仕、今程御奉公
支候者ハ只今之通ニ候、

六月

将監

五〇〇三

江戸御国元ニテ御家老ニテモ羅紗之合羽柄袋仕間敷候、
比段堅可相守候、右之通被仰出候、

六月十五日

(種子島久基)
彈正

五〇〇四 (卷之四九 三六九三)

一 御家老座ナトノ様一ヶ月ツ、相勤候者、月番、

一 御近習役並御納戸奉行ナト十日代リ相勤候者、御用番、

一 御小姓類非番・当番有之候ハ、当番、

右之通、唱可申候、

(朱書「同」)
六月十七日

彈正

五〇〇五

忌御免被仰付候者、定式ノ忌日数不相晴申ハ御仏詣不被

仰付候、右之子細ハ、(音書) 太守様ヨリ忌御免為被仰付事候

ヘハ 御先祖様方ヘ御対被成御遠慮ニ被 思召上候訳ヲ

以御供不被仰付候、此儀向後御当(地脱之)江戸ニテモ右通被仰付

候、

(朱書「同」)
六月

彈正

五〇〇六(の1)

御参府被遊 御首途候節ハ、 御首途ノ当日ヨリ御供ノ

諸役人ハ羽織袴着用可仕候、御礼日ニハ上下着ノ面々ハ

上下可致着用候、小番・大番ノ内御供相勤候者ノ儀ハ、

御番ノ節ハ上下着可仕候、御当地ノ儀ハ向後右通可相心得候、

但、於江戸平日上下着ノ面々ハ、羽織袴着用ノ儀ハ時々

可被仰渡候、

(朱書「同」)
六月

(比志島範房)
隼人
北郷久意
作左衛門

(五〇〇六の2)

(行間朱書) 本文羽織袴ヲ着用不致候テ不叶儀ト一向相考申儀モ有之

候半、然共強羽織着用不致候テモ相濟事候間、心次第着

可仕候、右ノ通候故、尤、肩衣着用ニ不及候、

六月廿七日

隼人
作左衛門

五〇〇七

役儀ニ付テ行料米被下置候者之内、其勤ノ訳ニヨリ飯米

被下候者有之候、此間八年中飯米何程ト相究渡来候ヘト

モ、向後ハ右飯米ハ勤応日数被下候間、此旨通達可致候、

右之通被仰渡候間被致承知、同役中ヘモ通達可被致旨、

御差図ニテ候、以上、

(朱書)同

八月十三日

平岡八郎太夫(久慈)

五〇〇八

一主従五人ハ 御国行遠近共二

一主従七人ハ 日州番所外行ノ時

御普請奉行 御記録奉行 長崎御付人 高奉行

物奉行 隅州様御方物奉行 御厩別当

一主従四人 内外共二

御小納戸役 隅州様御方御小納戸役

御小納役(戸脱力)並 隅州様御方御小納戸役並

中通御目付 隅州様御方中通御目付 御目付

御右筆 隅州様御方御右筆 助役

山奉行 郡奉行 金山奉行 御細工奉行

御祈念方 屋久島奉行 宗門改方 磯奉行

尾畔奉行 御茶道頭

但、此御役ノ内ニモ、十人御賦ニテ致江戸詰候人ハ

御国行遠近共二主従五人御賦、且又日州番所外行主

従七人御賦可被下候、納役ノ儀ハ内外共二可為四人

御賦候、

一主従四人 右同

唐船請込 寺社方取次 御勘定方小頭

御勘定方吟味役

但書右同断、

一主従四人 右同

御医師 御包丁人頭 御書院役人 表方代官

五万石方代官 帖佐与代官 御台所役

御春屋役

但書右同断、

一主従三人 右同

御側御小姓 隅州様御方御側御小姓

御側御同朋 隅州様御方御側御同朋

表御小姓

但書右同断、

一右御役ノ外ハ此内之通、

右之通御国行ノ節、御賦被成下等今度被相定候条可被

申渡候、以上、

(朱書)同
戌十一月

(種子島久基)
彈正

五〇〇九

(五〇〇八号行間朱書)
馬薬

一煎薬一廻七帖二付、代銀五匁、

但、一帖惣目五匁ニシテ代銀七分一リ四毛、

右、役料米被下候医師へ御物ヨリ被仰付候薬代、

一同七帖二付、代銀六匁、

但、一帖二付、懸目五匁ニシテ八分五リ七毛、

右、役料米不被下奥医師へ御物并諸人ヨリ遣候薬代、

一痛洗薬一匁(度カ)分

但、懸目七匁五分ニシテ代銀一匁七リ五毛、

右、役料米被下候医師へ右同断、

一同一度分

但、懸目七匁五分ニシテ代銀一匁六分三リ四毛、

右、役料米不被下候医師へ右同断、

一目差薬一帖 一目洗薬一帖 一膏薬一帖(付カ) 一付薬粉

右、何レモ一帖一付二付、代銀二分一リ四毛、

右、役料米被下候医師へ右同断、

一目差薬一帖 一目洗薬一帖 一膏薬一付 一付薬粉

右、何レモ一帖一付二付、代銀二匁五リ七毛、

右、役料米不被下候医師へ右同断、

一四足并血上ケ煎薬一煎分

但、懸目五匁ニシテ代銀七分一リ四毛、

右、役料米被下候医師右同断、

一同一煎分

但、懸目五匁ニシテ代銀八分六リ七毛、

右、役料米不被下候医師へ右同断、

一惣爪付薬 一七部分(日カ) 代銀一匁五分

右、役料米被下候医師へ右同断、

一同 一七部分(日カ) 代銀一匁八分

右、役料米不被下候医師へ右同断、

右ハ、頃日薬種下直ニ罷成候付、御医師薬七帖二付、

御物ヨリ被下候薬代一匁五分、諸人ヨリ医師へ遣候薬

代一廻二付一匁八分ニ当戊九月二日ヨリ被相定候、依

之馬医ノ儀モ右ノ通相定候条、得其意候様ニ与中・支

配中・諸外城・私領へ不洩様可致通達候、以上、

戊十二月廿四日

(島津入当)
将監

五〇一〇

御家中之面々頃日別テ難続ノ由候、於旅召置候家来共ヨリ応御賦召置事候ヘトモ、向後ハ心次第勝手宜様可相減候、外勤致候砌、同役同格ノ供廻ヲ兼、同格ニ不召列候得ハ、不成合ノ様ニ役並候様召列候儀ハ不入事候、其人々ノ心次第可召列候、尤、相応ニ不召立候テ難成者ハ其人々ノ勝手次第候、左様成者迄モ絶テ減少被仰付儀ニテ無之候、

(朱書「享保四年支」)

二月

(島津久家)

李

五〇一一

(五〇一五号行間朱書)

御家老中ノ面々頃日別テ難混ノ由候、於旅召置候家来共モ応御賦召置事候ヘトモ、向後ハ心次第勝手宜様可相減候、外勤致候砌、同役同格ノ供廻ヲ兼、同格ニ不召列候ヘハ不成合ノ様、役並候様召列候儀ハ不入事候、其人々ノ心次第可召列候、尤、相応不召置候テ難成者ハ其人々ノ勝手次第候、左様成者迄モ強テ減少被仰付儀ニテ無之候、

亥二月

李

五〇一二

(雜患)

隅州様御方御側御目付卜此程御役名被仰付置候ヘトモ、
太守様御近習役ノ御役名同前、御近習役卜御役名被相改候、

(朱書「同」)

正月廿八日

平岡八郎太夫
(久世)

五〇一三

島津将監殿

右、於御前寛陽院様御代ヨリ首尾能相動候ニ付、御城

(光久)

代被仰付候、御家老勤モ此内之通可致候、加判ハ御免被成候、席ハ御家老ノ上座被仰付候、御役料此内之通被下

置候、

(朱書「享保四年支」)

十一月六日

李

五〇一四

(卷之三〇 一九二八の2)

座付士ノ儀、何方座御赦免士卜唱候事有之候、右御赦免卜唱候事如何ニ候間、向後何方座御赦免卜唱不申、何方座付士卜唱可申候、

十一月十一日

(比志島龍房)
隼人

五〇一五

進上物ノ儀、当分ハ御近習役ニ相付差上事モ有之、又ハ御近習役外ノ人ヲ以差上事モ有之候、向後ハ地他^(自レ)国共ニ諸進上物致一紙書、其品物ヲ御近習役ヲ以可差上候、勿論諸座へ相付差上候進上物モ御近習役ヲ以其座ヨリ可差上候、継目・家督・初テノ御目見等ノ節、致進上物候品又ハ諸外城ヨリ有物ノ野菜ノ類ハ有来通、此外ハ不依何色御近習役ニ取次ヲ以差上筈候、
(朱書)享保四年亥
十二月朔日

空

五〇一六

(五〇一五另行開朱書)
川内ノ文字、川内又ハ千台卜両様ノ文字書来候へ共、御調進ノ上リ御絵図ニ川内川卜銘書有之事候条、向後川内ノ文字ヲ被用候間、此旨致承知、書付等ニモ川内ノ文字可相記候、

(卷之五六 四四〇三)

子正月 (廿四日)

(島津入賞)
内記

五〇一七

一鉄炮打候儀、御城下ヨリ五里内御禁止、

一御奉公ニ付田舎へ参候者、鉄炮持参ノ儀無用、

一継目・家督並養子・嫡子成等被仰付候節、九歳ヨリ以上ノ者ハ早速御札ノ願無延引可申出候、八歳以下ノ者ハ名代ヲ以家筋ノ進上物仕御札申上度旨願可申出候、右之通、名代ニテ御札申上候ハ致成長重テ御札願申出候不及候、且又若輩者共ハ一類共ヨリ右通ノ願可申出候、
(朱書)享保五年子

四月

内記

五〇一八

(五〇一七另行開朱書)
太守様御持病ニ御目被^(空)、其去年御病後御身弱御成、御手被振候ニ付テハ、公義御勤ノ外ハ御印判ヲ被用度旨、戸田山城守様へ御内意ニテ御申被成候処、其通可被^(空)成候、屹御差図ニ無之段被仰付候付、向後御用筋外ノ御付届御印判被用筈候、若於他所相尋者モ候ハ、右次第ヲ以返答可申候、左候テ、御書判ニテ被遣候御方様ハ御老中様・御三家様・近衛御三公様・京都^(所)諸司代・大坂御城代御人数ハ不依何色御書判被成候、江戸御留守居・長崎御奉行・下田御奉行へノ御書御用筋ノ儀ニ付テハ御書判、

平日ノ御付届ハ御印判被用候、此外御用筋ノ儀ニ付テハ御向々御人体無御構御書判、平日ノ御付届付テハ御印判ヲ被用事候条、此旨承知仕可置候、

享保五年子四月廿二日

(比志高範房)
隼人

(行間朱書)「且又若御年寄様へハ寒暑其外御機嫌御伺ニ付テ御献上
(空白)御□被遣候、其節ハ御書判、
右一条後レテ書入、」

五〇一九

御用筋付テ諸座間合ノ書付ノ内何々ノ儀可被仰渡ト書記候座モ有之由候、御用人座へ差出候書付ノ儀ハ可被仰渡ト書記可申儀ニ候、其外諸座奉行・頭人ヨリ御用筋向合ノ書付ニ可被申渡ト向後書可申候、以上、

(朱書)同
五月十日

五〇二〇

(五〇一九号行間朱書)
一御直元服並御名代元服・継目・初テノ御目見・出家・
山伏御礼等迄、(吉書)太守様御在府中ハ、(継書)隅州様御下向
被遊候ハ、御名代於御下屋敷御覽ノ筈候間、右願

ノ人ハ可申出候、
(朱書)同
十一月廿五日

(伊集院久矩)
藏人

五〇二二

御当地士並外城衆中、依各遠流被仰付候者、組帳又ハ不
及消除候条、遠流被仰付候訳致張紙可召置候、左候テ、
家内之儀ハ手札改ノ節モ親類・家内ナト召入不及候、此
内之通ニテ手札申受、本人ノ儀ハ於島手札申受筈ノ儀、
(空白)「書古札ハ差上、其外常式ノ通書出手札可申受候、且又
切支丹宗門改並一分出銀等ノ首尾方モ諸事帳面之通可仕
候、右外社家座付者、人家来、門前者、百姓・浦浜・町
人等遠流被仰付候者ハ親族無御構由被仰渡候者、親類御
願等ノ者迄ハ右ニ準諸帳面首尾方可有之候、且又先年遠
流被仰付候者、其家内迄モ手札ノ儀札改ノ節モ且又右ニ
準可申渡候、尤、帳面可被消除者有之節ハ時々可差図候、
(朱書)同
六月

(島津入当)
將監

五〇二三

(継書)今度隅州様初テ御暇御願被成候儀ニ付テ、左ニ相違候、

他所へ

一 大隅守儀、薩摩守国元へ初テ御暇被下候、

一 大隅守儀、薩摩守国許へ致着候、

御家老中へ

一 初テ御暇御賜、

一 初テ鹿兒島へ御着、

右之通唱可申候、 御家督様ハ御国元へノ御暇御賜・

御帰国・御帰城・御着城ナトト唱申事候へトモ、御部

屋栖様ハ右四ヶ条之通可申候、

(朱書)同

十一月十五日

藏人

五〇三

一 御先祖様御忌日ニ御寺參ノ御暇申上候テモ、御存知ラ

レタル者ニテ無之候へトモ、御暇不被下御法候、

一 御先祖様御忌日ニ御(存カ)知ラレタル者ハ精進可仕事候、

御(存知不カ)被成者モ依心入ハ精進仕、或ハ恐ヲ改、或世上

ヲ改、精進仕者モ可有之候、畢竟御(存カ)知ラレタル者計

致精進、御改不被遊者ハ不致精進候テモ不苦事候条、

面々心入次第可仕事候、

一 御先祖御存生之内、 御前近不罷出者致御寺參、御位

牌近キ所ニテ致拜礼者モ可有之候へトモ、別テ恐多事

候間、諸事御存生同前存其意ヲ以御位牌近クハ遠慮可

仕儀候、御側へ被召仕又ハ外様ニテモ能御存被成候訳

モ有之者格別候間、有来通拜礼可仕事ニ候、御寺參詣

一向無用被仰付儀ニテハ無之候条、參詣ノ儀ハ右ノ心

得ヲ以心入次第可有之候、

(朱書)同

九月廿日

五〇二四

(吉良美女)於糸様御儀、今度御願之上

(吉良)太守様御養娘御免被成候、

御取持御免様御同前、御名 御喜代様ト御改被成候、

五〇二五

一下田ハ港口ヨロシカラサル風波ノ節、難乗入或船及破

損、其上乗ヲトシノ船モ多、旁諸廻船ノ者共難儀仕由

相聞候付、御吟味ノ上浦賀港へ御番所被仰付候事、

一 諸廻船ノ儀ハ米穀ヲ始其外炭・薪・材木等無滞留運送

候様被仰出儀候間、向後植木台・庭石其外遊道具ノ類

積廻不申筈候条、此旨可被申付候、

子十二月

五〇二六

伊豆下田御番所相州浦賀港へ被引替候付テ、戸田山城守(忠真)

様ヨリ別紙之通被仰渡候、

(朱書)同六年丑

正月廿八日

(島津久豪)
李

五〇二七

一新銀六拾五匁 三種三荷代

一同四拾三匁 二種一荷代

一同二枚 天井折拾二合 御樽五荷代

一同一枚 天井折六合 御樽三荷代

一同二拾五匁 天井折三合 御樽二荷代

一同九匁一分

内、六匁手樽一荷代、三匁一分御着二折代、

一同一匁 中紙一束代

右ハ、何ソニ付進上物ノ節、現ニテ不差上、代銀上納

ノ節、右之通相定候、

一同四拾三匁 御馬代銀一枚

一錢一貫文 青銅百疋分

一新銀六匁 御馬代銀

一同三匁 青銅百疋代

右四行、御目見御役ノ御礼、且又年頭ノ進上等ノ節、

右之通相定候、

(朱書)同

閏七月廿日

五〇二八(の1)

(御触書寛保集成 九八九号)

養子イタシ候者、若養子ヲ返レ候儀有之時、最前養子イ

タシ候以後実子出生候共、其実子家督ニハ被仰付間敷候

間、又養子ヲ可奉願候、然共右返レ候養子何トソ行跡悪

敷候品有之候力、病氣ニテ決テ御奉公難ク成儀ニ相極ルリ、

養子返レ候ハ、頭支配トクト承届、実方ヘモ相守母、無相

違候ハ、其品申上頭支配ヨリ実子ヲ家督ニ可奉願候、輕

キ病氣又ハ養父ノ心ニ叶不申候一通リノ儀迄ニテ養子返

シ候跡ハ、実子ニ家督ハ被仰付間敷候、但、右実子御奉

公被仰付間敷トノ儀ニテ無之候、分知奉願候力、外ニ養

子ナトニ遣レ候儀ハ可為勝手次第候、以上、

寅五月

(五〇二八の2)

右之通、今度従 公義被仰渡候、

(朱書)同七年寅

六月

(島津久尙
将監)

五〇二九

一於久殿御事、今日於巖殿卜御名御改被成候、

(吉黄女)

五〇三〇

市来大日寺阿弥陀ノ儀ヲ御惣坊卜前々ヨリ唱来候付、元

来由緒有之、右通唱事候哉卜旧記等段々ニ相糺候処、往

古ニハ遍照寺・光明寺・来迎寺・引接寺ノ四ヶ寺御造管

ノ訳有之、四ヶ寺共ニ阿弥陀御女(空白)遍照寺本寺ノ訳ヲ以、

四ヶ寺ノ坊頭卜中心ニテ遍照寺儀惣坊卜唱、阿弥陀堂ヲ

御ノ字(衝カ)字ヲ付、御惣坊卜唱来ニテハ無之哉卜相聞得タル

迄ニテ、外ニ為差知由緒無之、慶長年中ニ遍照寺ヲ大日

寺卜為相改由、右之通為究由緒無之候付、御惣坊ノ唱ハ

此節ヨリ相止、大日寺阿弥陀卜唱候様被仰付候、且又額

ニモ御惣坊卜有之由候付、此度引取候様ニト申渡候、

(朱書)同
九月

(島津久尙
内記)

五〇三一

葵御紋ノ儀、染又ハ縫物・織物・蒔絵・諸道具等ニ至迄

付候事、男女共堅無用可仕旨、今度従 公義段々被仰渡

趣有之候、尤、葵御紋付ノ儀無之筈候へトモ、若以前ニ

致拝領罷在候者有之候ハ、消候テ用可申候、

(朱書)同八年卯

三月

将監

五〇三二

一石塔ノ文字箔ヲ込候儀、一切無用申付候、

一御右筆所ノ儀、御隠(密カ)蜜ノ御用モ有之候付、向後御之外(用脱カ)

堅出入仕間敷候、神文被仰付候節神文卜唱、又ハ書付

等ニモ神文卜記来候へトモ、向後誓詞卜唱、書付ニモ

誓詞卜書可申候、

(朱書)同九年辰

正月

(島津久尙
本)

五〇三三

一上方辺路へ出火有之節ハ上ノ定火消、其外ノ諸御役人

組ノ士末々ニ至早々駈付、下ノ人数ハ御城へ可罷出候、
一下方辺路右同断ノ節ハ下ノ定火消、其外右同断早々駈
付、上ノ人数ハ御城へ可罷出候、

一御城へ罷出候人数ハ火元承究、風並悪敷又ハ大火ニ可
成様子ニ候ハ、御家老へ得差図、火元相続可申候、勿

論鹿兒島出火ノ節、此内之通可相心得候、

(朱書)同
六月

(伊集院久矩)
藏人

五〇三四

只今迄ハ年頭御座配卜唱候へトモ、向後年頭御礼着座卜
唱、書付等ニモ其通可相記旨被仰渡候間、此段可被致通

達候、以上、

(朱書)同
七月

(高津久純)
大藏

五〇三五

一万石以上之人並寄合以上其外ノ面々、年頭又ハ屹立候
折目ニ供廻多過候、依之来年頭ヲ始自今屹立候折目ニ
テモ若党召列候儀、左之通被相定候、

一一万石以上、先供馬廻都合拾人、

一一万石以下ノ大身分・大御目付以上ノ御役人、右同七
人、

一独礼之格並大身分ノ嫡子、右同五六人、

一組頭・御番頭以上ノ御役人、右同四人、先供無用、

一御用人以下平日鍵持セ候御役人、右同三人、或二人、

一平日鍵不為持者ハ御役人ニテモ右同二人、或一人、

一大身分ノ外ハ一所持・寄合・寄合並ニテモ無役ノ者ハ、

千石以下ハ右同二人、或一人、千石以上ハ三人迄ハ不

苦、

一小番・大番無役ノ者ハ右同一人、右格ニテモ御役人ハ

二人迄ハ不苦、

右之通、相定候當時ノ儀ハ、公義ヨリモ供廻等ノ儀、

惣テ御減少ノ時節候間、此旨ヲ改、供定ノ上若党相重

召列候儀堅無用候、勿論右供定ノ人数ヨリ減候テ召列

候儀ハ勝手次第第二候、御役人ノ内与力有之者ハ右若党

ノ外ニ可召列候、尤、兼テ被仰渡置候通、年頭之外家

来へ上下着セ供ニ召列候事無用可仕候、此旨不洩様可

被致通達候、以上、

(朱書)同
十二月

藏人

五〇三六

吉 宗 豊 重

右之文字名乗之字ニ用候儀、向後無用可仕候、且又右之文字ニテ無之候テモ、ヨシ又ムネ・シケ・トヨト唱候字ハ、惣テ遠慮可仕ト改候ハ、心次第相改可然候、

(朱書)同十年巳

正月

大藏

五〇三七

(卷之三十七 二六〇五)

御本丸溜ノ間ノ儀、此節鷲ノ間ト被改額相懸候間、向後

鷲之間ト唱、書付等ニモ右之通可相記候、

(朱書)同十七日

二月

藏人

五〇三八

(卷之二九 一八四七)

同役ノ内同名有之節ハ新役ヨリ致名替事候ヘトモ、新役ニテモ拝領名ニテ候ハ、古役ノ者名替可申付候、古役・

新役共ニ拝領同名ニテ候ハ、其節ハ相伺可申候、

(朱書)同十七日

四月

(島津久憲 本)

五〇三九

(卷之四五 三三八五)

御家中大身・小身共御奉公モ難勤病身又ハ老体ニテ隠居ノ願モ不申出罷居候者多有之、頃日為御知之上願申出候者共モ多候、御奉公モ不仕老人罷成、右之願不申出儀ハ不氣付ト相見得候、致隠居候テモ其分限ニヨリ輕可致処、小身ノ者ニモ家督ノ厄害ニ成、隠居料多取候者モ有之候、(吉慶)総州様御隠居被遊候御様子ヲ輕キ者迄モ了簡仕、諸事致輕候様ニ 御沙汰モ有之候、

(朱書)同

九月十日

藏人

五〇四〇

丸ノ内ニ三ツ紋ハ遠目ニ葵ノ御紋ニ似候間可致遠慮候、急度改候儀、不勝手可有之候間漸々改可申候、当時付置候ヲ用候儀ハ不苦候間、此以後相調候衣服ヨリ改候様、支配中へ可被申渡者也、

(朱書)同

十一月十九日

五〇四一

(卷之三十七 二六〇六)

御下屋敷角辻番所 御厩角辻番所

右兩所、向後千石以上高役番所ト唱可申候、

(朱書「同」廿三日
十月)

五〇四二

一上春日ノ前ヨリ神明ノ方へ渡候橋ヲ境橋ト唱、書付等

ニモ其通可相記候、

一神明ヨリ祇園ノ方渡候橋ヲ抱真橋ト唱、書付等ニモ右

同断、

(朱書「同」一年午
五月)

(種子島久基
彈正)

五〇四三

(卷之四五 三三七六)

外城衆中・諸座付ノ者又ハ家来下人ノ内ヨリ芸能付テ鹿
兒島士被仰付候者共、此内ハ其身引次ヲ以子供迄モ永々
被召出、子孫迄モ鹿兒島士ニテ罷在儀候ヘトモ、自今以
後ハ子共代罷成御用相立候芸能モ無之者ハ本々ノ姿ニ可
被相返候、尤、至子共芸能有之御用ニモ相立候者ハ親引
次、鹿兒島士ニテ可被召置候、鹿兒島士ニ男三男迄太分
ノ人数ニテ、御人御不足モ無之候処ニ、無芸ノ子孫迄鹿
兒島士ニテ被召置候儀ハ無益ノ事候間、右体ノ子孫引次

ノ芸能有之者ハ勿論其身得方ノ芸能ヲ以御用ニ相立候程

ノ者ハ鹿兒島士ニテ可被差置候、

(朱書「同」
二月廿日)

(島津久基
本)

五〇四四

(卷之三 一九九八)

近年表医師ノ儀、座付士・外城衆中ニテ被仰付候処、鹿
兒島士座付士・外城衆中ノ分リナク、都テ表医師ト唱候
付、旁紛敷有之候間、向後鹿兒島士ヲ表医師ト唱、座付
士・外城衆中ヲ表寄番医師ト唱、奥医師ノ儀モ座付士・
外城衆中ハ右同前奥寄番医師ト唱、尤、当分相勤居候座付士ハ都テ早
速ヨリ表寄番・奥寄番医師ト唱可申候、
(朱書「同」
七月) (島津久基
中務)

五〇四五

御近習役以上之御役人へ御用ニ付差遣候書付ニ、譬ハ御
近習役衆・御用人衆杯ト衆ノ字ヲ用可然候、此儀屹被仰
渡事ニテ無之候、
御上下ノ節、御道中ニ相用候諸座幕、此内ハ白地ニ紋所
紺拔ニ被仰付置候ヘトモ、此以後新規ニ相調候幕ヨリハ

紺地白紋可申付候、御家中幕モ白地ニ被仰付置候ヘトモ、

是又染ノ儀、何色ニテモ向後心次第可仕候、尤、当分有

来候ヲ相用候儀ハ心次第可被付候、勿論御軍役ノ幕ハ何

ソ相替儀無之、有来通被仰付置候、且又関・小早諸御船

幕スソ黒ニテ候ヘトモ、スソ黒ノ儀ハ白ミノ分早損候付、

前々之通紺地ニ桐ノトウ御紋付被仰付候ハ、御勝手ノ方

ニ可有之候、弥其通被仰付儀候ハ、当分用候スソ黒ト白

ミノ分ヲ本ニ仕、桐ノトウ御紋相付候所ノ分ハ白上布少々

差(空白)□染調、黒ミノ分ヲ御紋ノ間々ニ切次相調替、幕ヲ新

出来被仰付度旨、於御船手吟味之趣申出奉伺吟味之通被

仰付候、
(朱書)同十三年申

二月

彈正

五〇四六

(朱書)享保十三年

一於カク事、此節(宗徳)御若子様御誕生ニ付、殿文字相付候

様ニト被仰出候、

(卷之二八 一七三八の1)

五〇四七

此節御入輿以後

(繼忠繁室)竹姫君様御事、

(繼豊)太守様ヨリハ

公義

並他所共ニ輿方ト相唱、御紙面ニモ輿方ト御唱被成筈候、

御使者ノ口上ニハ 竹姫君様ト唱申筈候、

(吉豊)総州様ヨリ 竹姫君様御事ニ付テハ御口上・御紙面共ニ

竹姫君様ト御唱被遊筈ニ候、

(朱書)同十四年酉

(島津八純)大藏

五〇四八

竹姫君様 御入輿被遊候以後モ 竹姫君様ト奉唱、書付

等ニモ同前ノ筈候、

(朱書)同十二月

大藏

五〇四九

(朱書)享保十四年酉

一於カク殿、只今迄ハ草ノ殿ノ字書来候ヘトモ、向後此

殿ノ字可相用候、

五〇五〇

(朱書)同

一於菟様御名 (綱貞女)於榮様ト被相改候、

五〇五一

(朱書)同十五年戊

一御側詰座ヲ龍之間ニ被仰付候、

一御側御用人御近習役座ニ相詰候様被仰付候、

一当分御側御用人座ハ明置申渡等ノ節、右座ニテ申渡候

様被仰付候、

五〇五二

生殺ノ事

一潮見坂

井取ノ事

一桜多尾

目クラホキ事

一杉ヶ谷

藤内ヶ字部

一桜谷

右之通、アサ名被相改候、

(朱書)享保十六年四月

(島津久憲) 李

五〇五三

一年頭

一八朔

右、進上物ハ有来通御馬代六匁、又ハ青銅代三匁進上

可仕候、

但、御目録(同様カ)銅様ノ儀ハ有来通、

一初テノ御目見

一家督

一繼目

一嫡子成

一養子成

一分地

一別立

一御役之御礼

一地頭職之御礼

右二付、御礼申上候節、今迄御太刀・銀馬代又ハ青銅・

御太刀進上仕来候へトモ、是又年頭・八朔同前、御太

刀一腰・御馬代六匁、青銅・御太刀進上ノ人ハ御太刀

一腰・青銅代三匁進上可仕候、

但、御目録銅様右同断、

一弓進上之人

右、現弓不及進上、御兵具所へ白木弓被納置候条、御

借物ニテ進上相済メ代銀三匁上納可仕候、

一諸寺院官成等ニ付テ進上ノ一束一本、自分不及調代銀

三匁上納可仕候、

一初テノ御目見・家督・繼目等、且又諸寺院入院其外

屹立候御礼之節、進上之中紙束ノ多少無構、都テ一匁

ツ、代銀上納可仕候、

一例年諸士御前進上ニハ二種一荷進上、重立候御礼ノ儀

ハ三種二荷進上被仰付候、

但、諸士ヨリ右何ニ付御祝儀進上物仕候儀有之候節

ハ、右進上物ノ格ヲ以其節ノ吟味次第増減被仰付筈

候、

一御領内御通路之節、地頭ヨリ青銅・御太刀進上仕来候

ヘトモ、御太刀一腰・青銅代三匁・二汁三菜ノ御膳可
差上候、

但、所ヨリ進上物二品差上候ハ、一種、一品差上候

ハ、品ヲ輕差上、近外城ヨリ進上物モ可準右ニ候、

一銀何枚ニテモ進上之節ハ一枚六匁ノ割ヲ以進上可仕候、

一金子百疋進上ノ節モ青銅同前、銀三匁進上可仕候、

一金一枚進上ノ節ハ銀拾枚ノ積候ヘハ銀一枚六匁ノ割ヲ

以進上可仕候、

一三匁御目錄進上仕候節ハ青銅^(金百)正、又ハ何ソ付品物進

上仕来候儀有之人ハ三部一二減候テ輕進上可仕候、

一益^(余禮)之助様ハ、進上物仕程ノ儀ハ品物員數共^(繼懸) 太守様御

同様二代銀上納可仕候、

一諸人互ノ祝物ノ太刀銀一枚ハ六匁、青銅ハ三匁ニテ可

相濟候、尤、品物之儀ハ只今迄致来候三部一二減候テ

可致贈答候、

右ハ、御格式之通進上物等被仰付答候ヘトモ、世振付

テハ諸人モ不勝手ノ時節候故、五六年ノ間右之通相減、

進上物並互ノ祝物等モ被仰付答候、

^(朱書)同十六年亥
四月

空

五〇五四

二男迄御直元服

島津兵庫殿^(久年)

島津玄蕃殿^(實懸)_{島津周防}

島津左衛門^(久患)

嫡子御直元服・二男御名代元服

島津大藏殿^(久丘)

島津図書^(久倫)

島津中務^(久患)

島津藤次郎

島津登殿^李

島津小平太

島津市太郎

新納四郎

島津筑後

嫡子御直元服

川上一学^(久東)

樺山主計殿^(久初)

桂太郎兵衛^(久患)

島津郷太夫

島津求馬殿

喜入主膳

町田郷九郎

伊集院藏人殿^(久懸)

島津帶刀^(仲休)

島津内記

北郷四郎

島津市太夫殿^(久懸)

島津弥市郎

大野七郎太夫

吉利李右衛門^(久剛)

島津内藏

伊集院德袈裟

種子島彈正殿^(久慈)

島津仁十郎殿

顯娃娃長左衛門

衞寝内記^(備方)

入来院主馬殿

比志島隼人殿

肝付典膳

菱刈孫兵衛^(重之)

諏訪次郎左衛門

畠山式部殿^(基明)

鎌田小藤次

伊勢兵部^(貞起)

義岡左平太^(久守)

島津彦太夫^(久眞)

島津右平太

島津登

(卷之二九 一八〇四)

川上縫殿(久映)

新納次郎四郎(久映)

樺山長太夫

五〇五六

(卷之四二 三二〇二)

新納五郎右衛門

町田宇右衛門

伊集院十藏

縁与離別ノ儀、最前願不相立取組候者モ、以後願相立候

山田新助(有從)

鎌田源左衛門

平田新左衛門

格二成候ハ、願可相立候、且又最初願相立取組居候者、

新納十郎

仁礼十兵衛

比志島仙太夫

以後願不相立格二罷成候ハ、願立不及候、

諏訪仲右衛門

土持新八

渋谷四郎左衛門

正月廿八日

(島津久純)

大藏

御名代元服

河田与右衛門

(三轉平太)
郷原金太夫

本田信次郎

五〇五七

(卷之三三 一三六二)

秩父十郎兵衛

肝付八郎左衛門

江戸詰付テ御家老間之道中二本道具・弓台一肩相持テ、

元服之御礼

桂仁治太郎(久映)

種子島織部(時成)

川上助六

其外手廻ハ右二準召列筈候、御役々ノ面々間之道中ノ節

本田六左衛門(朱書)同

高崎惣右衛門

(島津久憲)

心得二モ可罷成候間、此段申達候、

七月

(樺山久初)

主計

四月

五〇五八

五〇五五

(朱書)同十八年丑六月

御女子様御誕生、於菊様卜御名被進

候、菊ノ字遠慮、

(繼世雜筆)

自今以後致喧嘩候者及切腹候節、喧嘩ノ次第意趣親類共

得卜聞届、横目ヘモ申遣、意趣其場ノ次第横目ヘモ申聞

置可為致切腹候、若大形ノ儀有之候ハ、親類共可為越度

候、

(朱書)同
十二月

依願家跡不被相立者、家被召禿卜只今迄ハ大形相唱、書

付二モ其通相調候得共、依科家被召禿者依願家不被相立

五〇五九

(卷之四五 三三八二)

者モ被召禿卜唱、書付モ其通有之、同様ニ相聞如何ニ候、
向後ノ儀、依願家跡不被立者ハ願之通家跡不被相立卜唱、
書付ニモ其通相調、依料家被召禿候者ハ家被召禿卜唱、
書付モ其通相調可申候、且又御役料米差上度卜願候者、
願之通被召揚卜唱、書付ニモ其通相調候得共、是又依料
被召揚者同様候間、依願御役料差上候卜唱、書付等ニモ
相調候様可有之候、

(朱書)同十八年丑)

六月

(島津久眞)
中務

五〇六〇

(卷之四一 二九七四)

初テノ 御目見願出候者、縦ハ親医師ニテ子共医道ヲ致
相伝存念ニテ幼少ヨリ稽古為致候者ハ申出ニ不及剃髮為
致置、初テ 御目見願之節右之訳可申出候、右医師ニ準
候者有之候ハ、同前可相心得候、且又親俗体ニテ子共ノ
内剃髮願可有来通候、

(朱書)同十七日

十月

主計

五〇六一

一 三道中急御使参着ノ日数十九日ニ被定置候、御定ヨリ

早致着候者ハ日数十四日ヨリ内着ノ日数ニ応シ、段々
御褒美ノ被下方被定置、道中川水相増通路絶候時、其
外何ソニ付無抛故障有之相滞候節ハ証文取来刻割差引
有之候ヘトモ、向後ハ日数十七日ニ致着候者ヨリ御褒
美被下之候条、大坂ニテ御用筋付テノ滞ハ如有来御留
守居証文可取来候、此外川支又ハ何ソ付滞有之候トモ
不被相立候間、証文取来ニ不及候、尤、御定日数相過
致着候ハ、如御法御賦銀之内返上之事候、急御使頃日
相滞候付、右之通被仰付事候条、随分無遅滞様心掛可
罷通候、

一 中急御使参着ノ日数廿二日半ニ被定置候、大坂ニテ御
用ニ付滞付証文取来候儀並川支其外ノ証文不被相立儀、
又ハ御定日数相過致着候節御賦銀返上之儀、前条同類
ニ付中急ハ船中被差越事候条、往来共ニ小倉着ノ証文
ハ此内之通可取来候、

(朱書)同

十一月廿三日

主計

五〇六二

中急御使飛脚日数定

(卷之二〇 一一六八)

一 鹿兒島ヨリ小倉迄、日数七日

一 船中、日数七日

但、日数七日半ニ被定置候へトモ、半日被相減候、

一 東海道日数八日

合日数廿二日、

但、日数廿二日半ニ被定置候へトモ、此節ヨリ船中

日数被相減、右之通被相定候、

三道中急御使飛脚日数定

一 鹿兒島ヨリ小倉迄、日数四日半

但、日数五日ニ被定置候へトモ、半日被相減候、

一 中国路日数七日半

但、日数八日ニ被定置候へトモ、半日被相減候、

一 東海道日数六日

合日数十八日、

但、日数十九日ニ被定置候へトモ、此節ヨリ小倉・

中国路日数之内半日ツ、被相減、右之通被相定候、

右之通、急・中急御使飛脚ノ日数定、此節ヨリ右之通

被相替候、道中・船中御賦方ノ内、応日数为被定置モ

有之候へトモ、御使飛脚御賦方ハ此内之通被下置候、

(朱書「同」)
十二月三日

(權山久初)
主計

五〇六三

(卷之四三 三三二九)

御前へ差上候書付ニ誰奥又ハ内妻ト書付差上来候、向後

ハ夫婦ノ内於 御前殿ノ字唱候妻ヲ内ト書付、其外ハ誰

ニテモ妻ト書付可差上候、

(朱書「同十九年」)
正月

主計

五〇六四

(卷之四三 三三三〇)

諸座諸書付ニ御近習役以上之御役ハ、其御役人仮名ニ殿

文字用候程ノ儀ニハ雖為証文御役名ニ衆ノ文字可相付候、

右以下ノ御役人ニハ、其御役人ノ仮名ニハ殿文字相付儀

ニハ、(御役名ニハ)衆ノ文字相付ニ不及候、

(朱書「同」)廿四日
五月

(島津久貞)
中務

五〇六五

(卷之四五 三三八一)

大馬場ト三字ニ書名字ノ者、都テ大場ト二字ニ相改候様

被仰付候、

芸能ニテ鹿兒島士被仰付儀ニ付テハ先年被仰出趣有之候、

芸能ニテ士ニ被召出候者ハ其子モ親同前ノ芸ヲ可致候、

若親同前ノ儀ヲ別テ難致訊モ有之候者ハ何芸ニテモ御用

ニ相立候芸ヲ可致候、

七月

(島津久純)
大藏

五〇六六

御勝手方

(朱書)「カク」
異国方

(朱書)「トコロ」
寺社奉行所 御番頭詰所

御近習役所

(朱書)「シヨ」
御使番役所

(朱書)「シヨ」
高奉行所 御目付役所

磯奉行役所

(朱書)「シヨ」
郡方

(朱書)「ホウ」
金山方 屋久島方

代官所

(朱書)「シヨ」
御書院方

右之通唱、書付等ニモ致候様被仰付候、

七月

大藏

五〇六七

(卷之二九 一八五〇)

大御目付以上之御役被仰付候節、鹿兒島ハ勿論外城モ同

名之者名替致事候、然共以後大御目付御役ノ儀ハ同名有

之候共名替致ニ不及、支配下ノ者ハ可致名替候、

七月

大藏

五〇六八

(卷之四四 三三〇三)

御側御家老座、此節ヨリ表御家老座打込ニテ、一ツ座ニ

被仰付候、

諸士高相求高直申出候者、拝借取込等有之候テモ高直御

免被成候ヘトモ、向後拝借取込等有之、皆返上不相濟内

ハ高直御免被成間敷候、

九月

(堀興昌)
四郎太夫

五〇六九

(朱書)「同廿年卯九月」
御厩別当之事、御馬方、

右之通、御役名被相改候、

五〇七〇

(卷之五〇 三八五六)

若年寄加役

一御連歌御作代ノ首尾、

一鹿兒島士養子月延願ノ首尾、

一鹿兒島士外城養子御免ノ者月延願ノ首尾、

一月次御礼出仕御断申出候首尾、

一定筆者申渡候首尾、

▽一定与内申渡候首尾、△

一御番帳仕付ノ首尾、

一湯治御暇願ノ首尾、

右之通、加役被仰付候、右之内御家老名書ニテ申渡来

候儀ハ致其通、首尾ハ若年寄ヨリ致候様被仰付候、

(朱書)同八月
九月 (島津久純)
大蔵

五〇七一 (卷之四六 三四二九)

小普請又ハ小普請並ニ被仰付置候者ノ子共其外家内札ノ

者、此節ヨリ諸御奉公方不被仰付候、嫡子為物馴御番勤

候儀モ不被仰付候、当時御奉公方勤居候者ハ可差免候、

家中へ致奉公候儀ハ御構無之、

(朱書)同
十二月 (島津久憲)
左

五〇七二

(朱書)同廿一年辰正月廿四日

御家老座へ島津(黄旗)垂水玄蕃殿御出勤被仰付候付テ、格式ハ格別、

平生ハ御家老出入口ヨリ御出入被成候、御目付出迎不及

候、

五〇七三

(宗信)益之助様御抱守ヲ御小納戸役卜此節被相改候、

(吉豊)総州様当分御付被遊候花桐丸御紋藤之丸杯ニモ似寄候間

可致遠慮旨、先達テ致通達置候、左右ノ花下り藤ノ様ニ

テ丸中ニ桐ノ葉有之御紋ニテ候、依之藤ノ丸・藤巴杯ノ

様成ハ不及遠慮候、其外御紋ニ似寄候ハ、可致遠慮候、

(朱書)同廿一年
三月

左

五〇七四

(朱書)同三月七日

菊之紋付来候者ハ可致遠慮候、菊ニ紛敷紋モ遠慮、

五〇七五

(卷之四二 三〇九三)

一御側方支配月次御礼罷出候御役人、御用ニ付外城行被

仰付、又ハ湯治御暇其外自分用事ニ付御暇ニテ田舎へ

罷候節ハ何日ヨリ罷越候段御側御用人座へ罷出、御側

御用人・御近習役ノ内へ可申出置候、罷帰候節モ翌日

右御座へ罷出、罷帰候段可申出候、尤、表御用人へ相

付申出候儀ハ早晚之通相心得可罷居候、

江戸詰又ハ他所へ御用ニ付罷越候節モ右同断ノ首尾可

相心得候、

(朱書)同

四月

四郎太夫
空

五〇七九

(朱書)元文元年十月、空
御女性様卜書付、唱ニモ仕候得共、向後御女中様卜唱、

(卷之四三 三三三二)

書付等ニモ致候様可被通候、

五〇七六

益之助様、三月十八日御中剃、御名又三郎様、御実名忠

頭様、

五〇八〇

江戸御国元御使御賦、三人賦ヨリ五人賦迄ハ都テ急料、

五〇七七

旅ノ御奉公罷出候御役人刀筒為持候儀、持合候ハ、勝手

次第可為持事候、持合無之候ハ、親規ニ相調、又ハ致才

(新カ)

覚為持候ニ及間敷候、持合候モ為持間敷被存候者ハ是又

勝手次第事候由、御意之趣承知仕候、

(朱書)同
五月三日 本田六左衛門

五〇七八

天井折卜唱候儀、本不相究事候間、向後ハ天井ノ二字ヲ

相除折卜唱、書留ニモ其通可致候、

(朱書)元文元年

八月

空

一六人賦以上ハ被定置候通現人数迄急料被下、其外ハ静

料被下候、

一急御使御定日数十八日参着候ハ、御賦無差引、十九日

ヨリハ御賦割ヲ以応日数返上可申付候、十八日ヨリ内
参着仕候者ハ御褒美被下来候ヘトモ、右御褒美引替

応日数御賦銀割可被下候、

一 中急御使日数廿二日被相定候、廿二日参着候ハ、御賦

無差引、廿三日ヨリハ御賦割ヲ以応日数返上可申付候、

廿二日ヨリ内参着候ハ、応日数御賦銀割可被下候、

一 急キ・中急キ共二右之通被相定候間、三道中御賦銀相

渡、海陸心次第可相通候、船中参候テモ船賃料ハ不被

下候、

右ハ、以前ハ三人賦ノ者御使被差越候節ハ下人不召列

者無之候ヘトモ、近年三人賦ノ者御使ニハ下人不召列

事候様ニ相成候付、一人ハ静料被下候、御儉約ニテ御

賦ノ内静料被下事ニテ無之候、

(朱書)〔元元年〕
十二月

(島津久實)
主殿

五〇八一 (卷之三七 二五四八)

御礼所之次第

一 一所持・一所持格・寄合・寄合之嫡子、敷舞台末ヨリ

三枚目、

一 御用人・町奉行・御近習役・寄合並・寄合並之嫡子、

二枚目、

一 一所持・一所持格・寄合・寄合並之二男三男右同断、

次第不同、

一 右引次、御留守居以下諸御役人同席、

一 御家老致対面候節ハ寄合並ヨリ寄合並以上之二男三男

ハ笛柱ヨリ後、絵図面押札之通可罷出候、

右之通、此節被相改候、

(朱書)〔同〕
十二月十九日

主殿

五〇八二

諸御役正月八日ヨリ十四日迄ハ不洗物・麻上下着用致来

候ヘトモ、来正月八日ヨリ向後平服ニ被仰付候、十一日

十五日ノ儀ハ有来通可相心得候、

(朱書)〔同〕
十二月廿八日

(政二)
小林中太兵衛

五〇八三 (卷之三〇 一八七三)

一 御元祖御二男周防守忠綱家中絶候故、右家壮之助殿へ

相続被仰付候、高一万石被下、居屋敷ハ御用屋敷ヲ被

下候、

一家格連名ハ島津善次郎殿上ニ被仰付候、

(継替、重子)

一 当分之座席(島津實徳)玄蕃殿・壮之助殿・善次郎殿ト被仰付候、

一 紋所十文字被用筥候、

一 名字島津ト被名乗筥候、

一 右屋敷へ被引移候テヨリ家格之通諸事被致筥候、今程

ハ先此内之通ノ筥候、

(朱書)同二年
三月

主殿

五〇八四

(朱書)元文二年四月十七日 主計
壮之助殿屋敷辺本御内ト唱来候ヘトモ、此節鼓川ト被相

改候、此内ノ鼓川ハ本鼓川ト可唱候、

五〇八五

(卷之四七 三五八一)

御太刀進上之節、御太刀一腰・御馬一疋ト御目録書記候

モ有之、又ハ御太刀一腰・青銅百疋ト書候者モ有之候、

向後御太刀進上仕候程ノ者ハ都テ御太刀一腰・御馬一疋

ト御目録ニ書調、御馬代ノ儀ハ御定之通可相納候、

(朱書)同
四月

(禰山久初)
主計

五〇八六

(卷之四九 三六九七)

病氣ニテ及百日不致出勤候ハ、御役人・小役人・輕御扶

持人迄モ其頭々へ届可申出候、又其上ニモ百日ニ及候節

ハ又々可申出候、

(朱書)同
四月

(主殿)
主計

五〇八七

(卷之四三 三三四一)

諸人取替之目録、青銅・太刀之節ハ太刀一腰・青銅百疋

ト認来候ヘトモ、向後青銅・太刀ニテモ銀馬代同断ニ太

刀一腰・馬一疋ト目録可相認候、

(朱書)同
五月

主計

五〇八八

外城ヨリ鹿兒島士養子罷成候者、向後ノ儀外城ニテ持高

致所持、直ニ其高持出候者迄ヲ御免可被仰付候、無高二

テモ無抛血筋又ハ為差立諷有之、願之依趣ハ被仰付儀モ

可有之候、

(朱書)同
五月

主殿

五〇八九

元服ニ付テ (宗信) 又三郎様へ (繼豊) 太守様御同様之品代銀上納有

来候へトモ、向後家格之通御太刀・馬代ニ、三種二荷・

二種一荷被定置候代銀ニテ進上可有之候、

(朱書)同 十月 (榊山久初) 主計

五〇九〇

入道号之儀、高位之人外ハ相用敷事候、当分ハ猶以遠

慮仕筈候処、石塔類ニ入道ト相記候事間々有之候条、向

後堅可為無用候、享保十七年以来石塔其外記置候入道号

ハ可消除候、

(朱書)同 十二月

主計

五〇九一

一万石以上ハ馬代銀一枚

一五千石ヨリ九千石迄馬代銀十二匁

一五千石以下ハ馬代銀六匁

右之通、向後年頭・八朔進上被仰付候、其外身ニ付家

筋ニ付テハ御礼等申上候節、進上馬代銀員数ノ儀ハ被

(卷之四七 三三七三)

定置候通可有之候、

(朱書)同三年 正月 (八日)

(島津久純) 大藏

五〇九二

(卷之三三 一二二五五)

一異国船御手当付テ、御領内惣人数、大身分・御家老ヲ

始与中ノ面々惣手ノ相印、前立物三寸五部ノ角々落シ、

金ミカキ黒漆、一文字書、

但、脇立物ハ面々好次第、

一笠印・袖印・腰印、地白、幅六寸、長八寸四部、上二

ニツ引、下山道一筋、中紋所、

但、ニツ引山道紋所、紺染出、地合何ニテモ不苦候、

一指物ハ六組ニテ色替可相定候、一番組白地ニ紺染出ノ

紋所、二番組紺地ニ白紋、三番梅地ニ紺染出紋、四番

浅黄ニ梅色染之紋、五番トキ地ニ紺染出シノ紋、六番

白浅黄染分ケニ紺染出ノ紋、

但、染分ハ半分、上白下浅黄、

右、色立ニテ面々定紋付、一幅四半ニニツ引、地色ニ

不紛様ニイタシ、其下ニ紋所相付出シノ儀ハ、面々好

次第定紋相付候へハ出シ無之候テモ相濟事ニ候、

但、四半ニ幅一尺二ハ長一尺五寸ノ賦ニテ候間、右割合ノ尺ニテ可相調候、地合同斷、

右、前立物印ノ儀ハ外城衆中・又者迄モ一同ノ立物印相用申筈候、

一御家老組之面々、指物ノ儀ハ御用ノ節ニ至リ色立等ノ儀被仰渡筈候、

右之通、此節被相定候間、具足持合候人ハ漸々不事立様調替可申候、尤、以後具足調候人モ其通相調候様通

達可有之候、

(朱書)同
正月

(島津久實)
主殿

五〇九三

(卷之三十七 二五五〇)

聳養子罷成候者、無扨訊ニテ養子違變御免被仰付、本家

ニ立帰候節、養父方ニテ御目見致候テモ、本家ニテ初テノ御目見不相濟者ハ与頭調ノ上御目見願申出候様、

正徳三年巳八月御格被定置候ヘトモ、本家並養父方ニテ一度初テノ御目見相濟候者ハ本家ニ立帰候以後又ハ初

テノ御目見願申出不及候、此外ノ儀ハ先格相替候儀無之候、

(朱書)同三年午
十月(朱書)「四日」

(顯株久胤)
左京

五〇九四

島津玄蕃殿(實徳) 島津壯之助殿(忠紀) 島津兵庫殿(久門)

右、只今迄御間柄ノ故ヲ以格式相替候ヘトモ、向後八段ヲ被相替一所持ノ列相離候様被仰付候、

島津図書

右ハ、島津左衛門・島津周防・島津筑後、右三人之通諸

事ノ儀被仰付候間、右格ニ致座席ハ周防次筑後上ノ筈候、

(朱書)同
十一月(朱書)「十二日」

左京

五〇九五

(卷之三十七 二六八三)

御当地ニテハ万石以上乗物御免被成候、玄蕃殿・壯之助

殿・兵庫殿家格ハ部屋栖迄モ御免被成候、其外ハ家督計年生之無構御免被成候、万石以下大身分・大御目付以上

ハ五拾歳罷成候ハ、乗物被成御免候、大御目付以下之御役相勤居候テ万石以上年生無構被成御免候、且又大御目

付以下ニテモ五拾歳以上罷成、於江戸乗物御願被下程ノ者ハ御当地ニテモ願出次第可被成御免候、尤、於江戸被

成御免置候者御当地ニテ猶以被成御免候、
〔朱書〕同
十二月〔廿八日〕
〔廿六日〕
〔高津久純〕
大蔵

五〇九六 (卷之三十一 一九九三)

医師ノ儀ハ忌中ニテモ無扱療治相頼、尤、見廻候儀不苦候、御医師ノ儀、勤ハ遠慮仕、脇方病用付療治相頼見廻

候儀不苦候、

〔朱書〕同四年末
三月〔朱書〕「三日」

〔顯姓久周〕
左京

五〇九七 (卷之七 三七九)

〔朱書〕元文四年三月十五日 左京

島津壯之助殿私領、惣名重富卜被名付候、

五〇九八 (卷之二八 一七六一)

〔吉貴朝室〕 於須磨様 於德様
〔綱貴朝室〕 於栄様
〔吉貴室〕 於徳様御実子ニ被成度旨被仰進、其通去廿

御前様ヨリ 於徳様御実子ニ被成度旨被仰進、其通去廿

四日於磯 於徳様へ御直被遊 御意候、向後様ノ字相用、

御名ノ次第右之通書付等ニモ相調管候、

〔朱書〕同
四月 大蔵

五〇九九

〔朱書〕同五月十五日 左京
島津壯之助殿屋敷上築地有之候、其屋敷近辺鶴江崎卜唱

可申候、

五一〇〇

〔朱書〕同
以前ヨリ 御城下御普請方被建立候築地ヲ築出卜唱候付、

向後築地卜唱、祇園前ノ築地ハ新築卜唱可申候、

五一〇一

〔實徳〕 島津玄蕃殿 島津壯之助殿 島津兵庫殿
〔忠純〕

右ハ、玄蕃殿・兵庫殿御内証ニテ 御目見又ハ御奥へ被

為通候節、只今迄ハ諸人同前脇差ヲ御近習番所又ハ納殿

へ被為置候、右三人ハ格別ノ家柄候間、向後 御目通ニ

被罷出候涯ニテ無腰ニテ被罷出候様可被致候、尤、御奥

へ参上ノ節モ御座次ノ間迄脇差ヲ被差可被罷出候、

但、壯之助殿儀ハ当分御丸ノ内ニ被成御座候故、当時

ハ右同様ニ無之候、以後鼓川御屋敷へ被引越、諸事ノ

儀家格之通被致候節ヨリ右之通可致候、

〔朱書〕同
五月〔朱書〕「廿八日」

左京

五一〇二

玄蕃殿 壮之助殿 兵庫殿

右三人ノ儀ハ御城下下乗札場乘輿可被致、御城下御門前

被罷通候節モ不及下乗、御登城之節ハ御門前迄乘輿可

被致候、且又磯御屋敷ハ龍洞院下乗場不及下乗可被罷通

候、壮之助殿御事ハ当分御丸ノ内ニ被成御座候間、以後

鼓川御屋敷へ被引移候節、右通可有之候、

(朱書)同 五月廿八日

(行間朱書)「本行中通御目付河野仲太夫ヨリ承候、」

五一〇三

又三郎様御儀、今月四日松平之 御称号御拝領、御代々

御嫡子様ハ松平御免、

五一〇四

(朱書)同十一月廿二日 左

五日靈龍院様御忌日ニテ候間、御祝儀事並進上物ノ儀不

被仰付候、

又三郎様、薩摩守様ト御改、御実名宗信公ト被改候、

五一〇五

一御光儀願

一御役・地頭職ノ御礼

一御直元服・御名代元服並御前元服、又ハ元服ノ御礼、

初テノ 御目見願

右ハ、御近習役迄ハ杉原以上ノ紙用候様被仰付置候間、

有来通石ケ条ノ願申出候砌ハ堅紙ニ相認可申出候、此

外申出候事ハ文言長短ニヨリ切紙モ用、手袖有之候様

可相認候、下紙類龜相ノ儀ニテモ不苦候条、寄々可致

通達候、

(朱書)同五年 三月(八日)

(行間朱書) 三月(八日)

「本文先達テ申渡候通達ニ家督・繼目御礼願ノケ条相洩

候付、是又可致通達候、

小林(政)中太兵衛」

五一〇六

(朱書)同五年申五月 織部

一薩州様へ 御与組被仰出候尾張様御息女様、御名 房

姫様ト奉申候、

(卷之四三 三三三六)

五一〇七

一築地御屋敷御門前、此節出来ノ橋、仮橋ト唱可申候、

見届候儀共ハ有来通候、
八月〔朱書〕「晦日」

〔樺山久初〕
主計

五一〇八

一物頭杯ヨリ御目付へ遣候書付等ニハ衆ノ字可相付事候、

一御光儀願

五一一一

〔卷之四一 二九七九〕

御家老衆杯ヨリ被遣候格合ニ有之、物頭杯ヨリノ書付

一御役・地頭職ノ御礼

ニハ籠礼ニ相見得候由御沙汰有之候、

一御直元服

書付ニ御使便ヨリ又ハ飛脚使ヨリトヨリノ字相用間敷

一御名代元服並御前元服、又ハ元服ノ御礼、初テノ御

候、向後御使便ニ・飛脚使ニト可書調候、

目見願

〔朱書〕寛保元年酉
十二月

〔便力〕
島津久憲
空

一家督・継目御礼願

五一〇九

一旧臘十一日 薩州様御前髪御究被遊候、

右ケ条ノ儀ハ有来通堅紙可相用候、其外申出候書付ハ
文言長短ニヨリ切紙可相守候、堅紙ニテ申出候者有之
候ハ、取次ノ御用人ヨリ時々申聞可為相直候、

一永吉村ノ内、徳姫様御野屋敷、田面崎御屋敷ト唱候様

〔吉敷玄〕
〔朱書〕同三年亥
十二月

〔島津久憲〕
大蔵

被仰付候、

五一一二

〔卷之四六 三四四九〕

五一一〇

寺入ノ御科目、自今被相止候、此跡寺入相当ノ御各目ハ

御先祖様御忌日又ハ御正忌日ニ誓詞被仰付間敷旨、以前

逼塞、諸事寺入輕重ニ準候様ニ被仰付候、赦免ノ節月代

ヨリ段々被仰渡置候モ有之候ヘトモ、向後毎月十七日計
誓詞不被仰付、其外都テ御精進日誓詞被仰付候儀不苦候、

(朱書)同「廿二日」
十二月

(島津久甫)
左衛門

五一一三

一三次郎殿事、和泉家名跡、(吉貫) 総州様御三男被立、島津之

御称号拝領、一門ノ列被仰付、家格之儀ハ玄蕃殿次ニ

被仰付候、当分ノ座席ハ玄蕃殿・周防殿・三次郎殿・

兵庫殿ノ筈候、

一磯付御高一万六千石拝領被成筈候、

一一所之地拝領被成筈候、

一紋所ノ儀、十文字・桐ノ丸被付候、

(朱書)「延享元年」
五月(朱書)「廿五日」 大蔵

五一一四

一上築地ノ儀、向後鶴江崎築地ト唱可申候、

五一一五

三日 月桂院様御忌日ニテ、屹ト御精進日ト被相立不及

候、(難意) 太守様・総州様へ御看進上、御祝儀事申上候儀無

用、御役人杯自分祝事無用可然候、

(朱書)同「十九日」
七月(朱書)「十九日」

(島津久家)
左

五一一六

一三次郎殿へ願娃・指宿ノ内被下之、今和泉ト可唱旨、

於磯 御直被仰出候、

五一一七

一安之助殿、衾寝家依猶子本家小松称号被相用候様ニト

江戸ヨリ御袖判御書付被差越、從 総州様衾寝孫左衛

門へ御直ニ御意、右之御書付安之助殿名代ニ頂戴ニテ

候、且又 総州様御隠居之節ヨリ被遊御用候桐ノ丸御

紋拝領、小松称号並右御紋嫡子計ニテ、孫左衛門儀ハ

只今之通衾寝名字ニテ候、

(朱書)同「十二年」
二月(朱書)「廿三日」

(種子島時成後北条時守)
織部

五一一八

(卷之四一 二九七七)

縁与又ハ離別願之儀、向後左之通被仰付候、

一親御側方支配ノ者ニテ子表方支配ノ勤有之者へ縁与又

ハ離別願申出候ハ、子ノ方支配頭へ内意申出候上ニ

テ親支配ノ御側方ヘ相付願書可差出候、

五二〇

一親表方支配ノ者ニテ子御側方支配ノ勤有之者ヘ縁与又

一寄合並以上ノ面々、妾腹ニ出生ノ直子札願、向後札改

ハ離別願申出候ハ、子ノ方支配頭ヘ内意申出候上ニ

間ニ御勘定奉行ヘ相付願可被申出候、

テ親支配ノ表方ヘ相付願書可差出候、

一諸士妾腹ニ出生ノ直子札願モ前条同類、

右願書、与頭次書ヲ以、聳之親祖父ニテモ家督之支配

但、外城衆中ノ儀モ右ニ可準候、

頭ヘ双方共ニ可申出候、

十二月

(備山久初主計)

一御側方支配ノ御役人子共、男女共ニ縁与又ハ離別ニ付

御内意申上候儀ハ此内之通候、

五二二

(朱書)同
四月

(島津久家)
李

一納殿役人 御記録奉行 御普請奉行 物奉行

五一九

組頭ヘ

御小納戸 御目付 御右筆 御祈念方

本渡辺名字之権右衛門事、依科名跡被召禿候、叔父渡辺

右御役ノ内御賦被下置候者、乘馬相立ニ不及候、十人

作左衛門事、権右衛門家内ニ召居、親族御咎目無之者ニ

ノ御賦ハ被下、乘馬一人ノ飼料ハ不被下候、

候ヘトモ、右体ノ者ハ別立並養子成御奉公方向後不被仰

右御役ノ内御跡乘又ハ御使者火事ノ節、駈付等ノ勤致

付候、以後士名跡被召禿候者之家内罷居候者ハ親族御咎

シ候節ハ御借馬可被仰付候、

目不依有無組帳可被相除候、右次第候ヘハ親類家内二片

(朱書)同三頁
七月

(鎌田政直)
太郎右衛門

付筭候、然ハ家来同前之儀候、名字名乗候儀ハ無御構候、

(朱書)同
六月

(島津久甫)
左衛門

五二二二

(朱書)同三寅十二月廿三日 右平太

一御台所後二 (羅島御室、宗信美母) 於嘉久様御家作被仰付候間、山下御用屋敷卜可相唱候、
(朱書)同四卯四月十二日 同人)

五二二三

一山下御用屋敷ノ儀、向後山下御屋敷卜可相唱候、五節句・月並御礼日御出座刻限四ツ半時、右之通被仰出候、

(朱書)同六月

(種子島時成後北条時守) 織部

五二二四

御一門ヨリ寄合並御役人以上組(縁力)与願有来通、右外ノ御役人並無役二百石以上向後組与願申出不及候、

(朱書)同五二月

左衛門

五二二五

御側御用人へ養子違変願又ハ縁与離別願申出候節、今一往致異見難遂段承届願出候様ニト申渡書物相返御格二候へトモ、最初願出節、難遂訳承届候上ニテ願申出答候条、向後ハ一度願出候節ノ書物取揚差出候様被仰付候、

(朱書)同二月

左衛門

(平田正補) 掃部

五二二六

(卷之四〇 二九二七)

手札紛失・虫付・焼失・疵付等ノ節、同断書物、諸士ハ筋々ノ次書・与頭奥書ヲ以申出来候へトモ、向後ハ其身書物等直ニ御勘定所へ差出、組頭へハ首尾迄ヲ可申出候、直子札・母札願ハ有来通可申出候、

一右同断ノ節、外城衆中ハ筋々ノ次書・地頭奥書ヲ以申出来候へトモ、向後其身書物直ニ御勘定所へ差出、地頭へハ首尾迄ヲ可申出候、直子札・母札願ハ有来通可申出候、

(朱書)同 一右外右体ノ通ハ有来通、

(朱書)同 二月(朱書)「廿九日」

左衛門

五二二七

(卷之四二 三二二二)

一小番・大番悴へ代番願ノ儀、御家老承届差免事候へトモ、以後ノ儀、当番之節差支候者ハ不及願、小番ハ嫡子又ハ小番之内名代番、大番ハ嫡子・二男・三男又ハ

大番ノ内名代番被仰付候、

但、一代小番・新番ハ嫡子名代番不被仰付候、同格ノ者、名代番可差出候、

一諸所へ勤方ニ付引越候者、田舎入御暇被下置候者ノ子共、角入・前髮取之願、初テノ御目見相濟、勢ヒ相応ニ相見得候者ハ御当地へ差越不及、其所ヨリ与頭へ相付願可申出候、見分ニ不及何分ニモ可申渡候、

一諸人御礼願等屹卜立候豎紙、其外ノ儀ハ文言依長短豎紙・横紙相用候様被仰渡置候へトモ、向後豎紙・横紙

勝手次第可相用候、

(朱書)同
四月

(島津久純)
大藏

五二一八

筆者・小役人御役座勤方ニ付テ無調法有之、御科目ノ節ハ奉行・頭人へ申渡、赦免見届ノ儀モ可為奉行・頭人候、身ニ付テノ御科目、家内ノ者右同断ノ節ハ組頭へ申渡、赦免見届モ可為与頭候、

(朱書)同
十月

(実悠)
菱刈孫兵衛

五二二九

(朱書)同十月 矢柄

靈龍院様御位牌、当三月瑞輪寺火災ノ節御焼失、此節大円寺へ御安置、

五三〇

(朱書)同(巳)四月 主計

一今度 (宗信) 太守様へ御縁与被仰出候尾張様御息女様、嘉知姫様卜奉申候、

五三二

(朱書)同(十二)月 同人

一御用ニ付差出候諸書付、向後月日付、片ニ其年ノ十二支相記可差出候、

五三三

十六日 廿六日

右、毎月御内々御精進、表立テ御看進上・御祝儀事等

不苦、

八日朝計 十日 十四日 十七日 廿日朝計

廿四日右同 晦日 但、小ノ月ハ廿九日

右、公義御精進日、

五日朝計 七日 十日 十七日朝計

右、毎月御精進日、

(朱書「寛延三」)
正月

(鎌田政昌)
典膳

右付、奏者番ノ儀モ被仰渡置候ヘトモ、熨斗目・半上
下着用被仰付候、

右ハ、為差立御礼事候間、以前之通被仰付候、

(朱書「同四未」)
七月

典膳

五一三三

(朱書「同六月 主殿」)
寛保二戌八月ヨリ寺入御咎日被相止候ヘトモ、遠方寺入

御咎目ハ以前之通被建置候、

五一三四

一御役・地頭職之御礼

一初テノ御目見

一家督・継目之御礼

右御目見被仰付候節、去ル辰年ヨリ五ヶ年中ハ熨斗目・

長上下不及着用旨被仰渡置候ヘトモ、以前之通被仰付

候、

一元服人支度ノ儀ハ有来通候ヘトモ、理髮御家老支度長

上下不及旨被仰渡置候、是又以前之通被仰付、元服人

親御礼支度ノ儀モ以前之通被仰付候、

五〇三五

(朱書「同八月 相馬」)
毎月廿日諸事ノ儀、晦日同前被仰付候、

五一三六

一御小姓御役弓進上以上ノ者、初テノ 御目見奉願候者

ノ内弓進上之致進上物候家筋ノ者ハ於御書院御礼被仰

付候、右御役中紙致進上候者ハ進上物相納、御礼相濟

候筋ニ被仰付候、

一右之通候故、御側廻並表方諸御役人家督・継目・養子

成等ノ御礼申上候節モ弓以上ハ於御書院御礼被仰付、

中紙進上致候者ハ進上物相納、御礼相濟候筋被仰付候、

右之通、去ル丑年被相定候、

(朱書「同未」)
九月(朱書「十九日」)

内記

五三三七

一 鳥津因幡殿(忠懸)

右ハ、先年和泉家相統、家格ヲモ結構被仰付、御高一
万千二十八石余、私領今和泉・佐多ノ内櫛植場・田代
ノ内狩倉、磯御屋敷ニモ被下置候処、当分ノ家来ニテ
未家格勤不相調候、因幡殿幼年故鳥津(貞徳)備中殿ヨリ御先
代ニ段々被願出置候趣有之候、然共先キ様家格ノ勤ヲ
モ可被致儀候故、御高並私領ノ儀ハ当分ノ通被下置候、
佐多之内櫛植場ハ被差上候様被仰付候、現高モ有之候
ハ、其分ハ返地可被下候、田代之内狩倉ノ儀ハ追テ
何分ニモ可被仰付候、居屋敷ノ儀拜領ノ事候ヘトモ、
以前ヨリ御仮屋敷ニ候ヘトモ被差上候様被仰付、磯内
へ懸持屋敷一ヶ所可被下置候、居屋敷ノ儀ハ 御城下
へ以御見合可被下候、

(朱書)同末
十月

(鳥津久品)
主鈴

五一三八

一 御家老座

一 異国方

一 御勝手方

一 大御目付座

一 御用人座

一 組所

(卷之四六 三四七〇)

右筆者ノ儀ハ同役者申出候テ別星致星合、其外ノ諸座

筆者ノ儀ハ奉行・頭人証文ヲ以星合可仕候、逢後星ノ

儀モ右ニ準可相仕付候、

(朱書)「宝曆」甲
八月四日

御目付

五三三九

十九日

右、大玄院様御忌日、此節御精進日被明、殺生等ノ儀

無御構候、正御忌日九月十九日ノ儀ハ此内之通可被相

心得候、

一 隅州様御方ノ儀ハ毎月十九日御精進日、此内之通、
(雜懸)

四月(朱書)「六日」
(伊勢貞起)

兵部

五一四〇

(卷之二六 一五〇八)

島津善次郎殿御事、於江戸今月四日御用番様へ御嫡子ノ

御届被仰上、奉称松平又三郎忠洪様候、
(七)

五一四一

又三郎様御精進日
(朱書)同十月九日 主殿

一 公義御精進日

一 毎月十日

右、太守様御同前、

一 毎月二日朝晩

一 毎月七日朝晩

右、七日ノ儀、御内々御精進日、

五一四二

江戸居付士二男三男迄モ御番入為被仰付事候得共、此節ヨリ嫡子迄御番入被仰付候、二男以下ハ御番入被仰付間敷候、其身為物馴一身分之御奉公、且又他所へ可罷出卜致候者ハ勝手次第可願出候、当分御番入被仰付置候者ハ其通被仰付置候、二男以下芸能有之者又ハ 思召ヲ以可被召出儀ハ格別候、
(朱書)同五亥
五月(朱書)「十二日」
(島津久満)
主殿

五一四三

(朱書)同九月十七日 相馬
一八日 一十日

一十四日 一十七日

一廿日 一廿四日 一晦日小ノ月八廿九日

右、 公義御精進日、

一 二日朝計 一十日 一十六日

右、毎月御精進、

五一四四

重家 竹治 豊 継 洪 忠

右文字、実名致遠慮、同唱之文字迄モ可致遠慮候、

但、竹ノ字先ニテ被仰渡置候通、名ニ付候儀モ遠慮可

致候、

貴 吉 信 宗 年

右文字、実名可致遠慮候、同唱ノ文字ハ不及遠慮候、

朝 頼 久

右文字、先年ヨリ被仰渡置候通可相心得候、

右ハ、実名ノ文字ハ以前ヨリ段々遠慮被仰渡置候へトモ、

右外ノ文字ハ不及遠慮候、

(朱書)同
十一月(朱書)「廿二日」

(島津久光)
凶書

五一四五

(朱書)同六月五日
(繼母女)
菊姫様、旧臘七日松平修理太夫様へ御婚姻被為整候、

(黒田重政)
一 晦日小ノ月八廿九日

五一四六

高野山蓮金院

(重年)

右ハ、円徳院様当年御三年御回忌御当被成候付、御石塔・

御位牌御建立被成度旨、大坂御留守居へ被申越趣有之候

へトモ思召有之、御遺髪モ不被成 御登山候付、御石

塔・御位牌御建立不及候、仮御位牌安置御礼前等差上、

御回向被申上由候へトモ、此儀ハ蓮金院志之事情へハ此

御方ヨリ御構無之候、

右之趣ヲ以蓮金院へ不差障様申達願書可相返候、

(朱書)同八月廿一日

六月七日

(島津久通) 主殿

五一四七

(朱書)同八月廿八日

(繼體御室) 重年(実母)
於登免様、来月十三日築地御屋敷へ御引移被遊筈候、向

後築地御屋敷卜可相唱候、

五一四八

(朱書)同九月廿七日

(薰力)
於殿儀、島津淡路守殿へ御縁与御願之通、先月廿六日

被仰渡候、

五一四九

(朱書)同卯十二月九日

(橋宗尹)

今度 太守様へ御縁与被仰出候刑部卿様御息女様、保姫

様卜奉申候、

五一五〇

毎月七日

右ハ、太守様御実母正覺院様御忌日ニテ候故、御精進

日被相立候、左候テ、太守様御方迄御着類進上並御祝

儀事・御咎目事不被仰付候、御代参ノ儀ハ先只今ノ通

被仰付置候、

(朱書)同十月
五月

縫殿

五一五一

(朱書)同十月廿一日

(繼體御室) 宗信(実母)
於嘉久様御事、妙心院様、

於登免様御事、嶺松院様、

右之通、御名御改被成候、

五一五二

(朱書)同十一月廿二日
(繼豊)繼豊
竹姫君様御名 浄岸院様卜奉称候、

五一五三

円徳院様御遺髮高野御登山無之候間、此節 (繼豊)有邦院様御

登山ノ節、御一所ニ御遺髮ノ御代リニ御手馴被遊候御品
有邦院様御遺髮御同ワクニテ御越、御石塔へ御納、御位

牌被遊御安置、御石塔就御建立五十口ノ大曼陀羅供御執

行被仰付筈候、
(朱書)同十一月三月(朱書)「十八日」

(川田国福)
伊織

五一五四

(朱書)同十一月九月四日 主幹
毎月十二日

右、御精進日諸事ノ儀、廿日被仰付候、

五一五五

衾寝(清香)式部

右ハ、先養子島津(忠温)因幡殿へ被仰付置候節、本家小松之称

号以来嫡子代々可被相用旨、(繼豊)繼貴公 御判物、先年

吉貴公於 御前因幡殿名代ニテ頂戴被仰付、式部儀ハ只

今之通衾寝名字被仰付置候、其以後因幡殿儀和泉家相統
被仰付、御判物ハ于今所持被仕候、偶右之通被仰出置

家ニ付テハ無抛称号ノ儀御座候間、往々相用候様仕度御
座候条、嫡子代々小松之称号御免被下度旨被申出趣有之

候、依之此節式部へ小松之称号被仰付、嫡子代々相用、
二男ヨリハ衾寝名字相用候様被仰付候、
(朱書)同十一月十二月(朱書)「晦日」
(鎌田正秀) 隼人

五一五六

(朱書)同十二月五日

五日

右、(吉貴室)靈龍院様御忌日ニテ候へトモ、此節御精進日被明、

殺生等ノ儀無御構候、

五一五七

(朱書)同八月十八日
(繼豊女)菊姫様御名 真含院様卜御改被遊候、

五一五八

重

右文字、名二付候儀可致無用候、実名可致遠慮段ハ先達

テ申渡置候、

(朱書)同(十一)午

八月(朱書)「廿一日」

(鳥津久亮) 図書

五五九

(卷之三十七 二二六〇八)

一御式台脇、此跡中ノ口ト唱来候場所、御末口、

一表御書院、此跡三間有之、此節間数相重、上之間・二

之間・三之間・末之間、

一台子之間上座、秦吉了^{キウケハン}了之間、

但、秦吉了ノ絵様額相応ル、

一此跡新座ト唱来候座、鳩ノ間、

但、鳩^(絵カ)之間様額相応ル、

一御家老座ヨリ御取付之間通之角、鳶之間、

但、鳶之絵様額相応ル、

一諸人通融ノ御玄関、中之口、同上之間ハ溜之間、

一内御玄関上之座ヲ内御玄関上之間ト相唱、次之座ヲ御

繰懸之間、

一此跡鶴之間ト唱来候御座、蘭之間、

(朱書)同(十一)午

十月(朱書)「廿五日」

(鳥津久定) 山城

五一六〇

(卷之三十三 二二〇三)

尾畔奉行・御鷹師、野支度ノ儀段々此節被相定候条、御

鷹師外ノ者共右似寄候支度相用間敷候、

(朱書)同(十三)未

二月(朱書)「十七日」

図書

五一六一

外城衆中直子無之、諸座付ヨリ血筋ノ訳ヲ以養子御免被

仰付事候ヘトモ、向後御春屋付・代官所付・物奉行所付・

御細工所付・御台所付ノ内ヨリ血筋ノ訳ヲ以養子願申出

候テモ一切被成間敷候、

(朱書)同

九月(朱書)「十六日」

(高橋種春) 此面

五一六二

今度御誕生之

(重兼女)

御女子様、於悟様ト御名被進候、

五一六三

(重兼室)

御前様御安産、御女子様被遊

(鳥津久品) 御誕生候、

十月十四日

主鈴

五一六四

島津哲之助

右ハ、亡養父島津図書殿事、一世家筋無構一門方ニ被相

付、御礼席・御祝儀事等被仰付候へトモ、哲之助儀家格

之通年頭御礼席之儀ハ於、御対面所持参太刀被仰付、月

次御礼被罷出候節ハ島津大学次ニ独礼被仰付、諸事同格

同前被仰付候、

(朱書)同十三末
十二月(朱書)「廿五日」

(小松清香)
式部

五一六五

御鷹へ於途中参逢候節ハ懇勲成体ニテ罷通候様可仕候、

五一六六

(朱書)同十四年申六月 伊織
牡丹御紋

右ハ、此節 淨岸院様ヨリ 悟姫様へ被進候、

五一六七

芝御屋敷御広庭ノ儀、向後外御庭ト相唱、爰元御広庭ノ

儀モ其通可相唱候、右之段屹ト被仰出候儀ニテハ無之候、

(朱書)同申
七月廿六日

(久澄)
山岡齋宮

五一六八

刑部卿様御法名覚了院様ト奉称候、

五一六九

飯隈山蓮光院

右ハ、年頭御礼被遊御受候節ハ例年之席ニテ 御目見被

仰付、其後着座、御菓計被下、直ニ退出、其跡ニテ門中

山伏 御目見可被仰付候、尤、入口足輕下座ノ儀、着座

門首同前ニハ不被仰付、此内之通被仰付候、

五月

(朱書)同四
左京

五一七〇

(卷之四三 三三四〇)

江戸御国元ヨリノ御使便ニ何ソニ付差上候披露状ハ有来

通折紙相認候様可仕候、諸人頼之諸状等モ大分ノ事ニテ

荷高相成候処ヨリ中途相滞、致迷惑儀モ有之由相聞得候、

折紙ニ認候テハ費モ有之、且手細ニモ相成筈候間、向後

諸人互之書通ハ勿論御家老へ何ニ付礼状等モ半切相用候

テモ不苦候、

(朱書)同
七月(朱書)「十六日」

(高橋權寿)
此面

五一七一

一組中ノ諸士家督・継目並養子成等ノ御礼、御太刀・弓
又ハ中紙進上ニテ 御目見被仰付候人、幼少其外無摠
訳ニ付テハ依願進上物相納、御礼相濟候筋被仰付候儀
ニ候、然共元服並初テノ 御目見相濟、右体御礼願ノ
人進上物納ノ筋相願度モ候ハ、勝手次第被仰付候、

一御在府ノ節、御一門ヨリ諸士ニ至リ、家督・継目並養
子成等ノ御礼願申出候面々ハ御下国ノ節 御目見被仰
付儀候ヘトモ、 御在府中ニ願出候面々ハ其節々進上
物相納、御礼相濟候筋被仰付候、

(朱書)同
十二月(朱書)「十五日」

(小松清香)
式部

五一七二

年頭 御在府ノ節、御家老並家格ニ付御太刀進上ノ面々
又ハ地頭持ノ儀、江戸詰合ノ人ハ持参太刀被仰付、御国
元大御目付以上且家格ニ付御太刀進上之面々ハ於江戸名

代ヲ以納太刀被仰付来候、 御在国ノ年頭江戸詰ノ内御

太刀進上致来候面々ハ 御在府ノ節御太刀進上仕候様被
仰渡置候ヘトモ、 向後御留守詰ノ面々、 御在国ノ年頭

於御国元名代ヲ以納太刀被仰付候、且又年頭不在合人ハ
何方ニテモ着ノ節、納太刀願出候様申渡有之候ヘトモ、

以後共 御在府 御在国共二年頭被遊御座候方ニテ、是
又名代ヲ以納太刀被仰付候、

(朱書)同三戊
正月(朱書)「四日」

式部

五一七三

御上下ノ節、御供ノ面々於御道中襦並野袴ヲモ致着儀候
ヘトモ、過半袴着用ノ者多候、旅中ノ儀候間、向後野袴
可致着用候、一向袴不致着様ニトノ儀ニテハ無之候付、
致着者モ可有之事候ヘトモ、野袴致着者多キ方可然候、
伏見・大坂御滞在中ハ当分迄ノ通可相心得旨被仰出候、

(朱書)同
六月

(島津久金)
左中

五一七四

(朱書)同三戊十一月廿五日 主筋
(綱貫女)
於榮様被遊御剃髮、 信解院様卜御名被成御改候、

五一七五(の1)

御綾之御方、格式御国元江戸共二(繼豊側室、重年実母)嶺松院様御同格被仰

付、着ノ当日ヨリ御名様ト唱並書付等ニモ其通可致候、

御順之儀ハ、嶺松院様次二被仰付候、(衍カ)

(朱書)同四支

四月

(島津入使)
仲

(五一七五の2)

於綾様御事等、容人分御取持ニ被仰付候儀ハ御人体モ相

易、且又被対 御守殿御格合、段々結構ニ被仰出候、此

段屹ト被仰渡儀ニテハ無之候旨、御用人衆口達ニテ東郷

次大夫承之候事、

五一七六

(卷之五七 四四三五)

一九月九日ヨリ三月廿九日マテ股引、

一四月朔日ヨリ九月八日マテ脚半、

右ハ、御參勤・御下国ノ節、徒ニテ御供ノ面々向後

右之通致着候様被仰出候段、江戸ヨリ申来候、

(朱書)同

四月

仲

五一七七

江戸御老中様並御同格之御方、京都御諸司代・大坂御城

代・若御年様之御名、近国ノ御大名、又ハ、御身近御一

門様方ノ御名ハ遠慮可仕候、尤、依御家柄遠慮無之訳吟

味被仰付筈候間、同名ノ人ハ名替可申出候、

(朱書)同

九月

仲

五一七八

家督之者ニテモ依願妻子召列、嫡家・本家、継目・養子

等ニ相成、其身家跡ハ二男三男ノ内へ願申出候節、願書

之認様不相並候条、向後ハ家跡相続ト願出候様可被相心

得候、

(朱書)同六丑

三月

左中

五一七九

(卷之三三 一三三七)

御着城其外何ソニ付御国元被差立候御礼使、羽織袴致

着来候ヘトモ、向後野袴着用ニテ罷出、勿論道中筋並

江戸御国元へ着当日迄モ同様相心得候様被 仰出候、

且又 御上下ノ節御供ノ面々、野袴着用ノ儀ニ付テハ

去戌年被 仰出置候、

五一八一

一間々交代ニテ致上下候面々、御国元江戸出立ノ当日並
江戸・京・大坂へ着、京・大坂出立ノ当日又ハ御国元
着当日モ野袴可致着候、都テ他国へ出候者右同断野袴
可致着候、併長崎御付人抔ノ儀ハ脇々致方ニ可準候、

御上下ノ節、大里 御乗船並御船卸ノ節、兼テ袴・野袴
致着用候者、都テ野袴可致着用候、其外ノ所ハ去ル戌年
被仰出置候通可相心得旨被仰出候、

將又 御上下ノ節徒ニテ御供之面々、股引・脚半着用

五一八三

ノ儀ハ去々年被 仰出置候、足輕・御中間・御駕籠之
者等、向後夏冬共脚半相用候様被仰付候、
(朱書)同 八月
(島津久金) 左中

組中ノ者共行跡不相直候付、当在国ニモ段々申渡趣モ有
之候へトモ、其詮モ可相立ノ処、却テ頃日ニハ度々致喧
嘩候者モ有之由相聞得不可然候、喧嘩口論禁制ノ儀ハ
公義御法令ニモ相見得、且又短慮ノ働イタシ理不尽ニ事
ヲ破候者ハ加成敗所帶没収スヘキ旨、毎朝ノ条目載置候、
左候へハ親兄弟ヨリ兼テ敵シク可申付ノ処、若氣ノイタ
リニテ誠ニ無益致死傷候者及數多甚不便候、畢竟若輩ノ
者故傍輩ヲ打果、切腹サヘイタシ候へハ事相濟ト心得候
処ヨリ輕々敷及喧嘩事候、第一ハ国恩ヲ以蒙生育候へハ
專忠勤ヲ以懸、第二ハ父母ノ受大恩人トナリ候へハ夫々
孝養ヲ以可相報事候、左候へハ自分之身ニテ我儘ニ働候
儀、曾テ不罷成筋候、ケ様ノ分ヲ不弁致喧嘩者ハ委遂

五一八〇

(朱書)同 同五月十九日
(重慶室)
御前様、御病氣御養生不被為叶、先月廿六日被遊御逝去
候、

五一八一

毎月廿六日
(照力)
右、慈昭院様御忌日付御肴類進上並御咎目事不被仰付候、
其外ノ儀ハ不及遠慮候、

(朱書)同 十一月

左中

十一月

吟味、無礼法外ヲ働、喧嘩ノ張本ニ為相決者ハ誠不忠不

孝ノ罪人ト可申条、其身ハ凡下ニ申付、相果候死体可為

取捨候、親兄弟共ノ儀モ吟味ノ上、依輕重屹ト咎目申付、

其外高下ノ無差別右ニ準取計、依事ハ所帶ヲモ可没取候

段、末々ノ者ヲ打果候云共、依理不尽ノ訳ハ応右吟味之

上、是又屹ト咎目可申付候、此通申渡候上、無礼法外ノ

事共申懸、其偏ニ難差置事候共、成リタケ其場ヲ致堪忍、

則筋々ニ可遂言上候、左候ハ、彼者ハハ相当ノ咎目申付、

尤、神妙ニ取計候者ハ屹ト褒美可申付候、

(朱書)同七月
正月

五一八四

(卷之四三 三二六〇)

足輕・御中間・御小者並家中者、其外以下ノ者共、於中

途御直士ニ行合候節、雨天ニテ木履踏ナカラ致礼罷通者

モ間々有之無礼ノ至候、向後御直士ニ行合候節、鎧為持

候人体ニハ必木履ヲ拔、慤慤ニ致礼可罷通候、其外ニテ

モ近付ノ士ニハ木履ヲ可拔候、近付ニテ無之候テモ士ト

見受候ハ、相慎可罷通旨、先年被仰渡置候処、緩ニ相成

間ニハ致無礼罷通候者モ有之由相聞得候、此以後違背ノ

者於有之ハ可及沙汰候、且又夜行・辻歌ノ儀モ兼テ御禁

制被仰渡置候処、是又頃日夜行・辻歌或身分不相応之致

行跡、其外不成合又ハ不宜聞得有之不屈ノ至候、此以後

右体ノ者モ候ハ、屹ト可申付候、

(朱書)同
五月 (小松清春
帶刀)

五一八五

(朱書)同五月
於綾様御事、御縁与御願之通被仰渡候付、御前様ト奉

称、綾之字並唱遠慮、

御前様へ、此節甘露寺大納言様ヨリ多千姫様ト御名被進

候、多千ノ唱等遠慮、

五一八六

御茶道頭御役名等同朋頭ト被相改候旨、江戸ヨリ申来候、

五一八七

(卷之五〇 三八八六)

一御関狩 一御馬追 一於敷舞台仰渡事之節

一護摩所 一御寺方 一御法事 一評定所

一札明披露 一弓場射納 一御屋形上り口

赤松造酒(則正)

二階堂(行旦)

右ハ、大御目付格被仰付候付、当分ノ勤ニテ右節々勤方ノ節、座席並御屋形出入口、都テ大御目付同前被仰

付候、

(朱書)同
九月

(桂久中)
織部

五一八八

(朱書)同十月 主馬(重幸女)
今度御誕生之、御女子様、於敬様卜御名被進候、敬之字

遠慮、

五一八九

(五一八八号行間朱書)(繼豊側室、重年実母)
於敬様御名順、嶺松院様御次ニテ、此様被成御用候様被

仰出候、

右、朱書ノ通被仰渡置候へトモ、以来ハ(繼豊女、菊姫)真合院様御次

ニテ、此様ノ字相用候様被 仰出候、

卯八月

(島津久金)
左中

五一九〇

百姓共大勢子共有之候へハ出生ノ子産所ニテ直ニ殺候国柄モ有之段相聞得不仁ノ至候、以来右体ノ儀無之様、従公義被仰渡置候、子共出生ハ御國中繁榮ノ儀、鄉村ノ余勢ニ相成事候、御領國中右体ノ儀ハ有之間敷候へトモ、万一心違候テハ甚以不仁之至候条、右仰渡之趣屹可相守候、右之通 思召ヲ以、難有被仰渡候付テハ至末々、取違ノ儀ハ曾テ無之筈候へトモ、自然出生ノ子ヲ(密方)蜜ニ流産又ハ血荒等ノ筋ニ取計候者有之候ハ、糺方ノ上屹其咎可被仰付候、

(朱書)同八月
二月

(喜人久福)
主馬
(小松清春)
帯刀

五一九一

実子ヲ他家へ養子ニ遣置、実父相果本家帰、且叔父ヨリ甥ノ跡職願申出候節、跡々繼目養子ト申出候へトモ、向後ハ跡相統ト願出候様可被相心得候、

(朱書)同
五月

帯刀

五一九二

御前様並御女子様方、以来之御役(致力)所十文字、其外御替紋

桐・牡丹御用被成、御二男様ヨリ桐・牡丹御紋所御用被

成候様、御家老中承知仕候様被仰出候、

(朱書)同一

六月

帯刀

(朱書)同一
九月

帯刀

五一九三

(卷之五〇 三九四五)

御近習役ノ儀ハ格別之御用向取扱御役所ニ候条、江戸御

国元共右御役所敷居ヨリ内へハ不罷通、御家老伺御機嫌

申上、其外御用筋相達候節モ敷居外ヨリ申聞候カ、又ハ

何ソニ付テハ御役所ヨリ呼出、申達候筋相心得罷在、中

通ノ面々、右ニ準候様被仰出候段、御中途ヨリ申来候、

(朱書)同一
八月(六日)

八月

左中

五一九四

御正院様御年回ノ節、日数五日ノ御法事ハ三日、御女中

様同断、日数三日之御法事ハ二日ニ此節相究候間、御家

中ノ儀モ三日以上ノ法事致来候面々モ有之候ハ、右御法

事ニ準日数減少可有之候、

島津家歴代制度卷之六十七 八年

〔朱書〕
「明和八年卯」

五一九五
〔同卯十月 左中〕

〔家治室〕
御台様御牌号 心観院様卜奉称候、

五一九六

御近習役並御役之次第、御使番之次ニ被仰付置候へトモ、

向後御近習役之次ニ被仰付候旨被仰出候、
〔朱書〕同
十一月
〔島津久金〕
左中

五一九七

御領国辺鄙ノ儀候へトモ、言語甚不宜、容貌モ見苦体候
故他所ノ見聞モ如何敷、畢竟御国ノ面目ニモ相懸儀ニ付、
於御上御氣之毒被思召上候、急ニ上方向程ニハ可難改候
へトモ、九州一統ノ風儀大概相并候程之言語・行跡ニハ

可相成事候、兼々御沙汰之趣御家老中奉承知、御尤至極
奉存候、依之向後人々此旨ヲ弁、容体・詞ツカヒ等相嗜
之、他国人へ応答ニ付テモ批判無之様常々可心懸候、尤
衣服ノ儀ハ被仰渡候趣候条、自他国ノ差別ノ外分限ヲ過
候儀ハ可為無用候、

〔朱書〕同九辰
正月

御家老衆連名

五一九八

諸芸練熟ノ上 御城下へ被召出候家ノ儀ハ此以来其芸ヲ
請次、子孫ニ至リ其道ヲ以御用相立候様可心懸候、若取
違芸道取止候者之儀ハ御吟味之上本々俗生之通可被仰付
旨、此節被仰出候、右之段ハ以前ニモ為被仰渡置事候へ
トモ、猶又緩ノ儀無之様自今屹ト可相守候、若心得違候
者有之候ハ、可及沙汰候、
〔朱書〕同
五月
〔喜入久福〕
主馬

五一九九

町家繁花ニ成立候ハ、商人共沢山フへ候処ヨリ自然
賑立事ニ候、此以後ハ 御城下へ稼キトシテ他国人入

込、其者依見込ハ居付候儀且又組与等(殿与力)イタシ候儀モ勝

手次第、勿論上方並他国ヨリ奉公人等男女ニ不限抱入

候儀モ被成御免候、

(行間朱書)
一 張紙ニテ

尤、町家ニ不限奉公人等諸人持下候儀モ勝手次第被成

御免候、

一 町家之者共、当分モ上方又ハ長崎等ニ差越候儀有之候

ヘトモ、此以後尚又他国出勝手次第被仰付、参宮類ノ

儀モ不差障儀ハ被成御免候、

(朱書)同
六月

主馬

五二〇〇

(朱書)同六月
(重妻女)

於敬様御事、

(重妻継室)

御前様御猶子被遊御成候付、敬姫様ト奉

称候、

五二〇一

(朱書)同七月

当分迄黄紙相用來候、江戸御国元諸御役座夫々依座々相

渡來候黄紙、此節ヨリ都テ白紙相用候様被仰付候、然共

当分相屯居候黄紙御費相成候間、此涯窺並 御前向へ出

候書付迄ヲ先白紙相用、其外ハ一往当分之通ニテ、黄紙

仕切候節ヨリ吃下相改候様被仰付候条、致払底候ハ、其

訳可申出候、

五二〇二

一 御咎目事ニ付テノ伺並書拳首尾書付等ハ都テ有來通黄

紙ニ相認候様被仰付候、糺明帳例書等ハ黄紙ニ不及候、

但、諸座手形引付等ハ有來通、

(朱書)同
七月

主馬

五二〇三

(朱書)同八月 小林中太兵衛一

野米ヲ取納米ニ相納候儀ハ不相成候処、頃日野米相納候

者間ニハ有之由相聞候付、御藏入ハ勿論給地ノ儀モ一切

不相納様此節稠敷被仰渡候間、万一相納候ハ、百姓名書

ヲ以可被申出候、

五二〇四

(入敷)
島津太郎次郎

右ハ、(重妻) 太守様御舍弟分被成、加治木家跡相統被仰付、

兵庫殿下名改、座席島津備前殿次被仰付候、

(實儀、垂水)
(朱書)同辰
八月

(小松清香)
帶刀

五二〇五

(經臺經室、竹庭)
浄岸院様是限ノ御事候間、此節ノ儀格別被遊御尊敬 思

召候間、御着ノ上御先例等ニ無構御壯嚴等宜取仕立、御
滞棺・御葬送・御中陰・御法事等都テ格段ノ御取

扱ニ可仕候、御法事ノ儀モ古来ニ相替段々日数等モ被
相減、近來猶又御作略之御事候間、此度ノ儀当分御仕向

ニテハ別テ御不足ニモ 思召御成合モ不宜候間、惣体此
以前ノ格別重キ方準シ厚御取計可仕候、少事ノ御物入等

拘リ聊作略仕間敷候、尤、御廟所・御靈屋等出来之
儀モ御手細ニ有之候テモ随分結構相見得候様可仕候、

公義衆御供等モ有之事候間、何篇龜末ノ儀共無之様可仕
旨分テ被仰付候、

(朱書)安永二巳)
正月

(喜入久福)
主馬
(島津久健)
仲

五二〇六

(卷之四〇 二八五六)

今度聖堂・講堂其外諸稽古場迄モ被相建候、此儀ハ諸人
学文・芸術一涯改テ相勵出精仕、猶以往々御用相立、尤

風俗モ正敷方ニ相成候様被 思召上、畢竟 御領國中為
教学、右之通御造立被仰付 思召候間、難有承知可仕候、

(朱書)同
三月

(藤山久曾)
左京

五二〇七

(朱書)同閏三月 左京)
(家治女)
万寿姫様御牌号

乗台院様卜奉称候段御到来候、

五二〇八

(朱書)同三月 同)
御守殿御拜借屋敷直

(重泰)

太守様御拜借地被成度、 浄岸院

様兼テ被為御願置候処、先月十五日於御城 太守様へ拜
領被仰付候、

五二〇九

(卷之三五六 二四一六)

(小倉筋ノ事)
一出水筋
(東目筋ノ事)
一高岡筋

大口筋

右之通、向後唱、書付等ニモ可仕旨被仰出候、

(朱書)同
四月

四月

〔行間朱書〕
「本行 公辺其外へ被書出儀モ候ハ、九州筋・日州筋
杯ハ其節ノ吟味次第可相記候、」

仲

五二二

御城下立番平日無之候へトモ、向後八月次御礼日・御
祝儀事等ノ節ノ通毎日可相勤候、

但、北之御門前辺立番一人毎日可相勤候、

一 御一門・大身分・大御目付格以上登城之節、内外立番

一 涯稠敷可致下知候、

一 御城下又ハ下知御一門並大御目付格以上登城之節ハ一

涯御門番へ相通候様可致下知候、御門番ヨリハ 御城

内立番共方へ相通候程ニ是又致下知、脇ヨリ承候テモ

唯今右人数登城有之候ト心付候程可下知候、

但、北ノ御門前辺立番ノ儀モ同断、

一 御一門登城ノ節、御目付出迎相付由候、此儀弥当分ノ

通ニテ向後表坊主人可出迎候、左候テ、敷舞台ヨリ

刀相受取、御家老座へ被罷通候ハ、御座迄持之、御近

習へ被罷通候ハ、鳴子之間ニテ表御小姓へ相渡、夫ヨ

リ御側御小姓へ相渡、御近習早晚ノ所へ可差置、尤、

下城ノ節モ同断、

一 大御目付格以上日々登城ノ節、中之口へ御家老座・大

目付座へ相勤候表坊主出迎居御座迄相用候様被仰付候、

五二一〇

(卷之三七 二七二四)

芝御屋敷

桜田御屋敷

高輪御屋敷下

一 上御屋敷

一 桜田御屋敷

一 高輪御屋敷

田町御屋敷下

御取添御屋敷

一 西向御屋敷

但、上御屋敷隣片桐石見守様御屋敷御相對替相濟、

此御方御屋敷相成候付、右之通唱候様被仰付候、

右之通相唱候様被 仰出候、

(朱書)同十九日

主馬

五二一一

御領国六部宰領相付来候へトモ、向後相付不及候、御一

門ヲ初都テ若党召列候人手笠ニテ召列由候へトモ、向後

着笠合羽着候様トノ御沙汰候、

(朱書)同
五月

仲

尤、下城ノ節モ同斷、

一御一門方屹立候節ハ先弘家来一人行列先ニ相立、何某殿被罷通候段行逢候人々へ為知可申達候、左候ハ、被究置候通式礼可致候、

但、下人体ノ者へハ控候様、先弘ヨリ可致下知候、

(朱書)同
五月

(島津久金)
左中
仲

五二一三 (卷之三三 二六五四)

一御城下へ此節下乘札下馬札被相建候、

一御城下金蔵通、下馬不及候、

一諸座長屋南泉院下通、下乘下馬ニ不及候、

(朱書)同
五月

左中

五二一四 (卷之四三 三二五九)

道筋罷通候者互ニ本道ニ相廻シ可罷通候、右側ニ相廻

候テハ何ソ俄ニ込合候節、行当旁差支事候条、兼々右

之趣人々可相心得候、

一御領國中ノ面々日笠用來候へトモ、狭小路坏行当旁付

相障事候条、都テ着笠可致着候、乍然依人体輕キ者共

ハ天氣ニ様ニ有之、着笠ニテ難相濟被存候節、日笠相
用候儀ハ御免被仰付候、

(朱書)同
五月
(十七日)

仲

五二一五 (卷之三三 二二九八)

無役之、^{寄合}寄合並並小番、長袴着用ニテ御礼申上候節々、

於 御屋形長袴致支度替由候へトモ、以來於宅長袴致

着候テ罷出候様被仰付候、御礼相濟候テ於 御屋形致

支度替候儀ハ勝手次第、且又御役人ノ内右式ノ節ハ御

役席ニテ長袴ニ致支度替候儀ハ其通可有之トノ 御沙

汰ニテ候、

一士医師、当分迄ハ脇差迄ヲ帶致徘徊来候へトモ、無役

ノ士医師迄モ向後大小帶候様被仰付候旨被仰出候、

(朱書)同
五月

仲

五二一六 (卷之三三 二六六八)

今度 御城下へ下乘札下馬札被相建候付、登 城ノ面々

惣供廻ハ其所へ差置キ、夫ヨリ手廻計ニテ登 城、以

後手鑓其外供屋へ入置、退出ノ節モ手鑓以下相下ケ置、
下馬ヨリ可被相列候、

一 御厩角ニテ下乗下馬ノ人モ前条之趣ニ可被相心得候、

但、備前殿表門裏通外繫場前下乗下馬ニテ右同断可被

相心得候、

一 諸座角ニテ下馬下乗致、登 城之面々手鑓其外角ノ御

藏下通ヨリ相下、供屋へ入置、退出ノ節モ右場所ヨリ

可被相列候、

一角ノ御藏下ヨリ御厩角迄ノ間、手鑓為持罷通候人ハ肩

ヲ迦可被為持候、

(朱書)同
五月

仲庫

五二一七

(卷之三十七 一六五六)
(卷之四十三 三二五二)

一 御城下へ下馬札下乗札被相建候付、下馬ニテ下乗被致

モ有之由候へトモ、不及其儀候間、下乗ニテ駕籠可被

相建候、

一 御領國中ノ面々着笠相用候様、先達テ被仰渡置候、右

ニ付直触以下へ途中ニテ参合候節、向ヨリ着笠拔候テ

モ社社奉行ヨリ御近習役並無役ノ寄合・寄合並迄ハ拔

候テ式対ニ不及候、尤、寺社奉行ヨリ以下直触ノ面々

ハ互ニ着笠致着可致式対候、且又直触以下ノ御役ニテ

モ依人体着笠拔候テ式对有之儀ハ人々心入次第可有之

候、

(朱書)同廿三日
五月

五二一八

(卷之三十五 一三三九)
(卷之三十五 一三三〇)

年頭

一 先供七人

五節句

一 先供五人

月次

一 先供三人

右、大身分先供、此節ヨリ右之通被仰付候、

年頭

一 先供三人 一 若党四人 一对挟箱 一手鑓 一長柄

一 乘馬 一 沓籠 一 合羽籠 一 抑兩人

五節句

一 先供兩人 一 若党四人 一对挟箱 一手鑓 一長柄

一乘馬 一沓籠 一合羽籠 一抑一人^阿

平日

一若党四五人 一片挟箱 但、御礼日計、一手鍵

一長柄 一合羽籠 但、天氣次第、

右、御家老、

年頭

一先供兩人 一若党四人 一对挟箱 一長柄 一手鍵

一乘馬 一沓籠 一合羽籠 一抑一人

五節句並平日

一若党四人 一片挟箱 但、御礼日計、一長柄

一乘馬 但、五節句計、一手鍵 一合羽籠 但、平日

天氣次第、

右、若御年寄・大御目付、

年頭

一若党三四人 一片挟箱 一長柄 一手鍵

一乘馬勝手次第、 一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

五節句並平日

一若党^阿三人 一長柄勝手次第、 一手鍵

一片挟箱勝手次第、但、五節句計、

一天氣相ニ付テハ雨具等勝手次第、

右、寺社奉行ヨリ寄合迄、

年頭

一若党三人 一片挟箱 一長柄 一手鍵

一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

五節句並平日

一若党兩人 一長柄勝手次第、 一手鍵

一雨具右同断

右、御用人ヨリ御近習役・寄合並迄、

年頭

一若党兩人 一片挟箱勝手次第、 一長柄右同断

一手鍵 一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

五節句並平日

一若党一人 一手鍵 但、五節句計、物頭ノ儀ハ平日可

為持候、

右、御留守居ヨリ納殿役人迄、

一若党一人

右、御普請奉行以下月次御礼罷出候御役人並無役ノ中

通小番・新番・御包丁人頭ノ儀ハ右之通被仰付、其外

若党召列候儀致無用、草履取迄可召列候、平日ノ儀ハ

五三三

有來通、

(朱書「同」)
五月

(喜入久福)
主馬

五二一九

(卷之三十七 二六五七)

(朱書「同五月」)

諸人下馬ヨリ着笠拔候人モ有之候、下馬ニテ拔候ニハ不
及、都テ供廻リ迄モ下馬ニテ拔候様可相心得候、

五三三三

(卷之四十三 三二七四)

五二二〇

(朱書「同五月」)

御領国中之面々日笠用來候ヘトモ、都テ着笠致着候様、
先達テ被仰渡置候ヘトモ、女ノ儀ハ日笠相用候テモ不苦

候、

一寄合

右へ御一門家見舞ノ節、亭主薄へり迄出迎、帰ノ節布

五二二二

(卷之三十七 二六六二)

(朱書「同五月」)

諸御役人へ立番ノ足輕致式礼候節、慇懃ニ礼相受候人モ
有之候付、左様無之相応ニ礼相受罷通候様、寄々通達可

致候、

帰之節モ同断ノ所迄可相送候、

御一門家ヨリ使者被遣候節御請御答ノ次第左之通

一大身分・御家老・大御目付格・一所持迄ニ御一門家ヨ

り役人使者被遣候ハ、可致直答候、役人以下番頭以上ノ使者二候ハ、役人ヲ以御返答可申達候、番頭以下ノ使者二候ハ、用人ヲ以返答可申達候、

一大御目付格以上御役ニ付テ使者被遣候節ハ右之沙汰不及候、

一寄合ノ御役人限御一門家使者被遣候ハ、役人ヲ以御返答可申達候、御一門家之使者役人格之者二候ハ、直答可致候、

一寄合並以下諸士ノ儀ハ使者柄ニ無構、何時ニテモ直答可致候、

御一門家之所へ見舞候人有之、出迎ノ儀左之通

一大身分・御家老・若御年寄、何ソ屹卜立候節計着座ノ次之間迄出迎可被致候、其外出迎不及候、

御一門家之所へ見舞ノ人罷通、罷帰候節被相送候次

第左之通

一大身分・御家老之儀ハ使者之間迄可被相送候、若御年寄以下大御目付格迄ハ着座之席次ノ間迄可被相送、無役之一所持以下寄合迄ハ座内ニテ見計可被致式対、寄合並ヨリ諸士迄着座ノ所ニテ式対可被致候、尤、依役

柄ハ心入モ可有之候、

御一門家之式台へ向後取次ノ者上下着用ニテ出罷居、見舞ノ人有之節ハ左之通

一大御目付格以上見舞之節ハ案内無之迎モ直ニ薄ヘリへ出迎可致取次候、罷通候人帰ノ節モ出迎ノ所迄可相送候、

一一所持ヨリ寄合迄ハ板之間へ出迎可致取次候、帰ノ節モ同断可心得候、

一寄合並・直触以上之人へハ拭縁ニテ致取次、帰ノ節モ同断ノ所迄可相送候、

一御普請奉行以下無役之諸士見舞ノ節ハ玄関座内ニテ致取次、帰ノ節ハ拭縁迄可相送候、

一使者之者差越候節ハ右之応格式、同断可心得候、
大身分ノ所へ見舞ノ人有之、出迎ノ儀左之通

一御家老以下無役之一所持・一所持格、何ソ屹立候節使者之間上迄出迎、寄合・寄合並右ニ準候、御役人限着座次之間迄出迎、御留守居以下直触以上座内ニテ可致式対候、御普請奉行以下無役ノ諸士迄座内ニテ右ニ準式対可有之候、

大身分之所へ見舞ノ人罷通、罷帰候節相送候次第左
之通

一大御目付格以上見舞ニテ罷帰候節ハ玄喚板之間迄可相
送候、

一寺社奉行以下無役ノ寄合迄右同断ノ節ハ拭縁迄可相送
候、

一寄合並以下直触迄ハ着座ノ所ヨリ次之間迄可相送候、

御普請奉行以下諸士ノ儀ハ座内ニテ式対可致候、

一大御目付格以上ノ所へ見舞ノ人有之節モ大身分仕向ニ
準可相心得候、

但、取次之儀ハ一所持以下寄合並迄仕向之通可相心
得候、

一大身分之面々式台へ取次ノ者肩衣不及着、出張居見舞
ノ人有之候節、左之通可申付候、

一御一門家見舞之節ハ地幅内迄取次ノ者早々罷出、帰ノ
節ハ猶又最初出迎ノ所ヨリ相進罷出候、大身分以下ノ
取次ノ者都テ右之振合可相心得候、

一大御目付格以上見舞ノ節ハ布石中程迄出迎可致取次候、
罷通候人帰ノ節モ同断ノ所迄可相送候、

一一所持以下寄合並・直触以上之人見舞之節ハ薄縁へ出
迎可致取次候、帰之節ハ最初取次ノ所迄可相送候、

一御普請奉行以下御役人限ハ拭縁ニテ致取次、帰之節ハ
板之間迄可相送候、

一諸士ノ儀ハ玄喚座内ニテ致取次、板之間迄可相送候、

一所持以下寄合並之所へ見舞ノ人有之節左之通

一御家老以下寄合格式之御役人迄相互玄喚板之間迄可相
送候、

一寄合並以下直触之御役人迄見舞ノ節ハ拭縁迄可相送候、
御普請奉行以下無役ノ諸士迄ハ座内ニテ可致式対候、

一所持以下寄合ノ所へ見舞ノ人有之、出迎之儀左之
通

一大御目付格以上使者之間未迄出迎、一所持格以下寄合
並迄相互ニ使者之間迄出迎、大御目付格以上相勤候者

ノ儀ハ無役之一所持・寄合並迄屹立候節、使者之間上
迄出迎可致候、寄合並以下直触以上ハ着座次之間へ出
迎、御普請奉行以下無役ノ諸士迄座内ニテ可致式対候、

一所持以下寄合並迄取次ノ者出迎ノ儀左之通

一大御目付格以上見舞ノ節ハ布石中程ヨリ門涯方へ取次

ノ者罷出可致取次候、帰ノ節モ同断可相心得候、

一直触以上ノ御役人見舞之節ハ薄ヘリニテ致取次、帰ノ

節モ同断可心得候、

一御普請奉行以下御役人ヘハ板之間ニテ致取次、帰ノ節

ハ板之間迄可相送候、

一諸士之儀ハ玄喚座内ニテ致取次、帰ノ節ハ板之間迄可

相送候、

一門番所ヘ番人差立候程ノ人所ヘ士以上見舞、門鎖居候

節ハ大戸相開可差通候、家中ノ儀ハ小門ヨリ出入申付

候、

右之通、格式被究置候ヘトモ多人数出入ノ節ハ不行届

儀モ可有之候ヘトモ、人々右之通可相心得候、兼テ門

番不差置者共ノ儀モ右同断ノ振合ニ相心得、家来末々

ヘモ可申付置候、

(朱書)同廿九日
五月

(鳥津久金)
左中

五二二四

乗輿・馬上其外途中式対応

(卷之四三 三三四七)

一備前殿・兵庫殿・因幡殿・若狭殿・玄蕃殿事、大御目

付格以上之御役並独礼ノ面々ヘハ下馬下乗可有之候、

其外ヘハ下馬下乗及間敷候、与頭・御番頭・一所持・

一所持格・寄合・寄合並ノ内、依人体ハ或乗物ヲ居、

或馬ヲ留被致式対応儀モ可有之候、右之外士ト相見得候

ハ、乗物ノ戸ヲ明、馬上ニテモ自身可有式対応候、

一大御目付格以上ノ御役ヨリハ鑓為持候御役格ノ者ヘハ

可致下馬下乗候、鑓不為持格ノ者ヘハ仮ヨリ致下馬

候共下馬下乗ニ不及候、大身分・独礼格ヘ馬上・乗輿

ニテ行合候節ハ互ニ下馬下乗ニ不及、式对应可有之候、

向歩行ニテ候ハ、勿論下馬下乗可有之候、

一大身分並独礼候面々ハ鑓為持候御役格又ハ鑓不為持候

テモ、近付ノ内急度御役相勤候者ヘハ可致下馬下乗候、

其外小役人・御歩行之格ニハ下馬下乗ニ不及候、大御

目付格以上ノ御役人ヘハ馬上・乗輿ニテ行合候節ハ互

ニ下馬下乗ニ不及可有式对应候、尤、向歩行ニテ候ハ、

可有下馬下乗候、

一寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭・寄合・寄合並

以上並御近習役以上之儀、御役人ヘハ可致下馬候、其

外近付ノ士ヘハ致挨拶、下馬ニ不及候、向ニ寄心入ヲ

以下馬、勝手次第、

一備前殿・兵庫殿・因幡殿・若狹殿・玄蕃殿ハ格別ニ候
条、不依誰人何時モ下馬下乗可有之候、

一御当地土中雨天ノ節、重役ノ面々へ行合候節木履ヲ拔
致式対者モ間々有之候、向後互ニ木履ニテ行合候節ハ、
輕キ方ヨリ木履拔候テ式対ニハ及間敷候、格別ニ重ク
取持申等ノ面々草履ニテ參候時ハ勿論木履拔可申候、
自分等輩ニハ草履・木履ノ無構、行掛ニ致式対可罷通
候、此式対ノ儀ハ雨天ニ木履拔候テハ不自由成節モ有
之候付テ、右之通被相定候、

一誰人ニテモ、其身ノ格式ニテ無之様子ニ輕イタシ行候
儀有之候ハ、行合候者ヨリ不致式対通候テモ不苦候、

右式対ノ儀ハ先年被定置、其内寺社奉行ヨリ御近習役
以上御役人並近付ノ士へ式対ノ儀迄此節被相改候、

(朱書)同(二日)
六月

(島津久健)
仲

五二二五

士並足輕・町家ノ者相調候者ハ羽織致着用、尤、羽織着
用不致時モ可有之候へトモ、先專相用候様可致候、町家

ノ儀ハ先達テ申渡有之候へトモ、未致着用者多有之由候、

袴迄ニテハ見苦敷候間、袴致着候節モ不致着節モ羽織相
用、袴致着候節ハ分テ羽織相用、四季共ニ致着候様被仰
付候、

(朱書)同
六月

左中

(行間朱書)
「本行外城衆中・人家来・寺門前者ノ儀不相知候、右ノ
者共儀モ都テ本文ノ通羽織致着候様被仰付候、」

五二二六

(朱書)同六月
御城下武士・町方並諸外城ニ至リ男女夏冬共ニ足袋相用

候儀不苦候、

五二二七

(朱書)同六月 左中 (重妻女、茂姫)
今度御誕生之 御女子様御名於篤様卜被進候、依之トク

卜唱候名遠慮、

五二二八

(朱書)同
歳暮・年頭・暑寒・諸節句、大御目付格以上ノ御役人宅
へ御役人・諸士並寺院見廻候付、右為礼人ニヨリ見舞又

ハ使遣事候ヘトモ、大御目付格以上御役人ハ御役ニ付テ見舞ノ事候間、都テ見廻ノ礼見舞又ハ使等遣候儀無用可致候、御役人又ハ無役ノ者ニテモ無拋間柄訳有之、礼儀見舞之儀ハ格別ニ候、右外何ソニ付御礼見舞ノ節ハ猶以御役付テノ儀候間、挨拶ニ不及候、

五二二九

(朱書)同七月 左中
道奉行

右御役表方支配ニテ、御役之順物奉行次、御馬方上被仰付候、

五二三〇

(朱書)同八月 四
此節、御建立ノ

聖堂成就ニ付、来ル廿九日御遷座且釈菜之規式被仰付候、

五二三一

一諸座ハ吟味調相下候書付等別テ隙取、数日相懸事モ有之、御用ノ滞ニ相成候間、向後隙取無之様申談可申出候、品ニヨリ隙取候程合可相知事候間、左様ノ節ハケ

様ノ訳故隙取候段首尾可申出候、

一支配有之候諸御役座支配下ノ者共ヨリ申出候儀共並願事・訴訟事等申出候節、奉行・頭人ハ不相達、筆者手前ニテ差返又ハ隙取ニ相成候儀モ有之由相聞得不可然事候、奉行・頭人承届差知レ難取揚儀ハ左モ可有之儀候条、向後申出候書付等不滞様申談、無延引可遂披露候、

(朱書)同
九月

(島津入金)
左中

五二三一

(卷之三三三 二三四九)

御武具ノ内、当分迄九ノ字付有之候品、都テ此節ヨリ御紋付被仰付候間、来春 御參勤ノ節御用ノ品々ハ右間ニ合候様被仰付候、

一爰許ヘ有之九ノ字ノ品々モ追々御紋付仕替候様被仰付候、尤、所々御門並御番所・御関所等飾置候品モ右同断被仰付候、

一兵次看板類ニ付有之候九ノ字、御兵具所支配ノ分ハ兵ノ字小文字被仰付候間、夫々吟味ノ上絵形ヲ以可申出候、

一右之外諸御座合紋、草文字ニテモ不宜候間、夫々御座

ノ頭字小文字相改候様被仰付候、御幕モ同断被仰付候

間、向々ヨリ逐吟味絵形ヲ以可申出候、尤、当分迄付

来候御座ノ頭字、小文字見掛宜敷分ハ吟味次第其通ニ

テ可被召置候、

一挑灯紋所ノ儀モ右ニ準吟味次第相改候様被仰付候間、

是又何分可申出候、

(朱書)同(七)日
十一月

(島津久健)
仲

五二三三
(朱書)同(十二)月
ヒラキ
日置

右、ヘキト唱来候ヘトモ、向後右之通唱候様被仰付候、

五二三四 (卷之二九 一八一九)

御一門家之座席、其節々御間柄ヲ以被相定事候、然共座

順時々相替候テハ家格ノ詮無之候条、以来座配可応家格

ノ順候、備前殿身分ニ付テハ格別ニ候間、一世可為上席、

其外前文之通可被仰付旨被仰渡候、

(朱書)同(廿九)日
十二月

(喜入久福)
主馬

五二三五 (卷之二八 一七四〇)

堤前中納言代長卿御娘於チマノ方へ此節於江戸 御男子

様御誕生被遊候、依之向後於千万殿卜唱、書付等ニモ可

相記候、

(朱書)同(廿九)日
十二月

左中

五二三六 (卷之二九 一八六三)

今度御誕生之 御男子様へ 虎寿丸様卜御名被進候間可

奉承知候、尤、虎ノ字ヲ名乗ニ用候儀、同唱迄モ無用可

仕候、何寿又ハ寿何ト相統候名且名乗ニ用候儀ハ不苦候、

(朱書)安永三年
正月

主馬

五三三七

諸人病氣ノ節、御医師証文差出来候ヘトモ、向後御医師

ニ不限、町医師・家中医タリトモ致療治候者ヨリノ証文

ニテ可申上候、

(朱書)同(二)月

左中

五二三八

神農堂成就(朱書)同二月 左中二付来ル十七日 太守様被遊御參詣筈候、

五二二九

禁裏 (家也) 公方様 (家也) 大納言様

右、向後右様ノ字可相用候、

太守様 (重兼) 御前様 (重兼繼室) 虎寿丸様 (齊直)

右ハ、当分迄此様ノ字相用来候へトモ、公辺向御帳留

其外共 公方様・大納言様此様ノ字被相用由候間、向後

此御方 御三方様ハ右様ノ字相用候様被仰付候、

敬姫様 (重兼女) 於篤様 (重兼女、茂姫) 妙心院様 (繼體間室) 嶺松院様 (繼體間室)

右ハ、公辺向御部屋様・御女性様共右様ノ字被相用由候

間、向後此様ノ字相用候様被仰付候、当分此御方ニテ御

部屋様ハ無之候へトモ、以来此様ノ字相用候様被定置候、

(繼體女、菊姫) 真合院様

右、御同様ノ筈候へトモ、格別ニ被 思召御事候間、

御前様御同様此様ノ字相用候様被仰付候、(繼體繼室、竹姫) 淨岸院様ニ

ハ格別ノ御事候へトモ、此様ノ字相用候様被仰付候、

公辺向御右筆方御書御文等ノ儀ハ難被相替候間、有来通

候、

右之通被 仰出候間、御先祖様方ニモ右ニ準シ候様被

仰付候条、諸書付等ニモ其通相認候様可仕候、

(朱書)同一九日 五月

(島津入金) 左中

五二四〇

(卷之三七 二七一五)

芝並桜田御屋敷ノ儀、公辺向ニテハ桜田御屋敷ヲ上御

屋敷、芝御屋敷ハ御居屋敷ト相唱、御内輪ニテハ都テ去

巳年被仰渡置候通唱候様被仰付候、

(朱書)同 五月

左中

五二四一

(卷之四四 三三八三)

御城下士、近名ハ勿論外城ニ相係り候テモ、開地等致度

所存ノ者可取込、拝借等有之候テモ御物へ不差障場所ハ

勝手次第被成御免候、

(朱書)同 六月

左中

五二四二

(卷之二六 一六一二)

(齊直) 虎寿丸様、当午御六歳御成、御丈夫被為成候間、御嫡子

ノ御届被 仰上候、然処 (重慶室、一攝宗尹女) 慈照院様御実子無之、御養子

五二四六 (卷之二六 一六一四)

被成度由、御存生ノ内御約束被成置候付、一橋ヘモ御内

虎寿丸様ヘ佐竹右京大夫様御息女於梅様御縁組御願書、

談之上、五月廿九日御用番様ヘ被仰出候処、御聞被成候

先月廿八日御用番様ヘ被差出候段御到来候、

段被仰渡候、

七月 (廿三日) 左中

(朱書)同^{十一} 七月十七日

左中

(行間朱書)「本行御願ノ通被仰出候旨、七月十八日御用番板倉佐渡 (勝渡) 守様ヨリ被仰渡候、」

五二四三

敬姫様御事、御前様御養子被遊候節、御猶子ト申渡有

五二四七 (卷之四八 三六四二)

之候付、唱ノ儀向後御養子ト可相心得候、

佐竹右京大夫様

七月 (朱書)同^一

左中

右ハ、御縁与表向御互被仰入候、当日ヨリ御両敬ノ御取

遣被成度旨、右京大夫様御方ヨリ被仰進、其通御取遣有

五二四四 (卷之二六 一五八六)

(五二四三行間朱書) 先月十五日 敬姫様 御齒黒初御祝被為濟候段御到来候、

之候、 (定勝) 松平隠岐守様 (正徳) 阿部備中守様

天明二年寅十二月廿四日

右前条之通、御両敬ニ付テハ御両所様御事格別ノ御間柄

ニテ、是迄右式ノ御取扱無之候得共、無御抛御方様只今

五二四五 (卷之二六 一六二三)

虎寿丸様、御嫡子ノ御届被為濟候付テハ、敬姫様・

之通ニモ難被成置被 思召上候付、以来御家内様共御互

於篤様ニハ御姉様之御取持被 仰出候、

御両敬之御取遣被成、猶又御親敷被成度趣モ被仰進候処、

(朱書)同^一 七月

左中

趣可承御役々ヘ可申渡候、

但、松平越前守様・松平筑前守様・松平越中守様へモ

同断被仰進置候へトモ、御在国故未夕何分不被相知候、

五月(朱書同)八月(鳥津久健)仲

五二四八 (卷之二八 一七四五)

一御側衆 一御高家衆 一伏見御奉行衆

一駿府御城代衆 一御留守居年寄衆

一大御番頭衆 一交代寄合衆

右御役外之御旗本衆方、江戸御国元共御内輪ニテ御

前へ申上候節ハ書付・口達共ニ殿文字ニテ申上、諸帳

面並御家中ニテ互ノ唱モ右同断可心得候、

九月(朱書同)左中(鳥津久健)

〔行間朱書(御旗本衆方) 御旅元衆方へ殿文字ノ儀、先達テ申渡置候、向後此殿

ノ文字相用候様申来候、〕

五二四九 (卷之四八 三六四三)

松平越中守様

右ハ、先達テ御両敬被仰込候処、彼御方ニモ御大慶被思

召、御互ニ御祝物御取遣、松平隠岐守様御方御仕向御同

様相濟候、

有馬中務大輔様 有馬上総介様

右ハ、佐竹右京太夫様御方御縁家ニテ此節御縁与被為濟、

殊御隣国御事故、向後 太守様・虎寿丸様へ右御ニ方

様ヨリ御互ニ御両敬候御取替被成度候、右ニ付テハ中務

大輔様御老年ニモ被為成、御親敷御入魂之御儀候間、何

卒御聞濟御座候様被御方ヨリ被仰進候付、被応其意被成

御祝、御肴一折御取遣迄相濟候、

九月(朱書同)左中

五二五〇

去年聖堂創建ノ意趣ハ人々承知ノ前ニ候、何レ学文ハ究

理ヨリ段々知識ヲ開發致事候へハ程朱ノ学ヨリ外無他候、

然処間ニハ偽学ノ者モ有之由相聞得不可然候、縦令表向

程朱ノ学ヲ講候テモ、心中実ニ崇尊之無心得候テハ面聖

堂ノ録受、孔孟程朱ノ祭視ニ願候心底、布テ聖賢ヲ致戯

弄同前ニテ其罪莫大二候、依之講訳人ハ勿論其外入学之

徒実程朱之正学ヲ相崇、一切異説ヲ不可受候、左候テ、

学徒日々相進、其内相応ノ人才出来候ハ、其者ノ応長所

向々へ可召仕候、就中徒是ハヲモニ記録方・唐学方ニハ

聖堂方ヨリ調撰可申付候、至テ出精ノ者又ハ学問勤行共

相長候者ハ吟味之上時々可申出候、乍此上心中偽学ノ者

於罷居ハ是又申出候様、係リノ役々へ屹下可申渡置候、

(朱書)同
九月

左中

五二五一

(卷之四八 三六四四)

(黒田継高)
松平筑前守様

右ハ、先達テ御両敬被仰込置候処、彼御方ニモ御大慶被

思召、以来御家内其通御取遣被成答候旨申来候、

(朱書)同
十月

(小松清春)
帯刀

五二五二

(卷之五七 四四三六)

御上下二付、御鎧箱其外御道具羅紗覆ノ分、皆共来春

御下国之節ヨリ革覆黒塗金御紋調替被仰付候、右二付御

供被仰付候面々羅紗覆可致無用旨被 仰出候段申来候、

(行間朱書)
御張紙

間ノ上下ノ面々目不相成答候間、同断可相心得候、

五二五三

(卷之四二 三三三六)

(采書)十月十六日
星御免之御役人致出勤居、無抛儀有之候節、支配々へ相

付御暇申出、御暇被下候段承知之上可致退出候、此旨寄々

通達、

五二五四

御側御小姓

表御小姓

糺明方見習

奥御小姓

御書院役御同朋

御側御同朋

表御同朋

御記録方稽古

御右筆稽古

右御役々、江戸御国元共年頭・節句日・月並御礼日御祝

儀事ノ外ハ肩(衣力)絹着用仕候儀無用被仰付候間、不断羽織袴

ニテ可相勤候、御側・表・奥御小姓ノ儀ハ御振掛リ御容

様御見舞衆前へ罷出候節、羽織拔候テ可相勤候、然共屹

下被仰入候御容様等ノ節ハ有来通上下着用可被仰付候へ

下モ、猶以其節々可得差図候、

(朱書)同
十一月

仲

五二五五

(采書)同十一月
御腰物筒、此節ヨリ革覆被仰付候間、御供人数モ右ニ準

革覆二仕替候様被仰付候段申来候、

五二五八

(朱書)「安永四未三月 仲」
北郷七郎左衛門前通小路、虎屋馬場下相唱候へトモ、向

五二五六

御側廻中通人数ヨリ歳暮・年頭ニ付御内証ヨリ(重要)太守様御

方へ御倉代並御参進上仕来候面々、虎寿丸様御方へ当歳(齊意)

暮来未年頃ヨリ御近習役へ相付、右御同様進上被仰付候、

尤、地頭持ノ儀ハ太守様御方御同様年頭御太刀進上被仰

付咎候付、御倉代進上之不及沙汰候、

(朱書)「同」
十一月九日

二階堂部(行旦)

一 新上橋御門

一 吉野橋御門

(朱書)「同」
三月

(島津久健)
仲

五二五七

虎寿丸様御部屋柄(柄九)内年頭付進上物左之通

一 御一門・大身分・一所持・一所持格・大御目付格以上

並江戸詰之諸地頭、其外ヨリ御太刀進上納被仰付候、

一 江戸へ御祝儀不申上諸地頭、其外ヨリ御当地ニテ 太

守様へ御太刀進上仕候節、是又納被仰付候、

(朱書)「同」
十二月

(島津久金)
左中

五二六一

(朱書)「同五月 仲」
浄国院様 宥邦院様 慈徳院様 円徳院様為御菩提御高

百五拾石ツ、被遊 御寄付候、

五二六二
(重壽側室、齊宣実母)
於千万殿

右、今日ヨリ様卜相唱、書付等ニモ此様ノ字相用、山下

築地御同様被仰付候、

(重壽側室、茂姫実母)
於登勢

右、今日ヨリ御内証ノ御方卜相唱、書付等ニモ認候様被

仰付候、

(朱書)同
六月

(山岡久澄)
市正

五二六三

(重壽側室、茂姫実母)
御内証ノ御方御門通融ノ節、大戸相開、本下座被仰付候

(卷之三十七 二六四二)

間、途中ニテ諸人参合候節モ右ニ可応候、

(朱書)同
六月

市正

五二六四

於千万様

右御名御順ノ儀、(繼豊側室、重年実母)
嶺松院様御次ニ被仰付候、御内証ノ

御方右名順ノ儀、心鏡院様次ニ被仰付候、

(朱書)同
六月

仲

(卷之二八 一七六三)

五二六五

諸御役人並筆者・小役人ノ儀、奉行・頭人又ハ同役中同

名有之候節ハ、名替願間ニハ致延引候モ有之候間、以前

申渡有之候通、無遲滞名替可願出旨如何例可申渡候、

(朱書)同
八月

(小松清春)
帶刀

(卷之二九 一八四五)

五二六六

御一門

年頭並屹立候節 一先供九人

五節句 一同五人

月次 一同三人

大身分

年頭 一先供七人

五節句 一同三人

御家老

年頭

一先供五人 一若党四人 一对挟箱 一手鏡 一長柄

一乘馬 一杵籠 一合羽籠 一抑両人

五節句

一若党四人 一对挟箱 一手鑰 一長柄 一乘馬

一沓籠 一合羽籠

平日

一若党四人 一手鑰 一長柄 一合羽籠

若年寄・大御目付・大御目付格

年頭

一先供三人 但、天氣次第、 一若党四人 一对挟箱

一手鑰 一長柄 一乘馬 一沓籠 一合羽籠

五節句並平日

一若党三人 一片挟箱 但、五節句計、 一長柄

一乘馬 但、五節句計、 一手鑰 一合羽籠 但、平日天

氣次第、

寺社奉行ヨリ寄合迄

年頭

一若党三四人 一片挟箱 一長柄 一手鑰

一乘馬勝手次第、 一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

五節句並平日

一若党兩人 一長柄勝手次第、 一手鑰

一天氣相ニ付テハ雨具等勝手次第、

御用人ヨリ御近習役並寄合並迄

年頭

一若党三人 一片挟箱 一長柄 一手鑰

一雨具天氣相付テハ勝手次第、

五節句

一若党一人 一手鑰 一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

御留守居ヨリ納殿役人迄

年頭

一若党兩人 一片挟箱勝手次第、 一長柄右同断

但、物頭迄為持、其以下ノ御役々ハ為持候ニ不及、

一手鑰 一雨具天氣相ニ付テハ勝手次第、

五節句並平日

一若党一人 一手鑰 但、五節句計、物頭ノ儀ハ平日為持来

候得共當番計、

御普請奉行以月次下脱カ御札罷出候御役人並無役之中通

年頭

一若党一人 但、五節句並平日草履取迄、

一小番・新番・御包丁人頭ノ儀ハ年頭若党勝手次第、

右ハ、先達テ供廻被定置候ヘトモ、此節ヨリ右之通被

仰付候、

(朱書)同
九月

(喜入入福)
主馬
(小松清香)
帶刀

五二六七

(卷之三 五 一三四五)

大御目付格以上

右、年頭・節旬日乘輿被仰付置候へトモ、向後年頭計

乘輿被仰付候、

一御役々召列候若党、向後年頭・五節旬計羽織為致着、

平日ハ勝手次第、

但、年頭上下為致着候面々有来通、

(朱書)同
九月

帶刀

五二六八

年頭・歳暮・上巳・端午・七夕・八朔・重陽 御祝儀一

通り、暑寒 一御見舞一通り、

松平(定勝)隱岐守様御娘 於里様

右ハ、隱岐守様御方御両敬被相勤候節迄モ御靈弱被成御

座、御名前不被仰進候処、此間御縁与ヲモ被為濟候付、

於琴様 於園様御同前御取替被成度旨、彼御方ヨリ申来、

此御方様ヨリモ年中御規ニテ 太守様 御前様 御子様

ヨリモ御祝詞・御見舞可被仰進候、

(朱書)同
九月

主馬

五二六九

(朱書)同九月 主馬
一江戸・京・大坂詰人數ノ儀、当分詰居候面々ヨリ都テ

二年詰被仰付候、併御家老御役御側廻ノ人ハ詰ノ長短

無構御見合ヲ以テ可被仰付候、

五二七〇

(朱書)同十一月 同
御前様御病氣御養生不被為叶、先月廿六日被遊御逝去候

段御到来候、

五二七一

毎月廿六日

(重敷雜室)
右、玉貌院様御忌日付、御肴類進上並御咎目事ノ儀、

(重敷雜室)
慈照院様御同様被仰付候、

(朱書)同
十二月

主馬

五二七二 (卷之三八 二七六二)

福昌寺御造替ノ節、先規ヲ以茅被遊御持事候ヘトモ、

思召有之、此以後 御前ニハ勿論御名代・諸士迄モ無用

被 仰付候、

(朱書)同
十二月

(山岡久澄)
市正

五二七三

鳥津八郎兵衛殿事、後藤清三郎殿、

右ハ、此御方御氏族ノ詛ヲ以御先祖代御願之趣有之、鳥

津ノ御家号被為名乘来候処、御先祖後藤性ニテ被召出候

故、今般右之通御家号被成御改候段御知ラセ有之候、他

性御改被成候付テハ御由緒ノ詛モ相絶候付、以来御内証

ヨリ御出入ノ儀ハ御断ニテ、表向ヨリ御出被成候様被仰

達候、

(朱書)「安永五申」
正月

(喜入久福)
主馬

五二七四

(朱書)同正月廿三日
(重兼側室、齊宣実母)
於千万様御事、

御本丸へ昨日被為入候処、直ニ御引移
被遊候様被仰出候、

五二七五

(朱書)同廿六日
一去閏十二月廿一日 虎寿丸様御髪置御祝、首尾克被為

濟候段申来候、

五二七六

(朱書)同四月
一今度御誕生之

(重兼女、茂姫)
御女子様、御名 於厚様卜被進候、

五二七七

(朱書)同
一於厚様御名順、

(重兼女、茂姫)
於篤様御次ニ被仰出候、

五二七八

(鳥津貴備女)
一於薰殿事、御内々ハ

(重兼)
太守様御妹分被成候段、先達テ

致通達置候ヘトモ、御縁組御願ノ節又従弟女ト為被

仰出事候間、其通可相心得候、御取扱ノ儀ハ此内何ソ

不相替候、

(朱書)同
四月

(小松清香)
帯刀

五二七九

上方表ヨリ男女抱下候節ハ永代・年季者共ニ抱主人ヨリ
(卷之一三 七〇一)

大坂手形所へ其首尾可申出候、

(朱書)同(四日)
五月

主馬

五二八〇

御料天草へ商ノ外療治等ニ付差越間敷旨、先達テ外城分

ヲ以申渡置候へトモ、向後御領内一統商買方トテモ天草

表へ差越候儀一切差留候、万一罷越候者有之候ハ、相糺、

吃ト其咎可申付候、

(朱書)同(一)
五月

主馬

帶刀

五二八一

行屋下橋一行屋橋

本孝行橋跡一孝行橋

蛭子下橋一蛭子橋

芝口小路下橋一潮見橋

右之通相唱候様被仰付候、

(朱書)同(一)
七月

主馬

五二八二

於篤様御事、

(後家存)

豊千代様へ御縁組被仰渡、御名 茂姫様

(卷之二八 一七六四)

卜被遊御拝領候付テハ一橋へ被对格別御取持被相改、御

順之儀 太守様 茂姫様 虎寿丸様卜被仰出、此様ノ字

被遊御用候、

(朱書)同(一七日)
八月

(島津入金)
左中

五二八三

(重兼御室、茂姫実母)
御内証御方

(卷之二八 一七四三)

右ハ、此節 茂姫様一橋へ御縁組被 仰出、格別成御

取扱ニ付 一橋ヨリ御移ノ趣有之候処、 御内証様ト

相唱、此様之字相用、御名順 於千万様御次被 仰出、

御高千六百石被遣之候、

一於千万様御名一所ニ書認候砌、於千万様 御内証様ト

相認候テハ不都合ニモ有之候ハ、其節ハ於登勢様ト

相認候様可相心得候、

一御門通之節致下座候儀ハ 於千万様御同様被仰付候、

(朱書)同(一)
八月

左中

五二八四

御近習役之儀、是迄御役ノ御礼不申上候得共、以来御近

習役被仰付候節ヨリ御役ノ御礼申上候様被 仰出候、
(朱書)同 十月 (小松清香) 帶刀

五二八五

(朱書)同十月 一田安種姫様御事、先達テ (家色) 公方様御養女被仰付、種
姫様卜奉称候付、種之文字名ニ用候儀並同唱迄モ遠慮
可仕候、

五二八六

(朱書)同 一御小納戸役 (宥宣) 虎寿丸様御抱守 御小納戸役並
右之通御役ノ順被仰出候、

一御紋所ニ似寄候紋所付候者ハ致遠慮候様、先年以來被
仰渡置候処、御紋ニ似寄紋所ナト付候者間ニハ有之候、
家ニ付由緒有之付来候者ハ格別、其外訳無之自分物数
寄ナトニテ付候事ハ可致無用候、

一刀之拵ナトニ御紋付候道具、当時致所持候者モ可有之
候、兼テ御紋付拝領被仰付候振合ノ者ハ申出次第御免
可被仰付候、右外先祖代致拝領用来候者ハ不苦候、
一御庶流方並御一門方ヨリ御紋付不致拝領者へ紋付ノ衣

類上下 遣候者ハ目立候様取直可致着用旨、先年被仰
渡置候、依訳紋付其儘ニテ相用候者ハ其趣可得御差図
候、家中ノ儀モ右ニ準候様、其人可相心得候、

五二八七

(朱書)同十一月 一今度御延生ノ (重養女) 御女子様、御名 於克様卜被進候、

五二八八

(朱書)同 一於克様御名御順、 (重養女) 於厚様御次被 仰出候、

五二八九

(五二八八号行間朱書) 於克様、御病氣御養生不被為叶、今申刻被遊 御夭亡候、
此段可被奉承知候、

戊五月三日

帶刀

五二九〇

御役又ハ地頭職之御礼 御在府ノ節ハ控置、 御下国ノ
節 御目見被仰付事候処、依御役柄ハ 江戸其外交代等
ニ付長々御礼不相濟、何力差支候儀モ有之候付、以来ハ

御在国ノ節ハ有来通 御目見被仰付、御在府中ハ進上物
相納、御札相濟候筋被仰付候、
(朱書)〔安永六酉〕

二月 (新納久盛)
波門

五二九一 (卷之二六 一六一五)

一虎寿丸様へ有馬上総介様御息女様御縁与、
(齊意) (朱書)〔於恒様〕

一敬姫様御事、奥平九八郎様へ御縁与、
(重孝女) (昌男)

右御願書、先月十八日御用番様へ被差出候段御到来候、
(朱書)〔安永五申〕廿七日

十二月 (喜入久福)
主馬

〔本文御願ノ儀、十一月廿七日御用番松平周防守様ヨリ
(行間朱書) (松井康福)

御願ノ通被仰渡候、

五二九二 (卷之四五 三三五〇)

八歳以下之者養子成ノ御札、是迄名代ヲ以進上物差上、

御札相濟候筋願出事候へトモ、以来ハ 御目見仕候年生

ニ相成候節願可申出候、尤、八歳以下ニテ家督ノ者ハ有

来通名代ヲ以御札可被仰付候、左候テ、右体御札相濟候

者ハ初テ之 御目見別段不被仰付事候へトモ、以来ハ

御目見仕候年齢相成候節願出候ハ、家督以後猶又 御目

見可被仰付候、
(朱書)〔同〕

十二月 波門

五二九三 (卷之二〇 一一七四)

江戸・京・大坂、御国許ヨリ年頭・歳暮其外不時安否尋

等二付テ、互ニ書状ヲ以申入儀有之候、御一門方・大御

目付以上へハ人々心入ヲ以申越候儀、勝手次第可有之候、

右ノ外ハ安否問又ハ祝儀等二付、文通無用被仰付候、乍

然親類並傍輩中、無摺用事等ノ節ハ互ノ文通只今ノ通可

有之候、其外文通無用被仰付候、近年江戸御国元共式日

御使ヲモ被相減、諸人書状多、荷高二モ有之、御時節柄

旁二付、右之通被仰付候旨被仰出候、
(朱書)〔安永六〕

正月 帯刀

五二九四 (卷之三三 一三三六八の1)

御上下並 御光越先御國中御休泊ノ御用宿、且御鷹方御

用ニ付諸外城相廻候節、御用宿又ハ諸御奉公人同断、御

用宿々札、以来別紙之通被仰付候、其外ノ儀モ右ニ準シ

其節々御用筋ノ訳相分候様相認、名前等書認候様可致候、

(朱書)同(十四日)
五月

(小松清香)
帶刀

御鷹宿何某

御馬宿何某

御鉄炮方宿何某

五二九五

(朱書)同(五月)
一御鷹匠頭

一尾畔預

右之通、尾畔奉行御役名被相改候、

五二九六

(朱書)同(一)
一御鷹係

一御鳥係

一尾畔方

右ハ、御側御用人・御近習役ノ内、当分尾畔方・御鷹

方・御鳥方被仰付置候人、右之通唱被相改候、

五二九七

(卷之四五 三三三九)

嫡子ヲ養子ニ遣候事、無抛申立願出候付吟味ノ上被仰付
事候処、内々ノ誤合ニテ致違變、本之通嫡子ニ相立、男
上リ致居候本家嫡子ヲ二男二男下リ願出候儀、甚以自由

ケ間敷事候条、向後右体違變後嫡子相立又ハ嫡子ヲ養子

ニ遣候儀、御免被成間敷候、本家相続ノ儀ハ格別候ヘト

モ、是以其節ノ吟味次第可被仰付候、

(朱書)同(一)
六月
(鳥津久金)
左中

(鳥津久健)
仲

五二九八

(朱書)同(六月)
一聖堂奉行

但、中通直触ニテ順ノ儀納殿役人次、

五二九九

(五三〇〇)見行間朱書
一聖堂奉行ノ事、教授、

右ノ通、御役名被相替候、

十月

伊賀

五三〇〇

(卷之五一 三九九四)

毎月十五日

右ハ、以来定日ニテ、御礼後 御座之間へ 御出座、聖
堂奉行へ講釈被仰付候間、大目付以上罷出可致拜聞候、

聖堂奉行差支候節ハ学頭ヨリ可相勤候、御在府ノ節ハ

於梅之間同断被仰付候、尤、御在府 御在国共御側御

用人・御近習役可相勤候、

(朱書)同
六月

左中

一御目通ニテ御目障相成候程ノ儀共、是迄御断申上来事

候ヘトモ、猶又其通屹ト可相心得候、

(朱書)同(九日)
七月

仲

五三〇一

(朱書)同
一講堂学頭

一中通

但、座順ノ儀、御右筆稽古次、

右之通、御役被相定候、

五三〇二

(五三〇一号行間朱書)
一学頭ノ事、助教、

右書同断、

天明六年十月

(島津久金)
伊賀

五三〇三

御目通ニ罷出候節、面部又ハ目立候場所へ膏葉付居候

節ハ致御届可罷出候、

(卷之三七 一五〇三)

五三〇四

先年 聖堂御建立ニ付、折角学間致出精候様被仰付、相

応修得ノ上其長候品ニ依テハ御見合ヲ以夫々勤方ヲモ可

被仰付事候ヘトモ、専学問入用ノ場所差当リ御記録方・

唐学方ニテ候間、以来右両所人数致不足、稽古被仰付候

節ハ講堂講釈人其外入学ノ子共ノ内、修練相成候者共ヨ

リ可被仰付候、左候ヘハ第一講堂被相立候詮モ相立、且

入学之者共励ニモ可相成候間、右之通被仰付事候条、往々

講釈人其外子共ニ至リ召入候節、兼テノ人柄且学問下地

等迄委遂吟味、随分無私申付候様被仰付候間、其趣不取

違様可致旨被 仰出候、

(朱書)同
八月

左中

五三〇五

町奉行 御近習役

右兩御役ノ儀、地頭職不被仰付候人ハ是迄年頭御太刀

進上不被仰付候ヘトモ、以來ノ儀、御役ノ御礼相濟候人

ハ地頭職不被付候テモ、御役ニ付年頭御太刀進上ニテ御

礼被仰付候、

(朱書)同
八月

(新納久隆)
波門

五三〇六

(朱書)同九月

(重年室 重兼実母)
一 正覺院様

(卷之二八 一七四四)

右ハ、格別之 御方様故、以來諸書付等ニモ右之通様

文字可相認候、

五三〇七

(朱書)同十一月

一 先月十五日

(齊意)

虎寿丸様御着袴御祝儀、首尾好被為濟候

(卷之二六 一五八四)

段御到来候、

五三〇八

(朱書)安永七戌二月

一 今度御誕生之

(重妻女)

御女子様へ 於陽様卜御名被進候、

五三〇九

(朱書)同三月

一 於陽様御名御順ノ儀、

(重妻女)

於克様御次被仰出候、

五三一〇

(五三〇九号行間朱書)

一 陽姫様御事、

牧姫様卜御名被進候、

安永九子二月

五三一(一)の1)

(五三二二号行間朱書)

一 牧姫様御病氣御養生不被為叶、先月廿九日晝被遊御天

亡候段御到来候、

天明四年辰八月

五三一(一)の2)

(五三二二号行間朱書)

一 牧姫様御法名

芙蓉院殿牧窓智玉大禪童子

(童女カ)

五三二二

組中ノ面々繼目養子又ハ違変等ノ願申出候節、妻子召列候人ハ其訳申出候、是迄ノ振合候ヘトモ、妻ノ儀ハ自夫へ相付事候間、以來ハ妻ノ文字相除、子共召列候儀迄ヲ願出候様申渡候間、其通可相心得候、

(朱書)同
四月

(小松清香)
帶刀

五三二三

納殿役人之事、御広敷頭、

御馬方之事、御馬預、

中通御目付之事、御供御目付、

糺明方加役之事、御裁許方加役、

納殿役之事、御広敷番、

宗門改方之事、宗門改役、

唐船方受込之事、唐船方、

御書院役人之事、御書院方預り、

中通之事、御近習通、

御留守居之事、御留守居付役、

諸御役所筆者之事、書役、

奥横目之事、御広敷横目、

御歩行之事、中小姓、

御門抑番之事、上番、

奥大番之事、御広敷大番、

御庭方御鳥預り之事、御庭方御鳥預、

御行器役之事、御膳配役、

御広敷番之事、御広敷御玄喚上番、

当分御広敷へ相詰候足輕之事、御広敷御玄喚中番、

御供走番之事、御供使足輕、

走番之事、仕足輕、

掃除番之事、下番、

御納戸方納殿之事、御広敷役所、

糺明奉行所之事、御裁許方、

右之通、御役名被相改、其外唱改名等被相替候旨被 仰

出候、

(朱書)同
五月

帶刀

五三一四

(朱書)同五月
御末之事、御膳所、

奥御簡所之事、御末、

奥御末之事、奥御膳所、

御簡所女中之事、御半下、

右之通、改名被相替候、

五三一五

公迎御用向 (家造) 公方様・大納言様、此様之字被相用由候付、

此御方ニテモ右ニ準此様ノ字相用候様被仰渡置候処、間

ニハ自分御祝儀・伺御機嫌等申上候節モ同様相認候モ有

之由心得違候間、御用向之外、御両殿様 (重孝女) 茂姫様 (繼豊) 真含

院様へハ以前之通此様之字相用、御姫様並御女中様方

ノ儀ハ当分之通可相心得候、

六月

(小松清香)
帯刀

五三一六

(卷之四九 三六九九)

諸御役座明前ノ奉行・頭人鑰受取、中途ヨリ為手廻供之

者へ為持先へ遣、又ハ御城内へ御用有之節ハ鑰受取候テ、

手伝ナトへ相渡遣、致明方等候儀モ有之由相聞得候、座々

明鑰ノ儀ニ付テハ先年分テ申渡候趣モ有之候処、龜末ノ

致方候条、向後ハ右申渡ノ趣ヲ以聊取違無之様可相心得

候、

(朱書同)
六月

帯刀

五三一七

(朱書同同七月)
翠黛院様 (重孝女、於先) 蓮心院様御忌日御夭亡ノ御事候故、御精進日

不被相立候、

五三一八

(卷之四〇 二八四七)

大御目付以上ノ御役々々始テ相越候面々、是迄多分夕

方罷越、又ハ退出掛ケ一通リ可致对面候、其砌持參物

等ニ不及、以後見合輕キ品応分限相送候儀ハ可為勝手

次第候、

一御側御用人・御近習役並支配下有之面々モ右準シ可相

心得候、

(朱書同)
閏七月

帯刀

五三一九

(卷之四六 三四三九)
(卷之三三 二二二九九)

御役人其外依勤向誓詞被仰付候面々、都テ当日ヨリ精

進被仰付来候へトモ、以来ハ御前誓詞其外勤向ニ付

御紋付拝領不被仰付人へ御一門方ヨリ紋付被遣候ハ、(不脱力)

目立候様消為致着候、若紛敷有之候ハ、被遣候方迄モ

可被及御沙汰候、

一御家老並重御役其外家柄之面々、紋付ハ輕キ御役人進

モ、御館内又ハ世上徘徊ノ節、致着用候儀一切無用被

仰付候、書役・小役人等ノ儀ハ有来通候、

(朱書)同
閏七月

帯刀

五三二〇 (卷之四八 三六五三)

(毛利軍就)
松平大膳太夫様

(毛利治親)
松平志岐守様

右ハ、瑞仙院様御縁与、此節猶又 大膳太夫様御孫 於 (有馬頼貞、毛利吉元女)

恒様御縁与付テハ無御抛御間柄、殊御父子様ニハ御懇意

ノ御事ニモ候故、以来御家内様方共御両敬之御取替被成

度段被仰進趣有之、向後御互ニ御両敬之御取替被成筈候

段申来候、

(朱書)同
九月

(二階堂行旦)

主計

五三二一 (卷之三三 二四二二)

替駕籠為持候儀、勝手次第被仰付候、御供有之節ハユタ

ン掛持人足看板為致着用、行列ノ内可為持候、間ノ上下

ノ節ハ看板着用荷作ニテ為持候儀モ勝手次第被仰付候旨

被 仰出候、

(朱書)同
十二月

(山岡久澄)
市正

五三二二 (卷之二八 一七〇三の1)

(重妻女)
於陽様御事、陽姫様ト唱、御内輪ニテハ書付等ニモ可

相認候、左候テ、以来 御姉女様・御末女様共姫之字相

用、御両敬ノ御方様へハ姫之字相用候様被仰付候、公

辺向又ハ表立候節ハ有来通可心得候、

(朱書)安永八亥
正月 主計

五三二三 (卷之二四 一三三一)

一御廟所

但、御廟所ノ儀ハ御靈屋ト是迄相唱候事モ有之候へ

トモ、以来共書付等ニモ右之通相認候様被仰付候、

一御靈屋

但、御寺客殿等ノ内ニテ無之、別ニ 御一方様ニテ

モ御幾方様ニテモ御位牌御安置ノ所ハ右之通相唱候

様被仰付候、

一御位牌殿

但、御一方様ニテモ 御幾方様ニテモ御寺客殿等ノ

内ニ御安置ノ御座ハ右之通相唱候様被仰付候、

右之通、江戸御国元共相唱、書付等ニモ相認候様被仰

付候、

(朱書)同一
正月

(小松清香)
帯刀

五三二四

一大御目付格以上

右之面々、湯治・暮参(墓方)・私領御暇等其外公私共、右類

遠近諸外城へ差越候節ハ為持道具有来通ニテ、於旅宿

幔幕並幕打七候様被仰付候、

但、幔幕ノ儀ハ、勤方ニテ差越候節ハ吃卜打七、湯

治其外自分事ニテ差越候節ハ、先御国内ハ右之通有

之儀卜相心得往々不取違、可成長ハ幔幕打七候様可

致候、

一寄合並以上並物頭御役以上

右同断ノ節、手道具為持可差越候、

一御普請奉行以下

右御役ノ面々、勤方ニ付テ差越候節ハ手道具為持、自

分事ニテ差越候節ハ勝手次第可致候、

一勤方ニ付テ諸外城へ差越候面々、於旅宿宿札出候儀ハ

先達被仰渡置候得共、間ニハ無其儀趣モ相聞得候間、

御役人ハ勿論諸士其外ニテモ公私共都テ宿札出候様被

仰付候、

一他国へ罷出候節幔幕並幕打七候、家格御役ノ儀ハ間々

道中迎モ有来通可相心得候、

(朱書)同一
二月

帯刀
(鳥津久健)
仲

五三二五

(朱書)同三月
一江戸上御屋敷

(繼豊様室、竹姫)

浄岸院様御仏殿御位牌殿卜相唱候様可

申渡候、

五三二六

(朱書)同四月
一奥付士之事、御広敷付士、

奥付足輕之事、御広敷付足輕、

右之通被相改候、

(卷之三〇 一九四二)

五三二七

(卷之四九 三三三四)

御家老

一 御番帳仕付之事、御番帳係、
右若御年寄首尾島津大進

一 御記録方之事、御記録方係、

一 尾畔方之事、尾畔係、

一 奥方之事、奥係、

一 御鷹方之事、御鷹係、

一 福昌寺方之事、福昌寺係、

一 御庭方之事、御庭係、

一 浄光明寺方之事、浄光明寺係、

一 御鳥方之事、御鳥係、

一 南泉院方之事、南泉院係、

大御目付

一 異国方之事、異国方係、

一 御勘気者方之事、御勘気者係、

一 公義流人方之事、公義流人係、

一 公義御用人数改方之事、公義御用人数改係、

一 宗門方之事、宗門改係、

一 御書院方之事、御書院方支配、

一 今和泉家差引之事、今和泉家係、

御側御用人

但、差引有之面々三家共同断、

一 奥方之事、奥係、

若御年寄

一 御記録方之事、御記録方係、

一 誓詞方之事、誓詞係、

一 御納戸方之事、御納戸方係、

一 御厩方之事、御馬係、

一 御側方奏者番之事、御側奏者番、

一 御目見方之事、諸御礼事係、

一 公義御内証方之事、公義御内証方係、

一 諸御役人月次出仕並六組之士御祝儀申上候首尾之事、

御近習役川上頼母

諸士出仕事係、

一 尾畔方之事、尾畔係、

一 御連歌御作代之首尾之事、御連歌係、

右外、御鷹係御近習役同断、

御用人

五三二八

(卷之四五 三三四〇)

一 公義御用人數改方ノ事、公義御用人數改係、

一 小普請銀方之事、小普請銀改係、

一 南泉院方之事、南泉院係、

一 御厩方ノ事、御馬係、

一 鉄炮改方之事、鉄炮改係、

一 異国方之事、異国方係、

一 宗門方取次之事、宗門改係、

御勝手方御用人小笠原郷左衛門

一 道之島方之事、道之島係、横山権右衛門

一 琉球方ノ事、琉球方係、

御目付

一 御裁許方加役之事、御裁許方係、

郡奉行

一 櫛方之事、櫛方係、

右之通、唱被相替候旨被 仰出候、

四月

(朱書)同
(小松清香) 帶刀
(島津久健) 仲

嫡子相果候カ、又ハ養子遣候節、二男ヲ嫡子ニ願申出、

右ニ準三男以下男上リ相願、二男以下右同断之節、依

願男上リ御免被仰付儀候ヘトモ、向後左之通被仰付候、

一 嫡子相果又ハ養子ニ遣候節、嫡子成願之儀ハ只今迄之

通ニテ、三男以下男上リ不被仰付候、乍然右之内御支

族又ハ為差立家筋ニテ二男三男ニ男上リ有之候ハ、

家格・進上物等宜家柄ノ面々ハ是迄之通男上リ願申出、

家格・進上物等ニモ不相掛家筋ハ嫡子成ノ外男上リ願

不及申出ニ、生ノナリニテ被差置候、

一家格・進上物等ニ不相掛、嫡子養子違變ニテ立婦候者

ハ本家之長子ニ被入置、以後別立ヲモ願出候節ハ諸事

其家之ニ男格式被仰付候、尤、男上リノ儀前条之通被

仰付候付、二男以下養子違變ニテ立婦候者ハ自本々生

ノ次第入来筈候、

一 嫡子以下進上物等格式宜者、養子ニ遣候跡ニテ男上リ

致居、違變ニテ立婦候ハ、本ノ姿ニハ不被仰付、其家

之末子格式ニテ本家ノ家内被入置、別立願出候ハ、諸

事其家之末子同様ノ格式被仰付候、乍然二男三男ハ男

上り無之者ハ違變以後ニ二男又ハ三男ノ場可被仰付候、

右之通、於江戸御格式被相替候旨申来候、

(朱書)同 四月(十八日)

帶刀

仲

五三二九

(朱書)同五月

一 孝恭院様(家治男、家基)

右ハ、大納言様御院号、右之通奉称候旨江戸ヨリ申

来候、

五三三〇

(朱書)同六月

一 於恒様御事、恒姫様卜相唱、書付等ニモ相認候様被

仰付候、

五三三一

(朱書)同

一 町中へ致中宿居候者共、鰐入脇差一切不相用、都テ以

前之通平町人同前相心得、長一人迄ハ合口帶ノ様町奉

行ヨリ町中へ申渡候、

五三三二 (卷之二四 一三三〇S1)

一 慈眼院様(家久) 御影御位牌、御一所ニ御安置有之、御影堂

卜御書付等ニモ有之、平日之唱ニモ其通御座候、

一 淨岸院様(雜置雜室、竹苑) 御位牌殿ノ儀、御靈屋卜可申候、

一 惣 御位牌所之儀、御靈屋卜可申候、

右、福昌寺、

一 大中様(黄久) 御影御位牌、御一所ニ南林寺客殿上之間へ御

安置有之、平日 御位牌所卜唱、致書付等ニモ、且

御代参被仰渡候節 御位牌所へ 御代参卜有之候、寺

家ノ内へ御安置ニ付テハ御影堂又ハ 御影殿共難申、

此節仰渡ニモ 御影殿卜申唱相見得不申候付、御位

牌殿卜可申哉、

一 得仏様(忠久) 御影御位牌、御一所ニ淨光明寺へ御安置、平

日御莊嚴等之儀、御影様御方宜仕、唱ニハ淨光明寺

殿卜申候由、且 御代参被仰渡候節ハ 得仏様御忌日

淨光明寺へ 御代参卜有之候、右南林寺同前 御位牌

殿卜可申哉、

一 淨国院様(吉廣御室、雜置実母) 御位牌、得仏様 御影御位牌、

御同棚へ御安置有之、御位牌殿卜可申哉、

(綱貫總卷)
一 信証院様 御影御位牌、御一所二寿国寺家別ニ御安置

之所有之、平日之唱 御影堂ト申候由、右御安置之所

御造立之時分 御位牌所御造立之筈ニテ、御影ノ儀右

所へ御安置被成筈候旨被仰渡候書留有之、且 御代参

被仰渡候節 御位牌所へ 御代参ト有之候間、 御靈

屋ト可申哉、

一 (綱貫支) 信解院様 御影御位牌、御一所二右同断寿国寺へ御安

置有之、御造立ノ砌諸書付へ 御位牌堂ト有之候、

信証院様御方同断靈屋ト可申哉、

右ハ、此節 御廟所 御靈屋唱ノ儀被仰渡、右 御位

牌御安置ノ所唱難相究候付、此段得差図候、以上、

亥二月八日

寺社奉行

五三三三三(の1) (卷之二四 一三三三〇の2)

(五三三三三号行間朱書)
本文御影堂ノ儀、御靈屋ト唱候テモ差支候儀無御座候、

右ニ付テハ福昌寺へモ相糺候処、 御影様ノ儀ハ御存生

ノ内御思召ヲ以御彫刻為被仰付由、福昌寺へ申伝有之由

承届申候、左候へハ、御位牌ノ儀ハ 御逝去以後一所ニ

御安置為被遊ニテハ有之間敷哉ト為申候、御存生ノ内御

思召為有之 御影様ノ儀トモ御座候ハ、御影堂ト唱候

テモ御差支無御座候ハ、往古ヨリ唱来候通御影堂ト唱候

筋可然存申候、此段申出候、以上、

亥三月

寺社奉行

五三三三三(の2)

(五三三三三号行間朱書)
本文都テ吟味ノ通被仰付候、

八月

(小松傳書)
帶刀

五三三三四

(朱書「同十月」)
一 明時館

右、此節天文館御造立ニ付右之通唱、書付等ニモ相記

候様被仰付候、

五三三三五

(朱書「同十一月廿四日」)
一 主上崩御ニ付、殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀、日数五日

停止、

五三三六

(朱書)安永九子正月
一先帝崩御ノ処、御継体不被為 在候付、(奥仁親王) 閑院宮息男

祐宮御方為 御養子 御 被為在候、先帝御進号 後

桃園院卜奉称候、

五三三七

一是ヨリ以来御側支配ノ人名替之願被申出候節ハ、部屋

(柄方) 柄ノ人ハ何某何男卜相記可被申出候、此段致通達候、

(朱書)同子 二月五日 島津登(久連)

五三三八

(朱書)同五月
(島津實備女、島津久柄室)
一於薰殿事、於峯殿、

右之通、依御願御名被遣候旨申来候、

五三三九

(重繁女、家齊室)
一茂姫様正御誕生日六月十七日ノ儀ハ 公義重キ御日柄

故、以来右御誕生日御祝同月十九日被究置候ヘトモ、

於 御内輪ハ六月十七日被遊御祝、一橋へ被進物等ノ

儀ハ同十九日被究置候段、江戸ヨリ申来候、

(朱書)同 七月

(島津久起) 大進

五三四〇

(卷之四九 三七三五)

一御側之事、奥、

御輿之事、大奥、

御近習役之事、御側役、

御側御小姓之事、奥御小姓、

奥御小姓之事、大奥御小姓、

御側医師之事、奥御医師、

御側御同朋之事、奥御同朋、

御側御茶道之事、奥御茶道、

奥御医師之事、御広敷御医師、

与力之事、用達、

右用達於他所相唱候節ハ付人用達、

諸座付士之事、何方付与力、

外城衆中之事、郷士、

足輕之事、同心、

右之通、唱並御役名等被相替候旨被仰出候、

(朱書)同 七月

大進

五三四一 (卷之五〇 三八五五)

一 御書院方支配

一 御能方

右ハ、是迄大御目付支配候処、以来若御年寄支配被仰

付候、

(朱書)同(廿七日)

七月

(島津久起)

大進

五三四二 (卷之四九 三七三二)

一 御側詰御勝手方添役 御側詰御小姓頭 御側医師

右御役名、御役人帳被相除候旨被仰出候、

(朱書)同(七月)

七月

大進

五三四三 (卷之五〇 三八九二)

一 大御番頭

一 御近習通

一 御役格寺社奉行同格ニテ、座順ノ儀上席、

一 諸給分寺社奉行同格

一 与頭並奏者番相勤来候人ハ有来通、

(詰力) 一 諸所芍薬之間縁類

一日勤

一 諸職延之調

一月限調

一 御番帳仕付首尾

一 六組之士御祝儀申上候首尾

右之通、新規御役被相立候、

(朱書)同(廿一日)

七月

(喜入久種)

主馬

五三四四

(五三四三号行間朱書)

一 大御番頭ノ事、大番頭、

右ノ通被相替候、

天明六年十月

(喜入久種)

安房

五三四五 (卷之五二 四二二五の1)

一 御近習番

右ハ、是迄御側御小姓ノ内ヨリ被差分置候ヘトモ、以

来右之通御役名被相立、御側御小姓同格、表御小姓上

被仰付候旨被仰出候、

(朱書)同(八月)

大進

五三四六

(卷之五〇 三八九六)

一御城内之外諸御役人へ大御番頭ヨリ御用ノ節ハ大御番頭座出ノ書付ヲ以向々へ可被申越候、此旨役々へモ可申聞置候、

八月

(小松播磨 帶刀)

五三四七

(卷之三七 二六九一)

一武村ノ内、此節(嶺邊開室、重平美母)嶺松院様へ被進候御屋敷、五本松御

屋敷卜唱、書付ニモ可相認候、

五三四八

(卷之三三 二六九一)

一御側廻ノ儀、向後奥向又ハ奥勤被相唱、諸書付ニモ可

相認旨被 仰出候、

五三四九

(卷之三三 二六九一)

一御上下御供並間上下ノ節、伏見・大坂滞在中宿賃ノ儀、
現人数ノ分ハ御物払、(空百)人数ハ諸人ヨリ相払来候へト

モ、向後於大坂御賦銀之内ヨリ差引被仰付、都テ御物ヨリ宿主へ一所相渡候様被仰付候段、江戸ヨリ申来候、

(朱書)同一 三月

大進

五三五〇

(卷之三三 二四九一)

一御一門方於御座之間 御目見ノ節、以来脇差被帶候様被 仰出候、

五三五二

(卷之三三 二四九二)

一奥・表共ニ以来 御出座大身分以下 御目見ノ節、御

褥御用可被遊旨被 仰出候、

五三五三

(卷之四九 三七三六)

一御書院小役人之事、御書院小頭、

右之通、役名被相替候、

五三五三

(卷之三三 二三四九)

一大御目付格以上、登 城其外自分事ニテモ屹立候節、
对ノ挑灯、供挑灯見合定紋付可相用候、

一御側役並以上同断ノ節、对ノ挑灯可相用候、
一御用人以下御側役並迄家来一人ツ、召列来候へトモ、

以來諸節句平日一兩人ノ間勝手次第可召列候、

(行間朱書)
「本文ノ通候へトモ、平日兩人召列候テモ不差支程ノ人

ハ其通ニテ、依所帶向難調人ハ一人召列候テモ不苦候、

宜敷方可致儀ハ主人見込次第可有之候、」

一 御側役並以上、諸節句御挟箱可為持候、

一 右同以上、平日長柄勝手次第、

(行間朱書)
「本文、平日長柄持七候テモ不差支人ハ其通候、依人柄

ハ不持七候テモ不苦候、」

一 諸御役々、御代參其外勤事ニテモ自分事ニモ屹立候

節、心場所柄不見苦様、供廻勝手次第可召列候、

(行間朱書)
「本文ニ付テハ前条供廻引札ノ通準可被相心得候、」

(朱書) 同
五月

(島津久金)
左中
(島津久健)
仲

五三五四

(卷之五一 四〇七九)

(朱書) 同五月
一 御本丸御鷹匠頭

一 尾畔御鷹匠頭

右之通、御役名被相立候、

五三五五

(朱書) 同
一 御鳥見頭格

一 六人賦

右之通、先達テ御役被仰付、御役順ノ儀御鳥見頭次ニ

被仰付置候、

五三五六

(朱書) 同
一 御小納戸役之事、御小納戸、

右之通、御役名被相替候、

五三五七

(朱書) 同
一 鷹野支度ノ儀、以來野装束ト相唱候様被仰付候、

五三五八

(卷之四九 三七二〇)

一 奥方之事、奥係、

大奥方之事、大奥係、

右之通、唱被相替候旨被仰出候条、諸書付等ニモ相認、

御側方ト有之候名目ハ都テ可相除候、

(朱書) 同
閏四月

(島津久起)
大進

五月

五三五九

(朱書)同五月
一郡奉行見習

右之通、御役新規被相立、御役順御裁許方見習次被仰付候、

五三六〇

一 一日掛 御出ノ節ハ遠近ノ無差別御供御先番ノ面々、

以来野袴不及着用袴可致着用候、御茶道・御医師ノ儀

ハ平日ニテ可相勤候、尤、御女中様方御出ノ節モ右ニ

準候様被仰付候、

(朱書)同
閏五月

大進

五三六一

一 島津兵庫殿嫡女 (久敏、加治平) 於 (明也) 殿

右御養女ニ被成、御本丸大奥へ御引取御養育、追テ

島津又之進殿へ御 (由持、佐土原) 御取結ノ筈候、
(空目)

(朱書)同
閏五月

左中

五三六二

(朱書)同六月
一御近習番所書役ノ事、御側役所書役、

右之通、此節役名被相替候、

五三六三

(朱書)同
一山本大膳殿

右、島津但馬守殿ヨリ御役ノ儀有之、義絶被成度田沼

主殿頭様へ御届書被差出候処、御受取被置候段、江戸

ヨリ申来候、

五三六四

(卷之三 五 一三四三)

一ヤツレニテ罷出候節、家来共へ股立取ラセ候モ有之由

候、家格並御役格供廻外、右体ヤツレノ節ハ若党シユ

ス股立、

但、聖堂稽古場ナトへ為稽古召出候面々、聖堂内股

立為取候儀ハ勝手次第、

一御一門内ヲ初、諸士之妻並家内之人ニ至、平日迎モ若

党召列候程ノ人ハ若党半股立又ハシユス股立ノ間、先

私並供仰ハ有来通股立、

(朱書)同
六月

(島津久健)
仲

五三六五

一得仏様

瑞仙院様

月桂院様

六月

空

右、浄光明寺御廟所御位牌殿へ 御下国脇盆両日之内

一日、年頭・歳暮 御発馬前可被遊 御仏詣候、御

仏無之砌且又 御在府ノ節ハ 御代参可被仰付候、其

外 御代参等有来通、

一得仏様御牌前へ 御仏詣ノ節ハ左之御牌前へモ可被遊

御拝礼候、

道仏様

道忍様

道義様

道鑑様

貞嶽院様

得台院様

浄温院様

理玄院様

梅林院様

浄国院様

右、御廟所御位牌殿へ正御忌日、正・五・九月御忌日

御下国脇盆両日之内一日、年頭・歳暮 御発駕前可被

遊 御仏詣候、 御仏詣無之砌是又 御在府ノ節ハ

御代参可被仰付候、其外 御代参等有来通、

一正・五・九月御忌日並正御忌日二付 御仏詣之節ハ、

瑞仙院様 月桂院様 御靈前へハ 思召次第可被遊
御拝礼候、

右之通、以来可被遊 御仏詣旨被 仰出候、

五三六六

一慈昭院様

寛陽院様

陽和院様

春清院様

真修院様

大玄院様

□室院様

靈龍院様

右、福昌寺 御廟所 御靈前へ 御下国脇盆両日之内

一日、年頭・歳暮 御発駕前可被遊 御仏詣候、御

仏詣無之砌且又 御在府ノ節ハ 御代参可被仰付候、

其外 御代参等有来通、

一正・五・九月 御忌日並正御忌日付 御仏詣ノ節ハ、

宥邦院様以来之 御靈前へハ 思召次第可被遊 御拝

礼候、

蓮心院様

翠黛院様

照雲院様

翠黛院様

右、恵灯院 御靈前へハ福昌寺へ前同断、 御仏詣ノ

節 思召次第可被遊 御仏詣候、

右之通、以來可被遊 御仏詣旨被 仰出候、
(朱書)同
六月 空

五三六七

(朱書)同六月
一 於明様

右、来ル十五日 御本丸へ御引越二付、当日ヨリ大輿
へ被成御座候内ハ此様ノ字相用候様被仰出候、

五三六八

(五三六七号行間朱書)
於明様御事、

明姫君様卜奉唱、御名順ノ儀ハ 牧姫様
(重妻女)

御次二被仰出候、

同六月

(島津久起)
大進

五三六九

一 徳川豊千代様御事、
(一)橋治男、後家子

御奏者被 仰出、 若君様卜可

奉称候、御殿西丸へ被 仰出、種姫君様御弟之御統候
(家造妻女)

旨被仰渡、且茂姫様御事、 民部卿様御屋形へ御引取
(重妻女、家子造)
(二)橋治男

被成候段、御用番様ヨリ被仰渡、先月十九日無御滞御

引取被為済候、

一 寄合以上之二男ヲ始別立願ノ節、現高付励無之、漸々

買地ヲ以高何程可致付励候間、家格御見合ヲ以被仰付

被下度願出候迎、其通ニハ被仰付間敷、現付励ニ応シ

家格可被仰付候、尤、無御扱 御統等ニテ 思召ヲ以

家格被仰付候儀ハ格二候、
(別脱カ)

一 漸々買地ヲ以高何程可致付励旨願出、其高頭ニ応シ家

格寄合・寄合並等ニ被仰付置候、家筋ヲ以最初願高員

数付励無之、殊更一二代余相過候家モ有之候、右家之

面々当家督代願通ノ高買地又ハ付励等可致候、若又於

不相調ハ隠居家格等ノ節、首尾可申出候、

(朱書)同
六月

大進

五三七〇

一 御上下ノ節六拾人又ハ三拾人御備為御持被遊候儀、向

後御家督初テ 御上下並疏人被召列、 御部屋柄初テ
(柄カ)

御上下ノ節、其外右ニ準候折目ニハ六拾人御備被召列、

右外 御上下ノ節六拾人・三拾人御備ノ儀ハ時々ノ

思召ヲ以被仰付筋被究置候、

(朱書)同
六月

大進

五三七一 (卷之五〇 三九四八)

一御近習(朱書)同九月

右之通、御役名其外モ相唱候様被仰出候、

五三七二

一表御書院本四之間ノ所 表御書院三之間、当分御取付

之間溜之間、御取付之間脇新口座御取付之間、当分溜

之間 大溜、

右ハ、此節江戸御座柄居替又ハ新御座出来候付、右通

唱候様被仰出候、

十月(朱書)同

仲(島津久健)

五三七三

一茂姫様(朱書)同十月、先月廿三日一橋屋形ヨリ御本丸へ被為入、西

丸へ御引移、御縁女様ト奉称、御順 種姫君様 御

縁女様 御部屋様ト申上御順候旨被仰渡候、

五三七四

(卷之四九 三三七九)

一御子様方・御女中様方へ被召付置候面々、何方様御

方ト是迄唱来候へトモ、以来何方様御付ト相唱、書付

等ニモ其通可相認旨被仰出候、

十二月(朱書)同

仲

五三七五

一今般於江戸 御男子様被遊御誕生思召有之、(重豪男) 松平大膳(奥平昌男)

大夫様御子様分被為成、彼御方ヨリ富之進様ト御名被

進、御内輪ニテハ毛利御名字御用被成候、追テ屹ト御

弘可有之候へトモ、此旨先御内々可奉承知置候、

正月(朱書)天明二年庚

仲

五三七六

一若君様御名 家斉公ト奉称候付、斉之文字名乗相用候

儀、向後無用可仕候、同唱ニテモ遠慮可仕候、改候者

勝手次第可相改候、家ノ字ハ先年以來遠慮ノ事候、

正月(朱書)同

仲

五三七七

一長崎御付人之儀、長崎又ハ於他所聞役ト相唱、書付等(朱書)同正月

二モ相認、御内輪ニテハ是迄ノ通、

(朱書「同」)
二月

仲

五三七八

五三七九

(卷之二九 一八三五)

一御鍵奉行

一同心・御小者其外諸座付一身者ノ儀、是迄片書名字相

一御弓奉行

用來、且又家来ノ内主人依格式片書名字相用、町役人

一御鉄炮奉行

ノ内片書名字用來候モ有之候ヘトモ、公辺向又ハ外々

但、御役格物頭次、

様ニテノ振合不相並候付、以來書下名字被仰付候、町

一物頭兼務

役ノ儀ハ乙名頭以上同断被仰付候、
(二階堂若旦)

一与力・同心支配、物頭之通、

(朱書「同」)
二月
主計

一詰所、物頭同席、

一諸給分、物頭之通、

五三八〇

(卷之五〇 三八二二)

右之通、御役被相建、諸首尾是迄物頭仕来候通ニテ、

一御家老之儀ハ格別ノ御役候故、御国元江戸共殿中ニテ、

向々御道具請込被仰付候、

御近習其外何方へ罷通候節モ表坊主可致先立候、若御

一御小納戸頭取

年寄以下ノ儀ハ有来通心得候様被仰付候、
(喜入久福)

但、一御役格御使番次、

(朱書「同」)
三月
主馬

一拾一人賦

一御役料並御心付銀御小納戸之通、

五三八一

一勤方御小納戸之通ニテ御小納戸頭取、

一御縁女様、(重妻女、茂姫、家齊室)西丸大奥へ被為人、無比類御恐悦ノ御御事
(御心付)

右之通、御役被相建候、

候、(重妻御室)御内証様ニハ御実母ノ御事候へハ、公辺向並

一橋被对当分ノ通ニテハ御不都(合脱力)ニモ候間、御内輪ノ御

格式一等宜御取扱被仰付候旨申来候、
(朱書)同

三月

(二階堂行且)
主計

(行間朱書)「本文ノ通候ヘトモ、御名御順ノ儀ハ此内ニ相替儀無之

旨申来候、」

五三八二

一今暁寅上刻(重兼開迄)於千万様御安産 御男子様被遊御誕生候、

三月十八日

(島津久健)
仲

五三八三

(五三八二号行間朱書)御出生ノ 御男子様、俄ニ御機嫌不被遊御勝候処、御養

生不被為叶、今暁被遊御夭亡候、

三月廿三日

主計

五三八四

(朱書)同四月一御縁女様へ年中御献上物被仰渡候、

五三八五

(卷之三三 二二五)

一是迄御用挑灯ノ儀、御納戸ハ納ノ字、御兵具所ハ兵ノ

字ト諸座向願ニ付其振合目印致来候ヘトモ、以来何方

役所ニテモ江戸御国元共ニ役所ノ文字等不相記、別紙

絵形ノ通目印迄相用候様被仰付候間、此節ヨリ新規改

二不及、只今迄用來候挑灯張替ノ節ヨリ相改候様被仰

付候、

一江戸御国元共御馬外方へ出候砌、相付候挑灯ハ無目印

御紋付可相用候、

一於御国元御鷹据廻等ノ節、前条同断、

一御腰物其外右体格別之御道具相付候挑灯ハ有来通御紋

付可相用候、

(朱書)同四月

主計

五三八六

(朱書)同四月三日

一若君様、今日ヨリ 大納言様ト可奉称候、

五三八七

(朱書)同六月

一御本丸御鷹部屋事、山下御鷹部屋、

右之通唱被相改、御鷹匠頭ヲ初其外役名等御本丸卜有之候処ハ山下卜被相替候、

五三九一 (卷之三九 二八二九)

五三八八 (卷之四九 三七四〇)

一御婦館之事、御婦殿、

右之通相唱、諸書付ニモ可認旨被 仰出候段申来候、

五三八九

一御側役所之事、御用部屋、

右之通被相替候旨被 仰出候段申来候条、唱又ハ諸書

付等モ其通可相認候、

十月

仲

五三九〇 (卷之三九 二四一五)

一御用物荷札、薩州荷物卜認来候ヘトモ、以来 薩州預

リ 何某

右之通、往来共宰領名前相認候様被仰付候段申来候、

十月

仲

一嘉祥 玄猪

右、以来御祝日被相建候付、大御目付以上並奥勤人数

於奥御祝詞可申上候、且又大奥ヘハ兼テ御広敷ヘ罷上

り来候面々並御広敷勤ノ面々ハ御祝詞可申上候、玄猪

ノ儀ハ晩方御祝詞可申上候、

但、支度ノ儀ハ、嘉祥ハ染帷子・半袴、玄猪ハ服紗

物・半袴、

右之通、以来被相定候条、御本丸大奥・山下築地御屋

敷ノ儀モ江戸大奥御格ニ被準候様被 仰出候、

十一月 廿五日

仲

五三九二

一与方相談役ノ事、与方取次、

右之通被相替候条、此旨可申渡候、

五三九三

一御狩衣ノ儀ハ四品ノ御服ニテ不被為召旨、先達テ被

仰出置候ヘトモ、於 御国元御社参等ノ節ハ被為 召

儀モ可有之候間、御官服ニ可被建置候旨被仰出候段、

此節申来候、

(朱書)同

十一月

(二階堂行旦)

主計

五三九四

(卷之三七 二五八〇)

一御盃事

右八、是迄御次第書等ニ御取替ト認来候ヘトモ、向後

右之通唱、書付等ニモ相認候様被仰付候段申来候、

(朱書)同

十一月

(廿九日)

主計

五三九五

(卷之三七 二六一二)

一此節新御作事御殿之事、東御殿、

一東御門之事、御広敷御門、

一南御門之事、銅御門、

一東御切手御門之事、東御門、

右之通相唱候様被 仰出候旨申来候、

(朱書)同

十一月

(島津久健)

仲

五三九六

一御役職分ノ儀、何係ト認来候ヘトモ、此掛ノ字相用候

様被 仰出候段申来候条、諸書付等ニモ其通可相認候、

(朱書)天明三年卯

正月

(喜入久福)

主馬

五三九七

一御高三万石

右八、^(弁意)虎寿丸様為御部屋料旧臘六日御差分被進、於

御部屋 御判物被遊御頂戴候段御到来候、

(朱書)同

正月

主馬

五三九八

一御内証様

(重藤朝室、茂姫実母)

右八、被对 西之丸御取持御前様御同様ニテ、御名順

姫様御次、此様ノ字相用候儀ハ只今之通被仰付候旨被

仰出候段申来候、

(朱書)同

正月

主馬

五三九九

(卷之三十七 二六二九)

一上之間拾五帖・二之間拾五帖敷ノ御座

一御書院

右次拾帖敷ノ御座

一御勝手之間

右次六帖敷ノ御座

一表御客間

右次拾五帖敷ノ御座

一御客間溜

右向七帖半

一表御小姓番所

奥御鈴ノ間

一御鈴ノ間

御使者間向上ノ間拾帖・二ノ間拾帖敷ノ御座

一御取付ノ間

右之通、東御殿御差廻可相唱旨被仰出候、

(朱書同)
正月

主馬

五四〇〇

(卷之三十六 二四四一)

一御煤下之事、御煤払、

一御煤竿之事、御煤竹、

右之通相唱候様被 仰出候旨申来候、

(朱書同)
正月

主馬

五四〇一

(朱書同二月)
一十二月十三日 御煤払御定日

右之通被相替候旨被仰出候段申来候、

五四〇二

(卷之四九 三三四一)

一御記録方ノ事、御記録掛、

一御納戸方ノ事、御納戸、

掛ノ役々ハ御納戸掛卜相唱、支配下ハ有来通、

一琉球方ノ事、琉球掛、

一異国方ノ事、異国船掛、

一御兵具所へ相掛候御役々並役々、御兵具掛卜相唱、支

配下ハ有来通、

一御書院方掛ノ事、御書院方、

一御能方

支配頭並相掛候御役々ハ御能掛ト相唱、惣人数ハ御能方ト唱可申候、

一公義御内証方掛之事、公義御内証御勤向掛、

一出仕方ノ事、諸御礼掛、

一聖堂方ノ事、聖堂掛、

一御裁許方ノ事、御裁許掛、

一御厩

支配頭並掛ノ御役々又ハ役々、御厩掛ト唱可申候、

支配下ハ有来通、

一唐船方ノ事、唐船改、

一寺社方取次

一御勤定方小頭

一御法事方ノ事、御法事掛、

一御趣法方ノ事、御趣法掛、

役所ハ御趣法方ト相唱、惣人数ハ御趣法掛ト相唱可

申候、

一御作事方ノ事、御作事方、

右之通被相替候条、猶又諸向右ニ可準旨被仰出候段

申来候条、唱又帳面等可相直候、

(朱書「同」)
二月

(鳥津久健)
仲

五四〇三

一嚶役ノ事、郷士年寄、

組頭役ノ事、組頭、

横目役ノ事、横目、

山横目ノ事、山方掛横目、

野廻り役ノ事、野廻り、

郡見舞役ノ事、郡見廻、

竹木見廻役ノ事、竹木見廻り、

山見廻ノ事、山方見廻り、

相談役談合役共ニ相談役、

普請見廻役ノ事、普請方見廻り、

地頭仮屋守役ノ事、地頭仮屋守、

櫛楮見廻ノ事、櫛楮掛、

駒見廻役ノ事、駒掛、

牧司役ノ事、御牧預、

道見廻ノ事、道方掛、

- 兵具見廻ノ事、兵具掛、
城山見廻ノ事、御城山見廻リ、
鹿倉山見廻リ、
御立山見廻ノ事、御留山見廻リ、
磯山見廻リ、
溝見廻ノ事、用水掛、
神事見廻ノ事、神事掛、
鉄砲場見廻リ、
弓場見廻リ、
御兵具蔵見廻ノ事、御兵具蔵預、
高帳方ノ事、高帳掛、
口事聞役ノ事、
六組主取ノ事、六組頭取、
浦締方、
津口番役ノ事、津口番、
寺役人ノ事、寺用聞、
支配方ノ事、模合差引、
与中取ノ事、与方中取、
諸所物主役ノ事、何番勤番、
- 浦主取役ノ事、浦主取、
船大工主取役ノ事、船大工主取、
大工主取役ノ事、大工主取、
主取石切ノ事、石切主取、
木挽主取役ノ事、木挽主取、
主取桶結ノ事、桶結主取、
主取染役ノ事、染物主取、
鍛冶主取役ノ事、鍛冶主取、
毛付転勞役ノ事、転勞役、
衆中触ノ事、触役、
唐船通事ノ事、唐通事、
御番所有之諸所御番所在番役ノ事、御番所勤番、
小川内定番物主ノ事、定番、
出水番所役人ノ事、御番所改役、
高岡糶木在番ノ事、糶木定番、
右諸所郷士役名功才ノ事、名主、
作与頭ノ事、耕作主取、
水守ノ事、用水掛下役、
下山見廻ノ事、山見廻リ下役、

下櫛見廻ノ事、櫛楮見廻リ下役、

右、諸所百姓役名、

右ハ、諸外城郷士並百姓等ノ役名並唱、右之通被相替

候、

(朱書)同
二月

(喜入久福
主馬)

(島津久健)
仲

五四〇四

(朱書)同三月

一年頭御松飾、以来ハ正月七日朝取払、縁松ニ取替、十

五日晚取払候様被仰付候、

五四〇五

一定役ノ内、与方ノ儀ニ付組頭ヨリ禁足被申付候節ハ以

来役料米等差引可申付候、左候テ、赦免以後又々何様

ノ儀ニテ禁足被申付程ノ儀モ有之候ハ、屹卜可及沙汰

候、尤、寄役ノ儀ハ、是迄之通禁足被申付候節ハ勤方

可差免候、

(朱書)同
四月

仲

五四〇六

一定役ノ内、与方ノ儀ニ付与頭ヨリ禁足被申付候節ハ役

料米等逼寒^(寒カ)同前差引申付候間、赦免ノ節、何月何日ヨ

リ禁足申付置、今日差免候付役料米等差引申渡有之候

様、夫々ノ支配へ相付可被申出候、左候テ、取次ノ御

用人ヨリ遂披露候上、差引方首尾掛へ取次証文ヲ以申

渡候筋申付候、

(朱書)同
四月

仲

五四〇七

(朱書)同四月

一御使者ノ儀、御内輪ニテハ諸書付ニモ御使卜相認並可

相唱候、尤、脇方へ差出候節ハ有来通御使者卜相認並

可相唱旨被仰出候段申来候、

五四〇八

(朱書)同

一大奥御鈴御用取次候勤ハ奥走番卜可相唱候、尤、是迄

之通御小納戸兼務被仰付置候旨被 仰出候段申来候、

五四〇九

- 一 役料米六石ツ、被下置候御馬乗ノ事、御召馬乗、
- 一 御馬乗定稽古ノ事、御馬乗見習、
- 一 御馬乗稽古寄ノ事、御馬乗稽古、
- 一 御中間ノ事、御口之者、
- 一 御借馬口取人足ノ事、中間、
- 右之通被相替、役料米四石四斗被下置候御馬乗ノ儀ハ
- 当分ノ通御馬乗ト可相唱旨被 仰出候段申来候、

(朱書)同

五月

仲

五四一〇

(卷之四九 三七四二)

- 一 御厩肝入ノ事、御口之者頭、
- 一 御納戸肝煎ノ事、御小人頭、
- 一 御小者ノ事、御小人、
- 一 御徒手廻人足ノ事、御小者、
- 一 御手廻人足ノ事、御小者、
- 右之通、以来被相替候旨被仰出候段申来候、

(朱書)同

五月

仲

五四一一

(卷之四四 三二七八)

- 一 御一門家、本屋敷一ヶ所・中屋敷一ヶ所・下屋敷二ヶ所、都合四ヶ所此節被相定、当分右屋敷數ヨリ相重被致所持候人此内ノ通ニテ、以来ハ所持ノ屋敷被相除、又々屋敷直ノ儀被申出候テモ右四ヶ所ノ外不被成御免候、居屋敷へ引続候屋敷買取、御物へ差上御借屋敷ニテ一囲御免被仰付来候へトモ、是又御借屋敷ニテ不被仰付候、本屋敷差迫、無扱儀ニ候ハ、四ヶ所外添地ニテ一囲相円メ候儀、願ノ依訳可被成御免候、

- 一 大身分・御家老、是迄有来候通屋敷ハ当分ノ通ニテ、中屋敷・下屋敷都合三ヶ所御免被仰付、右外被成御免間敷候、居屋敷へ引続候屋敷ハ右同断被仰付置候、
- 一人柄役柄無構、持高二千石致所持居、居屋敷差迫、家来等召置候余地無之、願之依訳下屋敷一ヶ所可被成御免候、
- 一 若御年寄・大御目付相勤候人、依願下屋敷一ヶ所ノ外ハ被成御免間敷候、併居屋敷手狭ニテ、父子勤方有之、家来等召置候余地無之、無扱差支候者依願訳ハ二ヶ所迄ハ御免可被仰付候、右外何様差支候共不被成御免候、

居屋敷へ引続候屋敷ノ儀ハ同断被仰付候、

一 寄合並以上・直觸以上ノ御役相勤候人、只今迄ハ右同断御借屋敷ニテ一囲ニ御免被仰付来候へトモ、是又以

来ハ添地ニテ一囲御免被仰付候間、御借屋敷ノ名目相除、添地ト可相唱候、尤、願ノ節々委敷逐吟味、差支

ノ程無扱相聞得候ハ、依其趣御免可被仰付候、

一 御城下土之内、何ソ依訳御物ヨリ御借屋敷被仰付置候地面ノ儀ハ御借地ト可相唱候、能々無扱訳筋無之者へ

ハ、御借地ハ被仰仕間敷候、御借地ニテ罷居候者屋敷

トハ相唱間敷候、

一 郷土並諸職人座付等御借地ニテ罷居候者モ屋敷トハ唱間敷候、都テ御借地ト相唱、書付等ニモ可相認候、

一 南泉院下大小路御借地ノ類モ右同断被仰付候間、御預地又ハ御借屋敷ナト、相唱間敷候、

一 家々ニテ中屋敷ヲ本屋敷ニ繰替、下屋敷ヲ中屋敷ニ相改候類ノ儀ハ勝手次第可有之候、尤、右屋敷ノ内、藏

屋敷又ハ作事屋敷ナト、相唱候儀モ勝手次第可有之候へトモ、御勘定所帳面又ハ何ソニ付書付等ヲ以申出候

節ハ前件之通相心得候様被仰付候、

右之通被相定候条、当分自分ニ買取候屋敷御物へ差上、

御借屋敷ニテ一囲ニ致所持居候屋敷ノ儀モ添地被下置候間、御借屋敷ノ名目相除、諸帳面添地ト可相改候、

持高千石以下ニテ無役ノ人へハ家格人柄等無構、千坪以上ノ屋敷ハ被成御免間敷候、当分持来候人ハ此内之

通被仰付置候、其外ノ儀ハ是迄ノ通、

(朱書)同

五月

(喜入久福)

主馬

(島津久徳) 仲

五四二二

一年頭並諸御規式ノ節、御上リ物ノ御次第不同有之候付、以来ハ御雜煮・御吸物・御肴ト可差上候、御容様へモ

同前ノ御次第可差上候、

一 右同断ノ節、是迄ハ御差味ト相記候へトモ、御肴被相認、依御嘉例御差味差上候節ハ御膳所ニテ相心得、有

来通可差上候、尤、間之御献立等ニモ同前可相認候、

(島津久金) 左中

五月

五四一三 (卷之四九 三七四三)

一御道中付並諸書付等ニモ是迄ハ九州筋ト相認候ヘトモ、

以來ハ九州路ト可相認候、

五四一八

一投首ノ事、棒、

右之通唱候様江戶ヨリ申來候、

五四一四 (卷之四九 三七四四)

一郷士ノ儀、外城郷士ト書付等ニ相認儀モ有之候ヘトモ、

向後外城ノ字相除、郷士ト相認候様被仰付候、

五四一九 (卷之五一 四〇〇二)

一御普請方ノ事、御作事方、

一御普請奉行ノ事、御作事奉行、

右之通、御役名並唱被相替候旨被 仰出候段申來候、

五四一五

一雜葉之事、飼葉、

右之通向後唱、書付等ニモ相記候様可致旨申來候、

五四二〇 (卷之五一 四〇〇三)

一御普請奉行

右、御役被相立、御勝手方支配ニテ、御作奉行次被仰

付、是迄御作事方ニテ致首尾來候御普請ノ分可致請込

候、

五四一六 (卷之四九 三七四七)

一江戸居付ノ事、定府、

右之通被相替候旨被 仰出候段申來候、

五四二一 (卷之五一 四〇〇四)

一御家作其外小屋作等ヲ始、右体造作ノ儀御作事ト可相

唱候、

一道・橋・石垣・土手・川普請等ヲ始、右体ノ儀御普請

五四一七

一櫛ノ事、他国ニテハハゼト專相唱由候ニ付、承立不通

兼様可相心得候、

ト相唱候、

(朱書)同(五)
十月

(喜入久福)
主馬

五四二五

(卷之四九 三七四九)

一郷士ヨリ御城下士被召出候節ハ何方郷士何某、

右、御城下へ被召出、一代又ハ代々大番又ハ何々ニ被

入置候、

一家来・一身者ヨリ郷士等ニ被召出候節何方家来、又ハ

誰与何々等ノ訳何某、

右被召出、其身一代何方郷士被仰付候、

一他所ヨリ御抱ノ人何方御家来、又ハ牢人・町人等ノ訳

何某、

右被召抱、大番被入置候、

一同断、一身者等ニテ御抱ノ節何某、

右被召抱、何某組同心又ハ何ニ被入置候、

右之通、以来被仰付候条、諸書付等ニモ可相認候、

(朱書)同(一)
十月

主馬

五四二二

(朱書)同(十月)
一年頭御規式ノ内、御手掛ノ事、御喰摘共両様相唱、御

次第書等ニハ御喰摘ト可相認旨被 仰出候、

(卷之三六 二四六三)

五四二三

一御用部屋ノ儀ハ格別成御用ヲモ取扱事候間、御家老逆

モ御座内へ不入様可相心得旨先年被 仰出、猶又此節

堅相守、是迄御近習通奥向勤ノ面々、御用部屋入口ニ

テ御用向相達来候ヘトモ、以来御近習番所脇廊下末ニ

テ御用筋相達、尤、御用部屋へ控間敷旨 仰出候、

(朱書)同(一)
十月

五四二四

(朱書)同(一)
一表境鳴子口ノ事、奥口、

一御草履取部屋口ノ事、御近習口、

右之通被相替候条、此旨可承面々へ可申渡候、

(卷之三七 二六一三)

五四二六

(朱書)同(十月)
一御記録方稽古ノ事、御記録方見習、

一御右筆稽古ノ事、御右筆見習、

右之通被相替候旨被仰出候、

(卷之四九 三七五〇)

五四二七

(朱書)同
一御庭奉行

一御近習通

一五人賦

一御役料米二拾七俵

一御役格御勘定方小頭次、代官上、

右之通、御役被相建候、

五四二八

(朱書)同十一月
一御馬乗稽古

右御役名被相除候、

一馬医見習

右馬医稽古同前稽古ノ名目被相除、右之通役名被相立

候、

五四二九(の1)

一御領内在方ノ儀ヲ前々ヨリ名ト唱来候ヘトモ、以来在

ト唱、書付等ニモ可相認候、

一聖堂方ヘ 聖堂ヘ 何某方ヘ

右之通、方ト相認候儀ハ不依何篇可成程不相認様可相

心得旨 御沙汰ノ趣有之候条、向後右振合相心得、尤

不相用候テ通兼候儀ハ其通可有之事候ヘトモ、随分氣

ヲ付最通候様可申渡候、

十一月

主馬

仲

(五四二九の2)

(行間朱書)
一本文之通申渡置候処、比日間ニハ諸書付等ニ方ト唱候

向モ有之候間、以来右体ノ儀無之様寄々致順達候様致

承知候、

天明七未十一月廿日

御目付

五四三〇

(朱書)同十一月

一十二月廿七日ヨリ晦日迄御役人中麻上下着用致来候ヘ

トモ、廿七日其儀ニ不及、廿九日ノ儀モ晦日有之節ハ

着用ニ不及候、

五四三一

(重年室、重豪実母)

一正覚院様正御忌日ニ付、以来四本御道具ニテ加治木長

年寺へ被遊 御仏詣、福昌寺へハ 御代參被 仰付候、

但、一御召物御敷斗目・半御袴、

一福昌寺へ 御仏詣ノ節モ御召物同断、

一御代參着服敷斗目・半袴、

一御同人様へ御在国中間ノ 御仏詣ノ節ハ二本御道具ニ

テ可被遊 御仏詣候、

但、一御召物御服沙物・半御袴、

一福昌寺へ 御仏詣ノ節モ御召物同断、

右之通、以来 御仏詣又ハ 御代參被 仰付候旨被仰

出候、

(朱書)同
十一月

(島津久起)
大進

五四三二

一御膳番

右ハ、御納戸奉行御小納戸ヨリ加役被仰付、御常調方

ハ勿論御前向へ相掛候儀ハ都テ引受被仰付候、加役ノ

事候故、御役名被相立候ニテハ無之候へトモ、表向御

規式事其外万端御膳番請持ノ儀ニ付、諸向ヨリノ通達

等差支候間、以来ハ御納戸奉行ノ次ニ御膳番ト御役名

ニテ当リ有之候様可致候、尤、御膳番ヨリモ諸向へ御
役ニテ致向合儀モ可有之候、

(朱書)同
十一月

大進

五四三三

(卷之四四 三二七九)

一持留地又ハ持留屋敷ノ儀、以来抱屋敷ト相唱へク候、

家来・家番等不召置田畑迄ノ地面ハ持留高ト唱来候へ

トモ、是又抱地ト相改、仕向ノ儀ハ当分通ニテ、向後

左之通被相定候、

一抱屋敷ノ儀、持高ノ不依多少、寄合並以上ハ二ヶ所、

其外ハ一ヶ所被定置候、持来候分ハ其通ニテ被差置候、

一抱屋敷ノ儀、御一門ヲ始御役柄又ハ依人体、御定ノ外

無抛願之訳モ候ハ、其節ノ吟味次第可被仰付候、

一新規抱屋敷用等致候節ハ願可申出候、御鷹場等ノ支於

有之ハ蔽屋敷等ニテ召置候筋可被仰付候、

一抱地ノ儀ハ是迄ノ通、御物へ不差障場所ハ御免可被仰

付候、困ハ一切不相成候、竹木植込候儀モ見分ノ上可

差免候、乍然鹿兒島近在ハ勿論諸外城ニテモ御拳場・

御鷹捉飼場等ノ儀ハ、御鳥見方見分ノ上不差支候ハ、

筋々願出、其筋ノ吟味次第可被仰付候、

一郷士ノ儀ハ都テ御城下士同前ノ振合被仰付候、

(朱書)天明四辰

正月

大進

一使同心ノ事、触番、

右之通被相替候旨被仰出候段申来候、

五四三七

(朱書)同一磯・尾畔・武御屋敷、五本松御屋敷、御飯屋等ノ儀、

御茶屋卜可相唱旨被仰出候、

五四三四

(朱書)同正月廿四日
(兼德御室、宗信実母)一妙心院様御遺体、今夜御入棺、来ル廿六日夜福昌寺

へ御入寺、同廿九日夜於福昌寺御送式相濟、即夜良

英寺へ御納リノ筈候、

五四三八

(朱書)同一琉球飯屋守ノ事、琉球館聞役、

右之通、唱並役名被相替候旨被仰出候、

(卷之一四 八一三)

五四三五

(卷之四九 三七〇二)

一書役・小役人又ハ御能方・御書院方、其外何ソニ付稽

古被仰付置候面々役名ノ儀、以来ハ定扶持等被下置候

人ハ都テ稽古ノ名目相除、何々見習卜可相唱候、自分

稽古又ハ兼テ被下方等無之、勤ノ日数ニ応シ御扶持被

下候人ハ何々稽古卜相唱、両条共書付ニモ可相認候、

(朱書)同二月

大進

五四三九

(卷之七 三五七)

(朱書)同四月一以前ヨリ外城卜唱来候へトモ郷卜可相唱候、近外城・

近名ナト、唱来候儀ハ近郷・近村又ハ近在卜相唱、尤、

諸書付等ニモ可相認候、

五四四〇

一御留守居何某組小頭何某

御留守居何某組同心

五四三六

(朱書)同三月一川割所ノ事、川越方、

右ハ、外番・小番外番惣人数ノ儀、以来詰合ノ御留守

居請持夫々支配頭ヲ相記、右之通宿札其外諸書付等二

モ可相認候、依場所惣唱相用候節、御留守居組小頭又

ハ同心ト可相心得候、

右之通、於江戸被相定候旨申来候、

(朱書)同
四月 主計 (二階堂行且)

五四四一

一大奥

一御書院

只今ノ通、大奥奥御書院ノ事

一御容間上之間同所次之間之事 (客力)

一同二之間右次ノ間ノ事

一御広座御末上之間ノ事

一御三ノ間

右之通、爰許御座唱被相替候被 仰出候、 (旨脱カ)

(朱書)同
五月 大進 (島津久起)

五四四二

(朱書)同六月(重兼男)
一今度 御男子様御出生、 亀五郎様ト奉称候段申来候、

五四四三(の1)

(五四四二発行間朱書)
一亀五郎様御事、御病氣被差発、先月廿九日被遊 御天

亡候段御到来候、

同八月十五日

(五四四三の2)

(五四四四発行間朱書)
一亀五郎様御法名 香樹院殿秋露幻清大禪童子

五四四四

(卷之四二 三三三三)

一遠方寺入被仰付候者へ相付差越候親類御暇願ノ儀、勤

方有之候者八ツ後ニ相成候ハ、奉行・頭人承届暇差免、

翌日其首尾可申出候、尤、御暇被下何某相付差越候段、

与頭へ首尾申出候様、可承向々へ可申渡候、

(朱書)同
六月 仲 (島津久健)

五四四五

(卷之三〇 一九一五)

(朱書)同六月
一是迄 御城下士ト相唱来候へトモ、以来ハ大番ト相唱、

書付等ニモ相認候様被仰付候、

五四四六

一若御年寄以上ノ名致遠慮事候故、是迄李何ト続候名付

居候者モ可致遠慮候、尤、以来共ニ若御年寄以上名ノ

内、右通唱続候名ハ都テ遠慮致候様被仰付候、

六月

仲

五四四七

一死苦ノ儀、以来穢多ト相唱、書付等ニモ其通可相認候、

慶賀ノ儀ハ是迄ノ通、

五四四八

一穢・武御屋敷、五本松御屋敷、御飯屋守ノ事

但、同心下番有之候所ハ下番ト相唱、人足召仕候所

ハ小仕又ハ掃除番ト依其向聞ノ宜様可相唱候、

右之通、唱被相替候旨申来候、

七月

大進

五四四九

一何ソニ付願書等部屋柄ノ人名前申出候節ハ、都テ何ノ

何左衛門嫡子末子ノ段、肩書可相記候、御役相勤候者

ハ部屋柄ニテモ不及肩書候、

五四五〇

一伊佐郡佐志ノ文字、佐司ト相認候モ有之候ヘトモ、以

前ヨリ 公辺ニモ佐志ノ文字被用來候間、帳面等其通

相直、以来無間違様可記置候、

五四五一

一御側役ヨリ重御役ノ事候ヘハ土用達ヲモ被召付、役人

御免ニテ、諸御役所ヨリ御用ノ依程合、用達又ハ役人

招呼申渡候テ可相濟事候、然処御用ノ品無勘弁、右ヨ

リ相下リ候御役柄ノ面々、直名前ヲ以輕キ御用向等触

書ニテ御用申渡、何ニ付上納物ナトノ書付等ニモ直名

前ニテ相渡趣ニ相聞得、御役ノ高下モ無弁、甚以如何

ノ儀被 思召上候、以来御側役ヨリ以上御役相勤候者

ハ右御役ヨリ相下リ候御役柄ノ者ヨリ直名前ヲ以御用

(卷之四一 二一九七五)
(卷之四三 三二二〇〇)

(卷之四三 三二〇〇)

申渡候儀、曾テ致間敷候、自然直不申聞候テ難叶御用

五四五三 (卷之三〇 一九一六)

モ有之砌八月番御用人へ其訳申達、月番御用人ヨリ何方役所へ御用ニ付罷出候様切紙ヲ以可申達候、御御役

一御城下士ノ儀、以来大番ト唱、書付等致候様被仰付候段、先達テ申渡置候趣有之候、右付テハ御城下士ト

以上之御役ヨリハ相互ニ御用可申渡儀候ヘトモ、是又御先祖様代被 仰出置候通、切紙ヲ以御用申渡、触書

唱、書付等致候儀二限、右通被仰付儀候間、惣名何ニ付諸士又ハ小番・新番・大番ト唱、書付等相認候儀ハ

ニテ申渡候儀致間敷候、且又切支丹御改ノ節、直印申渡由候ヘトモ、是又寄合並以上ノ家格ヨリハ役人印形

是迄之通可相心得候、
(朱書)同
九月 仲 (島津久健)

ニテ相済由候間、直印ニ不及、役人印形ニテ可申渡候、
(朱書)同
九月 主計 (二階基行旦)

五四五四
一虎寿丸様御事、先月廿七日於 大御書院 太守様御加
(寄直)

五四五二 (卷之三〇 一九〇三)

冠、御家御伝来之御元服之御式有之、御名 又三郎様
(朱書)夕方

一小番家ノ部屋栖、小番ノ御暇申出、小役人勤致居候者御暇差上、繼目・家督相濟、一往家格ノ致勤方、其後

ト御改、御実名 忠克様ト奉称候、
(五四五号行間朱書)

又々御暇申出、外小役人勤致候儀ハ左モ可有之候ヘトモ、本之役儀被仰付候儀、自由ケ間敷、以来右体ノ願

五四五五
又三郎様御実名 忠克様ト奉称候付、右御実名ノ字且又唱、同様ノ名乗相用候者ハ早速可相改候、

申出候テモ容易ニハ被仰付間敷候、
(朱書)同
九月 主計

同十月

五四五六

一尾畔奉行

一御役順御庭奉行次

一奥支配

右之通、御役新規ニ被相立、是迄御鷹匠頭受持罷在候

御用向ノ内、御鷹方へ相掛候外ハ都テ引受被仰付候、

左候テ、宮内源内是迄罷在候居宅尾畔奉行御役宅被仰

付、引越相勤候様被仰付候、

(朱書)同
十一月

(島津久起
近江)

五四五九

(朱書)同
一高輪御下屋敷御庭廻ノ事、御庭方、

右之通被相改候、

五四六〇

(卷之三七 二六一八)

(朱書)同
一御本殿ノ事、御内輪ニテハ 御殿下以來相唱候様被

仰出候、

五四六一

一御家御伝来之御元服御式ニ付テハ御折拾二合・御樽三

荷被進御先例候へトモ、(舟意) 又三郎様御元服ニ付 太守

様思召ヲ以被相重、御折拾六合・御樽五荷・白木御弓

二拾張・御征矢二百筋被進候、尤、以來 御代々様御

元服御式ノ節モ此節ノ通被進候様可致首尾旨被仰出候、

(朱書)同
十一月

仲

五四五八
(朱書)同
一御中剃御元服ノ事、以來御家御伝来ノ御元服之御式卜
唱、書付等ニモ相認候様被 仰付候、

五四六二

一南泉院

右ハ、院家住持ノ節 御目見等被仰付候砌、御礼席着

座所等僧正席ヨリハ相劣候へトモ、右住持ノ儀ハ大雄

山御別当職ノ事候間、進上物備所・御礼席着座所・控

所、都テ僧正同様被仰付候旨被仰出候、

(朱書)同
十二月

将監

五四六三

(卷之三十七 二六〇八)

(朱書)天明五廿五月

一 奏吉了ノ間ノ事、台子ノ間、

右之通、唱被相替候旨被仰出候、

五四六四

一九月廿六日

(重書)慈照院様 毎月御朝夕

十月廿六日

(重書)玉貌院様 御正忌日御朝夕

六月十六日

(重書)円徳院様 同

十一月七日

(重書)正覚院様 同

十二月廿二日

(一橋宗尹)覚了院様 同

七月十二日

同 右毎月

(齊直)又三郎様御精進日被相定候、

(朱書)天明四辰
十二月

(一階堂行直)主計

五四六五

(朱書)同正月
一 御書院方之事、御数寄屋、

一 御書院方預之事、御数寄屋頭、

右之通被相改候条、御書院方何々ト唱来候分ハ御数寄

屋何ト相改可申旨被 仰出候段申来候、

五四六七

(朱書)同
一 御側詰

右御役被相定、座順若御年寄上ニ被仰付候、

五四六八

(朱書)同
一 御小納戸並

一 御小納戸並

右御役、向後被相除候旨被 仰出候、

五四六八

(朱書)同
一 御礼席ノ儀、年頭ハ 御白書院、月次ハ 御黒書院、

五節句・八朔 御白書院ニテ御礼可被 仰上旨、田沼

(意次)主殿頭様ヨリ被 仰渡候、

五四六九

(卷之五〇 三八二〇)

(島津久健 仲)

一御家老奥・表ト双方二月番相勤候ヘトモ、以来ハ奥・

表共月番ヨリ相勤等候条、此旨可申聞置候、

五四七二

(卷之四三 三一九九)

一御寺方 御参詣ノ節、御仏詣ト相認来候ヘトモ、以

来ハ 御参詣ト可相認旨被仰出候、

五四七〇

一御手道具

一豹之皮御道具

五四七三

(卷之五七 四四三九)

右二本、以来於御国元何方御出ノ節迎モ可被遊為御持

旨被 仰出候段申来候、

箱、以来篋屋形可為持候、其外可為勝手次第候、

五四七一

(卷之三二 一九六六)

一肩書名字ノ儀、公義ハ勿論御国家ニテモ一向無之事

ニテ不相弁候間、向後一統被相止、是迄肩書ノ者又ハ

末々迄モ都テ書下被仰付候、尤、士縁与御免ノ差別有

之儀ハ身分ノ格式ヲ以先規之通被仰付候、且又書下相

成候付、身分ノ格式迄モ相替候様心得違、不都合ノ致

方有之者ハ無名字ニ可被召成候条、心得違無之様可申

渡候、

五四七五

(卷之三七 二六一六)

(朱書「同」) 正月(廿三日)

(島津久起) 近江

一公辺へ御嫡子様又ハ御隠居様御居宅ト被仰出置候御屋
地ノ所、以来御内輪ニテハ二九ト相唱候様被仰付候、

(續豊御室、宗信実母)

一 妙心院様御存生内被成御座候地面ヲ山下御屋敷ト申来

候得共、山下ノ名目被相除、右地面ハ二丸一冊ニ被仰

付候、左候テ、当分山下御鷹部屋被建置候迄迄ヲ山下

ト相唱候様被仰付候、

一 二丸御門之事、矢来御門、

一 南口御門之事、御台所御門、

一 御下屋敷御門之事、二丸御門、

一 右同裏御門之事、南御門、

一 御勘定所門之事、御役所御門、

一 随神門脇御中門之事、花園御門、

右之通、相唱候様被仰付候、尤、公辺へ御書出等有之

節ハ前ノ絵図面之通被仰付候、

(朱書)同十六日

(萬津久起)

近江

二月

(朱書)同
二月

近江

五四七六

一 男上ノ儀被仰渡置候趣有之候処、二男ヲ養子遣置、三

男 御目見願等申出候節、考違二男ノ筋申出候類ノ儀

有之候、右体ノ儀ハ頭人ヨリモ氣ヲ付、与中不及迷惑

様可取調旨被 仰出候、

島津家歴代制度卷之六十八 天明

〔朱書〕(五年カ)
〔天明四年辰〕

五四七七 (卷之三二 一九九四)

一 郷土以下ノ医師ハ脇差計帶來候ヘトモ、俗生ニテ帶刀

ノ者ハ致医業候迎モ帶刀ハ可致候、

一 仕坊主ノ儀、勤内以來脇差計ニテ刀ハ帶間敷候、

五四七八

〔朱書〕同
一 御膳所頭

右、御役被相建、御役格尾畔奉行頭(次カ) 五人賦被仰付候、

向後 御規式事其外御招請等ノ重立候御式ノ節計御膳

所へ罷出相勤、尤、御常調方ハ不及相勤、日勤ニモ不

及候、

五四七九

(卷之四三 三二八二)
(卷之四三 三二八三)

一 御前御用ハ御家老連名、其外ハ一名、

一 大奉書切紙、上包状封紙、

御側役以上無役ノ寄合以上へ 御用人所ヨリ、

一 中奉書切紙、上包美濃紙又ハ下紙、

御留守居以下御役人限無役ノ寄合並へ 御用人等ヨリ、

一 中奉書切紙、

諸士へ 御用人ヨリ触書、

一 杉原切紙ニテ上包下紙等、

右ハ、御役替又ハ重立候御用ニ付、着服麻上下ニテ罷

出候様、是迄御側役以上ハ切紙、其以下ハ触書ニテ申

渡來候ヘトモ、以來切紙等差出候節ハ右之通相改、御

役人以上ハ不及着服沙汰相認、尤、取仕立認様別紙之

通、於御役席御目付直達ノ儀ハ是迄之通可相心得候、

尤、外御役々ヨリ向々ニ申越候儀ハ右ニ準旨被 仰出

候段申來候、

〔朱書〕同
二月 (島津久起)
近江

(頭註)

〔朱書〕
〔御前御用御家老直達大目付ニテ相調有之、〕

何某殿
、
、
、

御用ノ儀候間、明何日何時可被罷出候、以上、

月日
何ノ誰

||
||
||

何某殿

何某殿
何ノ誰

御用ノ儀候間、明何日何時可被罷出候、以上、

月日
何ノ誰

何某殿

五四八〇 (卷之四六 三五四三)

(朱書)同二月
一不調法ノ儀有之候テ、差出候書物ニ御差図次第御断申
上度旨相認来候ヘトモ、以来ハ何分モ差控候儀奉伺候
ハ、可申出候、尤、是迄御断ト申儀差控ト唱被相替候
間、其通可相心得候、

一御断等申出候節、依事何分申渡迄ノ間、相慎罷在候様

ニト申渡来候儀有之候、是ハ差控罷在候様ニト可申渡
事、

五四八一

(朱書)同
一鳩之間之事、伺公之間、

右之通被相替候旨被仰出候段申来候、

五四八二

(朱書)同
一御一門へ何々被下候ト相認候モ有之候ヘトモ、被進候

ト相認可然候、依事ハ被下ト認候儀モ可有之旨、御

沙汰之趣申来候、

五四八三

(朱書)同
一島津左衛門

右ハ、此以前御家老ヲモ相勤且家柄ニモ申候間、格別
ノ 思召ヲ以、向後月次於 御座ノ間御札申上、年始・
五節句・八朔ノ儀ハ是迄之通、

(卷之三七 二四九九)

五四八四

(卷之五九 四五九一)

一年始其外御礼席結構被仰渡置候処、正月十五日御登

城ノ節、於御黒書院初テ御礼被仰上候付、御居殘御礼

被仰上、西丸へモ御上リ同断ノ御礼被仰上候、左候テ、

西丸へ十五日御登 城、以来朔日ニ御繰替被仰渡候、

将又此節ヨリ御達事等別段有之、初テノ儀故久松筑前(定愷)

守殿へ御留守居付役ヲ以致返納候へトモ、此以後ハ御

達ノ御書付不及返納、御答ノ儀ハ御留守居名前ニテ申

出筈候、右次第故、以来ハ此御方へ計御達ノ御書付差

出、前代ヨリ有来候諸家留守居触出候写ハ不差出、御

留守居方帳面迄仕付置筈候旨申来候、

(朱書)同
三月

(島津入起)
近江

五四八五

(卷之四六 三五四四)

一差控ノ儀申出候節、勤方ノ儀ハ是迄之通得差図候上、

不及遠慮段申渡有之候テモ、差控ト相伺候程ノ事候間、

御目通ノ儀ハ何分差図無之内ハ差控候様可相心得候、

▽天明七未五月

(二階堂行旦)
主計△

(行間朱書)
「本文二付、向後 御目通並月次御礼ノ節、差控申上置

候間、如何可仕哉ノ旨前以御用人へ相付、可得差図旨
被仰渡候、

同三月」

五四八六

(朱書)同三月
一此以前ヨリ御役人諸士へ御用ノ節、是迄ハ御請星ヲ以

相済来候へトモ、御請ノ節、星ノ場ヲ奉ト可相認旨被

仰渡候付テハ、輕御用逆モ勤方有之人ハ勤御座又ハ同

役ヨリ問合、書付等差遣候節ハ右ニ被相替候奉ヲ相用

候様無屹被仰渡候、

五四八七

(朱書)同
一御留守居以下諸御役人へ御用ノ節、御用人等ヨリ切紙

ヲ以被申越候節、御請ノ儀是迄ノ振合ハ先達テ被仰渡

置候、右ニ付御請書切紙ヲ以被申出筋可被致旨無屹被

仰渡候、

五四八八

(朱書)同四月
一私遠流願申出御免被仰付候者、病氣等ニテ差遣候儀数

年致延引居候者有之不可然候、以来右体ノ者一ケ年病
氣快氣不致、島方へ遺体無之候ハ、其段首尾可申出置
候、勿論致病死候者ハ早速可申出候、

五四八九

(卷之四二 三二〇四)

(朱書)同
一縁与願ノ儀、父無之人親類ヨリ願申出来候へ共、以来

八家督ノ人ハ当人ヨリ可願出候、二男・末子又ハ家内
二罷在候人ハ家督ヨリ可願出候、江戸詰ノ者ハ親類ヨ
リ願出候儀、有来通可相心得旨被 仰出候、

五四九〇

(朱書)同
一是迄御次第書出候程ノ節、御手当書並御次第書ト書認

来候へトモ、以来ハ御次第書ト御手当書相分ケ、別段
可相認旨被仰出候、

五四九一

(卷之三三 二二〇〇)

(朱書)同
一上巳ハ御役人以上熨斗目相用可申、尤、以来江戸御国

元共其通可有之旨被仰出候、

五四九二

(卷之三七 二六一九)

(朱書)同
一御小書院ト御勝手ノ間ニ候間、此節御出来御小座敷之
事、中之間、

右之通、相唱^{トナ}候様被 仰出候段申来候、

五四九三

(朱書)同
一何ソ御用向取扱又ハ申出候節、不依何篇無差別首尾ト

申来候、御用向取扱被仰付候ハ、掛ト可申、左程ニモ
難申少年ノ節ハ取扱又ハ首尾抔ト可申事ニ候、着出立
或御用向ノ首尾中首尾ナト、届ナト、夫々相分リ候様
可有之候、

五四九四

(朱書)同
一御包ト人頭・御包ト人・御料理役ノ儀、以来表御包ト

人頭・表御包ト人・表御料理役ト可相唱候、

一御常調方役々ノ儀ハ都テ御常調方ト申唱被相除候、御
書ニ御膳所ト可相認候、

五四九五

(卷之三〇 一九一七)

(朱書)同五月

一大番格式ノ儀ハ依勤場所日勤ニモ上下着用可被仰付候、

一統右ノ格式ニ相心得、自分ニ相用候儀ハ勝手次第、

且手鍵ノ儀モ可為同断旨被仰出候、

右ノ通被仰出候、依之上下・手鍵共ニ勤場ニ相用候儀

ハ可依其場所候間、時々令差図候、尤、自分相用候逆

モ、手鍵等為持候儀ハ夫ニ準、家来ヲ始供人不召列候

テハ不釣合ニ有之、就中御関所向等ニテハ委敷御吟味

モ有之事候間、其段ハ兼テ相心得可罷在旨、於江戸申

渡有之候段申来候、

五四九六(の1)

(朱書)

「引札 出立ノ節、本文ノ振合ヲ以同断、」

一諸御役人

右、勤先ヨリ帰着ノ節、八時前ニ候ハ、直ニ 御城へ

可罷出候、八時後ニ候ハ、月番御用人へ相越、諸事前

条ノ振合ニ可有之、尤、直触以上ハ致面会、其以下ハ

以取次可相達候、

但、病気差合候ハ、以書付当日可相届置候、

奥・表御勝手方勤ノ面々等、ヲノツカラ其向々ノ御家

老並御用人へ可相付候、表御役人並月次致出仕候、面々

ハ着付テ当日又ハ翌日ニテモ 御城へ罷上リ候節、月

次ノ通夫々ニ相唱可奉伺御機嫌候、

一書役 小役人

右同断ノ節ハ当日其頭人ノ内一人へ相届、且又其小与

頭へモ可相届候、尤、八時迄ノ間ハ直ニ勤所へ罷出、

頭人へハ同役ヲ以相届、且小与頭へモ可相届候、 御

城遠方ノ勤所ニテ候ハ、小与頭ノ儀ハ宅へ可相届候、

但、病気差合候ハ、同役・同与・親類等ノ間ヲ以当

日可相勤候、

一無役ノ諸士

右同断ノ節、御用人並小与頭へ同断、

右之通、御一門ヨリ無役ノ諸士ニ至マテ、自他国共勤

帰又ハ御暇ニテ差越罷帰候節モ可相心得候、勤帰ノ節

ハ着服有来通可有之、湯治並私領其外自分御暇ニテ差

越、旅先ヨリ罷帰候ハ、当日タリトモ麻上下可相用候、

但、御領内公私共ニ三日以上本文ノ通可有之候、

(朱書)同

五月

(喜入久福)

安房

(五四九六の?)

(行間未書)

本文伺御機嫌ニ罷上り候面々、病気等ニテ届置候ハ、快
氣ノ上登城、本行ノ通可奉伺御機嫌候、謁ノ儀ハ先達テ
申渡置候通、

出立ノ節、本文ノ振合ヲ以前条同断、

出立ノ節、本文ノ振合ヲ以テ前条同断、無役ノ諸士モ同
断、

八時迄ノ間帰着、直 御城内勤所へ罷出候節、小与頭届
ノ場ハ与方取次へ相届、其外ハ本行ノ通、

本文御暇ニテ差越罷帰候節ハ小与頭へ相届、御用人へ届
ニ不及候、尤、無役諸士ノ内江戸詰其外御用人取次ニテ

一往ノ勤方等申付候者ハ其向々ノ御用人並小与頭へ可相
届候、

先達テ本文ノ通申渡置候へトモ、猶又右引札ノ通可被相
心得旨可致通達候、

同十二月

五四九七

(朱書)同五月

一御錢入夫ト是迄唱来候へトモ、以来於江戸ハ御国人足、

(卷之一三 七九五)

御国ニテハ御春屋人足ト相唱、書付等ニモ其通相認候
様可申渡候、

五四九八

(朱書)同

一毎月朝夕 御精進

得仏様

淨国院様

有邦院様

慈徳院様

円徳院様

正覚院様

御正忌日朝計 御精進

貞嶽院様

信証院様

靈龍院様

瑞仙院様

月柱院様

智光院様

慈照院様

玉貌院様

妙心院様

右之通被相定候、

五四九九

(朱書)同

一鎌倉白旗大明神

鶴ヶ岡八幡宮

頼朝公御廟

忠久公同

右へ御家督二付一度 御参詣、 毎年頭・ 御年忌・

御官位御昇進等二付 御代参 御家老、

右之通、 向後被相定候旨被 仰出候、

(卷之三八 二七三五)

五五〇〇

(卷之二九 一八〇九)

一 御直元服 一 御前元服 一 御元服ノ御礼

右、都テ有来通、

一 御内証元服

右、御家老加冠等ハ有来通ニテ、御礼ノ進上物相納可

謁御家老候、

一 小番以下初テノ 御目見罷出候程ノ面々ハ進上物相納、

御礼ノ儀ハ可謁御家老候、尤、右ノ面々ハ追テ 御着

城ノ上、一統ノ 御目見可被仰付候、其節ハ弓進上以

上一列、其以下一列ト可被相分候、尤、 御直元服

御前元服 元服ノ御礼被仰付候家柄ノ面々逆モ、 御

名代ニテ相濟候分ハ右一統ノ 御目見可被仰付候、

一 初テノ 御目見相濟候面々、家督・継目御礼ノ儀ハ其

家格ノ進上物相納、御太刀進上以上ハ可謁御家老、其

以下ハ可謁奏者番候、

右之通、 御留守年ノ諸御礼事被相定候旨被 仰出候、

(朱書「同」)
五月

(島津久金)
伊賀

五五〇一

一 御心付高之事、御合力銀、

一同銀之事、御合力銀、

一支度料銀之事、御心付銀、

一 御宿坊料ノ事、御宿坊御手当銀、

右之通、唱被相替候旨被 仰出候段申来候、

(朱書「天明五巳」)
六月

伊賀

五五〇二

(卷之五二 四二二二)

一 江戸表御敷台ニテ致取次候新番・御馬廻共、御取次番

ト一統可相唱候、内分ケニテ相唱候節ハ有来通候旨被

仰出候段申来候、

(朱書「同」八日)
六月

伊賀

五五〇三

(卷之一九 一一〇四)

一 御賦ノ儀、以来ハ賄料ト可申候、依之幾人賦ト申来候

分ハ幾人ノ賄料ト可相心得候、

一 右ニ付テ是迄御賦重等ノ節、六人賦被仰付候ト申渡有

之分ハ新番被仰付候ト申渡、御賦ハ自六人賦可相渡候、

尤、依人体六人賦被仰付候テモ新番ニハ不相成向モ有

之候、夫ハ格式ニハ不相掛事故、六人ノ賄料被下置候

ト可申渡候、左候ヘハ六人ノ賄料被下置候ト計有之候

付、新番ニハ不相成候、

一右同断、十人賦被仰付候ト申渡来候分ハ是又小番被仰

付候ト申渡、御賦ヲ渡来候通十人賦可相渡候、尤、十

人賦被仰付候テモ身分小番ニ不相成格式ノ者八十人ノ

賄料被下置候ト可申渡候、

一四人賦・五人賦・七人賦・八人賦等、其外右以上ニテ

モ格式不相掛候分ハ幾人ノ賄料被下置候ト可申渡候、

依之御役人無役等ニ至迄其格式不相掛分ハ自右通可有

之候、

一小番家柄ノ者五人賦以下ノ御役相勤居、依年功等其御

役ニテ御賦ハ六人賦被下置候儀有之節ハ、新番被仰付

候ト申渡候テハ家柄相違ノ事候間、ケ様ノ節ハ六人ノ

賄料被下置候ト可申渡事ニ候、大番家筋ノ者同断ノ節

ハ其御賦高ニテ新番被召入事候故、是ハ賄料ノ不及沙

汰、自新番被仰付候旨申渡筋ニテ可有之、

右通、同役ニテモ依家格其節々申渡振相替事ニ候、其

外ハ右ヲ以可相調候、

六月(朱書「同」八日)

伊賀(島津入金)

五五〇四

一御裁許方掛ノ事、御裁許掛、

但、御役名、

一御裁許掛之事、御裁許方、

但、御役所唱、

右之通、以来相唱候様被 仰出候、

五五〇五

一今度與・表出入被相定候付テハ江戸表於御長屋、祖父・

親子兄弟・伯叔父・舅舅ノ外同宿致間敷候、尤、右外

願出候テモ御免被仰付間敷候旨被 仰出候、

五五〇六

一湯治願ノ儀、数日申出来候ヘトモ、向後一廻ヨリ三廻

迄ノ間相限、場所モ何方ト可願出候、尤、日数幾日ト

認来候ヘトモ、是以往来日数相除幾廻ト可相願候、様

子次第湯治先ヨリ少々ノ追願ハ不苦候、別テノ長病ハ

日数モ格別ノ事候、且又心当ノ場所無覺束存候ハ、

何方不相応ニモ候ハ、何方ハ差越度段願置罷越候儀

ハ勝手次第第二候、

右之通、御沙汰ノ趣申来候、

五五〇八

(朱書同)一終日並八ツ星御暇等毎々申出来候ヘトモ、其身並父母

兄弟等格別ノ訳合無之候テハ申出間敷候、

右之通、御沙汰候、

五五〇九

(朱書同)一御兵具所ハ役所ノ名ニテ候処、何篇無差別御兵具所ト

申来候、向後役所ハ御兵具所、右ニ相掛候分ハ御兵具

方ト相心得候様此節申来候、

五五一〇

(卷之四〇 二八四四)

一 一斝方ノ父母兄弟

一 嫁ノ兄弟

一 他家ヲ為統候子ノ父母並其家内ニ罷在候兄弟

一 姉妹斝並其舅

右、時々届立可致出入候、

一家内ニ罷在候兄弟ノ子養子参候ハ、養家ノ父母兄弟

等ト実家ノ父母等ハ可致出入候事、

一同断兄弟ノ妹ヲ他ニ遣、其夫舅同断可相心得候、

五五〇七

一 御礼之節、進上ノ御太刀備場所ハ其御礼疊目ノ上ニ相

備可申事候、仮令ハ横疊ニテ候ハ、二疊目備、一疊目

ニテ御礼、豎疊ニテ候ハ、一疊目ノ上ニ備、同下ニテ

御礼、二疊目末ニ備、一疊目ノ上ニテ御礼、如斯ノ類

候、若是迄披露太刀等ノ内、御礼席ヨリハ格別相離備

候事共モ候ハ、向後前条ノ通可有之候、

一 御礼ノ節、諸進上物此以前ハ脇ニ備来候ヘトモ、中ニ

相備候様去ル 御在国相定候、然トモ元服ノ節ハ、折

並御樽ハ此以前之通脇ニ相備可申候、

(朱書同)七月

(島津久起)近江

一姪ノ夫ハ不相成、甥ノ妻ハ不苦候、都テ婦人ハ夫ニ相付、夫ハ妻ニ不相付候間、其通可相心得候、

一妻ノ兄弟並妻ノ家元ハ罷在候甥姪ハ召呼候儀不苦候、

右ハ、奥勤ノ面々其外出入ノ儀、先達テ被相定、猶又

右之通相心得候様御沙汰ノ趣申来候、

(朱書)同(十六日)

(島津久起) 近江

五五一

(卷之四〇 二八四九)

一奥・表道中同立不相成候、無摠詔合ニテ同立不差越候

テ難相濟節ハ可願出候、将又同立無之、長々留置候テ

格別御不益ニモ相成候ハ、其節々伺候事、

一同船ノ儀モ不相成事候、是以別船ニテ御不益ニモ相成

候ハ、船間別段立切同船可為致事、

右之通、御沙汰ノ趣申来候、

(朱書)同(十六日)

近江

五五二

(朱書)同(七月)

一薩州 鹿兒島郡吉田 河辺郡山田 薩摩郡山田

高城郡高城

隅州 始羅郡山田

日州 諸縣郡吉田 同郡高城

右之通、以来向々ノ郡名ヲ以相分候様被仰付候、尤、

公辺へ被仰出候節ハ被定置候郷村之通可相心得候、

五五三

(卷之三十七 二六二〇)

(朱書)同(八月)

一此節御普請ノ御庭、 二ノ丸御庭ト相唱候、

五五四

(卷之四六 三四五九)

(朱書)同

一御目付星檢使ノ儀、星檢者ト唱来候へトモ、向後星檢

使ト可相唱候、

五五五

(卷之三十七 二六二一)

(朱書)同

一御納戸 一御兵具所 一御記録所 一御厩

右ハ、御役所札御ノ字相除候様去ル午年申渡有之候へ

トモ、向後右之通可相改候、出張ノ御役所ハ御納戸方・

御兵具方ナト、方ノ字相用可申候、其外諸向^方右ニ可準

候、

五五二一

一御兩殿様 御出座被遊候節日食有之、御定刻ニ相成候

ヘトモ、食之依遲速其前後 御出座可被遊候間、食ノ

依程合御刻限ノ儀、前日可相詞旨(詞力) 御沙汰有之候段申

来候、

五五二二

一御兵具方 与力・同心

右之通、与力・同心等一紙ニ相認候節ハ、同心ノ儀ハ

一字下リニテ細字ニ可相認旨被仰出候段申来候、

五五二三

一内玄喚之事、御内玄喚、

右之通唱被相替候、

五五二四

一佐竹右京太夫様

右ハ、先年御縁談被為濟候節、御互ニ被仰合御而敬ノ

御通融ニテ、其後右京太夫様御一世ノ被仰合相成候処、

上振等、以前之通被相替候旨申来候、

五五二五

一故佐竹右京太夫様御卒去後、御而敬被止候段ハ先達テ

申渡置候処、御後(室力)宝様ノ儀ハ御一世是迄ノ通御而敬ノ

御通融被成度、御内々被仰進趣有之、其通被遊等候段

申来候、

五五二六

一嫡子ヲ他家ノ養子ニ遣候儀ハ実家ノ諷ヲ以願申出候テ

モ、向後御免被仰付間敷旨被 仰出候、

五五二七

一御内証元服ノ儀、御家老加冠等ハ有来通ニテ、御礼ノ

進上物相納、可謁御家老旨被仰付置候、右面々モ追テ

御目見可被仰付候、尤、御直元服以下初テノ 御目

見罷出候程ノ面々、進上物相納、御礼被仰付候分、

御下国ノ上一統ノ 御目見可被仰付旨被仰渡置候、右

面々ノ内月次 御目見罷出候分ハ家格モ相替候付、其家格ノ席々ニテ人別ニ 御目見可被仰付候、

五五二三

(卷之四三 三二八八)

一諸人ヨリ願出候書付、是迄張紙ニテ相下リ、取次前ヨリ写ヲ以申渡来候ヘトモ、向後願書・張紙共ニ願人ヘ可相渡候、

一御家老申渡諸書付、取次前ニテ写候書面ニ写ト口書致来候ヘトモ、以来ハ何某殿ヨリ被仰渡候御書付ノ写又ハ何某殿ヘ被相渡候御書付ノ写坏ト可相認候、

右之通被 仰出候段申来候条、願人ヘ張紙ノ儘相渡、

申渡相濟候段首尾書ヲ以可申出候、

(朱書)同(廿二日) 八月

(喜入久福) 安房

五五二四

(卷之四三 三二八九)

一支配下ノ一身者以下、其外輕者勤方等ノ儀申付候節、

御家老ヘ得差圖候付、何被仰付候ト申来候ヘトモ、其頭ヨリ取計ノ儀故御家老ヘ得差圖、其頭手前ニテ申付候儀ハ何々申付候ト可相認候、御家老差圖有之候分ハ

何某殿ヘ得差圖申付候ト申振合可相認候、將又支配下外トテモ可右準候、諸給分等ノ儀モ何々為取之候ト可相認候、為士以上共支配頭手前ニテ相濟程ノ輕事共等

ハ申付ト可相認候、

右之通、諸向相心得、申渡ノ書付等モ其頭ヨリ相認候テ頭名前ニテ可申渡候、且又士以上ヘ申渡事、御家老ヨリ申渡候書付等相下ケ候ハ、其紙面通書写、見返シ何々ノ写ナト、目安相認候テ可相渡候、

(朱書)同(廿二日) 八月

安房

五五二五

(卷之四四 三二八〇)

一屋敷直ノ願申出候節、売渡買取候ト相認願出来候ヘト

モ、以来讓受讓渡又ハ繰替等ノ節ハ相對替ト可相認候、

輕身分ノ者共儀ハ是迄之通可有之旨被 仰付候、

五五二六

(朱書)同(九月)

一直子無之跡式不被召立筋親類共願出候儀、以来何某何男等ノ訳迄モ相記、其本家ヨリ可願出候、尤、本家無之者ハ是迄ノ通親類共ヨリ可願出候、

五五二七

(卷之四〇 二八六六)

一林家へ諸士学文入塾ノ儀、是迄其身ヨリ願出来候へト

モ、向後聖堂へ願出、吟味ノ上聖堂奉行ヨリ可申出候、

其外他国ノ学講所へ入学ノ儀モ同断可相心得候、被

仰出候段申来候、

五五三一

左候テ、其家部抜切候儀ハ不相成事候間、家部ニ相掛候儀ハ持前ノ通相認、尤、其身不致其勤節ニ相成候ハ、自本之通可有之候、

五五二八

一御兵具方同心二人ツ、

右ハ、御内玄喚脇番所致出来候付、右之通昼夜定番申

付、中番卜唱候様被 仰付候、

一地震

一御城方限内出火候ハ、鎮火ノ上於奥可奉伺候、御近習通ノ儀ハ一役一人ツ、奉伺候、
右之通、御在国ノ節ハ可奉伺 御機嫌、御留守ノ節ハ不及其儀候、

五五二九

一御常調方ノ事、御常式方、

右之通、以来唱相替、書付等ニモ可認候、

右、天水溢候程ニ候ハ、出火ノ節ノ通可奉伺 御機嫌候、
右之通、以来被相定候条、江戸表ノ儀モ都テ可準右候、

五五三〇

(卷之三〇 一九四六)

一御納戸・御兵具方・御広敷等ヨリ、与力・同心ノ内、

御鷹方・御鳥方ナトノ定勤被仰付、其向々致勤候内ハ

御鷹方・御鳥方与力同心ナト、唱、書付等ニモ可致候、

五五三一

(朱書同十一月)
一詰衆

右、向後被相定候旨被 仰出候、

(朱書同) 十一月

一 奥向御近習通御役々、御役替・御役入・出立等ノ節礼伺御機嫌等是迄御家老座ニテ御家老謁来候ヘトモ、向後於極之間可謁候、

但、取合御側御用人、

一 御番頭以上同断ノ節ハ敷舞台月次御礼席ニテ可謁候、

但、不及取合、

一 表諸御役人同断ノ節、敷舞台月次御礼席ニテ可謁候、

但、取合御用人、

右之通被相定候、

但、直触以上ハ御家老可致挨拶候、

(朱書)同
十一月

五五三四

(朱書)同十一月
一 御近習通ノ面々

右、暑寒ノ入並中ニモ於奥可奉伺 御機嫌候、

但、当日八時前(衝力)前二入候ハ、詰合ノ服ニテ可奉伺候、

八時後二候ハ、奥向当番ノ面々計詰合ノ服ニテ可奉

伺候、其外ハ都テ終日、御留守年右暑寒ニ付テハ

五五三五

一 詰衆被仰付候付、左之通、

一 二人ツ、可致日勤候、尤、朝夕星合可有之候、

一 供廻家格ノ通可召列候、

一 小普請銀ハ御用捨可被仰付候、

一 御旅行ノ節ハ御番頭ノ賄料同前可相渡候、

一 御役ノ御礼ニハ不及候、尤、被仰付候当日ノ御礼ハ御

家老可謁候、

一 月次御礼等ヲ始、謁事ハ御番頭ノ次ニ可罷出候、

一 御対面所ハ御出座毎ニ相詰可申候、御書院ハ不時御礼

有之候節計相詰可申候、月次御礼引次、初テノ 御目

見節有之節ハ相詰ニ不及候、

一 相詰候節ハ御礼畢テ引次、一列ニ 御目見可被仰付候、

御対面所ニテ候ハ、御勝手ノ方ニ相詰候面々モ見合、

表之方ヘ相廻可罷出候、

一 御対面所詰ノ節、御勝手ノ方ハ樋之間御襖漕、表之方

ハ御縁類ニ相詰可申候、御書院ハ鶴之間壁付相詰可申

候、若此所差支候ハ、水仙之間へ可相詰候、

一日勤ニ付テハ詰席相定迄之間山吹之間相詰、与頭・御

番頭トハ相分リ外頼の方へ一列、与頭・御番頭ノ儀ハ

御対面所ノ方へ別段可罷在候、

一詰席等ノ儀ハ都テ絵図面ヲ以追テ可申渡候、

右之通被仰付候、

(朱書「同」)
十一月

五五二六

(朱書「同」)
一是迄私遠流ト申来候ヘトモ、是等ハ相願遠島・依願遠

島或遠島奉願ナト其外応其節々相唱候様被仰付候、

五五二七

(朱書「同」)
一遠流之事、遠島、

梟首之事、獄門、

右之通相唱、諸書付等ニモ相認候様被仰付候、

五五三八

(朱書「同」)
一御裁許トハ評議相極申渡ノ節ノ儀ニ候、

一御裁許相極迄之間ハ御吟味ト可申候、

右之通相心得、書付等ニモ相認候様被仰付候、

五五三九

(卷之四二 三〇八五)

一御役人外出府出立等ノ節、是迄御家老座ニテ御家老謁

来候ヘトモ、向後御用人謁被仰付候、且式日御使ノ儀

モ同断ニテ御用箱御用人ヲ以相渡、着ノ節八時ヨリ内

ニテ御殿へ罷出候ハ、御用人へ相付御用箱差出、退出

後ニ候ハ、月番御家老宅へ差越、何月何日被差立候御

使致着候段、用達又ハ取次へ申達、御用箱可差出候、

一年頭御使ノ儀ハ格別ニ候故、着出立共ニ於櫛之間可謁

御家老候、

右之通被仰付候、

(朱書「同」)
十一月

五五四〇

一御内証元服以下初テノ 御目見罷出候程ノ面々ハ進上

物相納、御礼ノ儀ハ可謁御家老旨被仰渡置候ヘトモ、

御内証元服ヲ始小番ノ御太刀進上以上御家老謁、小番

ノ御弓以下・新番以下ノ内御太刀進上ノ面々奏者番調、
家督・繼目等ノ御札モ同断被仰付候、

一是迄ハ初テ 御目見ノ節、仮令ハ大番家筋ニテ御太刀
進上仕者ハ小番ノ御太刀進上仕引次罷出来候ヘトモ、
向後ハ大番ノ一列ノ内ニ可罷出候、其外都テ右ノ振合
可相心得候、

一御弓進上ノ面々納ノ節ハ目錄迄差上来候ヘトモ、以来
現御弓進上被仰付候、

右之通被仰付候、
(朱書)同
十一月

五五四一 (卷之二五 一四七二)

(朱書)同十一月
一十七回御忌御法事、於福昌寺是迄御執行無之候ヘトモ、
以来外ノ御年回御法事御同様御執行被仰付候、

五五四二
(朱書)同
一御一門方

右ハ、此節休息所出来被仰付候ニ付、成就ノ上向後登
城ノ節ハ上ノ御休息所ニ罷在候様被仰付候、

島津(久遠)左衛門

右ハ、先達テ御礼席詰構被仰付置候付、前条同断成就
ノ上向後登城ノ節ハ下ノ休息所へ罷在候様被仰付候、
島津美濃・島津図書・島津筑後・島津出雲
右、向後登城ノ節ハ台子之間ニ罷在候様被仰付候、

五五四三

(朱書)同十一月
一無役ノ諸士並書役・小役人着出立ノ節、於樋之間御用

人調被仰付答候、右ニ付是迄ハ罷出候届御用人へ当人
ヨリ申来候ヘトモ、夫ニテハ不都合候間、以来御目付
ヨリ罷出候届御用人へ申出候様被仰付候、

五五四四 (卷之四九 三七〇三)

(朱書)同十一月
一定書役又ハ定檢者ナト、相唱、書付等ニモ認来候ヘト
モ、以来ハ定ノ字相除、何方書役・檢者ト可認候、定・
寄又ハ寄書役等ノ儀ハ是迄之通、

五五四五

(朱書)同
一暑寒中一度伺御機嫌ノ儀、先達テ被仰渡置候付テハ、

大寒ノ入・大暑ハ土用ノ入奉伺御機嫌候様可被相心得候、尤、八ツ時ニ入候ハ、翌日伺御機嫌ノ儀共、都テ仰渡通ニ候、

五五四六

一 御咎目事、是迄ハ於殿中親類へ申渡来候へトモ、御役人ノ儀ハ向々月番御家老宅ニテ当人へ可申渡候、

但、大目付以上ハ於殿中可申渡候、

一 書役・小役人等最始差控ノ儀、向々御用人へ直ニ申出候者ノ御咎目事ハ於其御用人宅申渡、頭人・支配頭次書ヲ以申出候者ノ御咎目事ハ其頭人・支配頭於宅可申渡候、

但、組中ノ儀、於与頭宅可申渡候、

右之通、以来被相定候条、都テ親類致同道罷出候様申渡、若病氣候ハ、名代可罷出旨是又申渡、名代へ申渡候様被仰付候、於御家老宅申渡候節ハ御用人一人可相

詰候、

(朱書)同
十二月

五五四七

(五五四六奉行冊朱書)

一 御咎目事申渡候節ハ、向後御家老又ハ御用人・支配頭等ノ於宅当人へ申渡候様ニトノ儀トモ、先達テ申渡通候、赦免ノ儀モ最初御咎目申渡ノ節ニ準、親類同道ニテ召出当人へ可申渡候、左候テ、別達テ長髪見分不及候、乍然病氣等候ハ、赦免ノ儀ハ名代へ申渡、快氣ノ上其段右ノ向へ相届見分ヲ可置候、

但、御家老座・御勝手方・異国船掛書役等御咎目並赦免等ノ儀、向々御家老於宅可申渡候、

一大目付以上赦免ノ節ハ、御日通遠慮ハ是迄ノ通当人へ申渡、其外ハ親類呼出ニテ可申渡候、

一 寺人ハ、出寺申渡ノ儀ハ其支配頭等ノ於宅是迄ノ通親類へ可申渡候、

天明六年正月

五五四八

(卷之三〇 一九五四)

一 諸家留守居ノ儀、何ソニ付御殿へ罷上リ候節、諸御役所へ直ニ罷通儀有之由候へトモ、向後ハ一切不相成候、右体ノ節ハ表坊主へ相達、其向々へ相通、御役所外ニ

テ御用向可相達候、且又於殿中御役人ナト呼出、用向

等相達儀モ有之由候間、向後何ソ格別ノ用向等直達無

之候テ不叶節ハ是又表坊主ヲ以申通候上可相達候、都

テ倍臣ノ儀ハ右ノ振合ニ相心得、取違無之様、向々ハ

可致通達候、

(朱書)同
十二月

(島津久金)
伊賀

五五四九

一 毎月十八日

右、得^(忠久)仏様御忌日ニ付、御咎目事等其外都テ 淨国院^(吉豊)

様御以來御同様被仰付候、

一 十一月朔日 貞嶽院様^(忠久室、忠時実母)

一 正月晦日、小ノ月ハ廿八日 信証院様^(綱貫継室)

一 八月五日 靈龍院様^(吉豊室)

一 三月廿日 瑞仙院様^(繼豊室)

一 七月三日 月柱院様^(吉豊側室、繼豊実母)

一 二月二日、閏月有之節閏二月二日 智光院様^(重年継室)

一 九月廿六日 慈照院様^(重養室)

一 十月廿六日 玉貌院様^(重養継室)

一 正月廿三日 妙心院様^(繼豊側室、宗信実母)

右御九靈様ノ内ニハ是迄御精進日等被立置候御方様モ

被為 在候ヘトモ、右御九靈様ハ御正忌日計御精進日

被相立、御正忌日ノ分ハ遠島以下御咎目事其外ノ儀無

御構、尤、月次御忌日ハ都テ無御構候、

(朱書)同
十二月

(喜入久福)
安房

五五五〇

一 御領内勤方等ニ付諸郷へ差越候節、旅込賃ト申儀、向

後ハ旅扶持、御鷹方ニテハ野扶持ト唱候様向々へ可致

通達候、

五五五一

(卷之三 五 二 三六〇)

一 御領内勤方等ニ付諸郷へ差越候節、行キト唱來候ヘト

モ、何方へ差越又ハ相越ト相唱、何事モ行キト申儀ハ

可相除候、

五五五二

(卷之四 五 三三四二)

一 別立被仰付置候人他家養子願ノ節、其身家跡ハ不被召

立筋申出候者、是迄御免被仰付候へトモ、以来ハ為差立沢合無之家筋トテモ本家ハ格別、他家ヲ続自分家跡ヲ禿候儀不可然候、依之向後御免被仰付間敷候、尤、別立居候テモ差迫等ニテ御奉公難相勤体罷成、本家へ引取其家跡不被召立筋願出候者ハ御免可被仰付候、其者本家内罷成候上ニテ他家養子ノ儀願出候ハ、其節ハ御免可被仰付候、

五五五三

(卷之五〇 三八三二)

一 御家老座ノ儀、肝要ノ御用取扱事候間、書役詰所へ罷通來候御役人並脇々書役ノ儀、御用ニテ罷通候節ハ差障無之哉ト承候上、御用相達候ハ、則可引取候、御家老・若年寄用達何ソニ付罷通候節モ、其儀相濟次第可引取候、御家老座勤表坊主ノ儀ハ右振合可相心得候、右付テハ如何候条、此旨寄々可致通達候、御留守居 御使番 御記録奉行 御右筆 大御目付座 御側表 御用人座 御用部屋 書役
(朱書)天明六丙午 正月

五五五四

(朱書)正月 一 琉備後表、琉球表、

右之通、備後ノ文字相除唱、書付等ニモ可相認候、

五五五五

(朱書)同一 一 御用通達等ノ諸書付、都テ奉ノ字相用候へトモ、一通リノ儀ハ有來通ノ星又ハ棒点持不同ニ相用、其身ノ奉行・頭人等ノ書付或ハ重キ向ヨリノ書付、其外屹ト御請ニモ及候程ノ場ニ奉ノ字可相用候、

五五五六

(卷之三七 二六一四)

(朱書)同一 一 兩御殿共御鈴口之事、奥口ト可相唱旨被仰出候段申來候、

五五五七

(朱書)同一月 (重書男) 一 先達テ 御男子様御誕生、奉称 感之助様ト候付、御内々奉承知候様被仰出候、

五五五八(の1)

(五五七号行間朱書)

一感之介様御事、御病氣被遊御座候処、先月十一日酉下

刻御天亡被遊候段御到来候、

同五月

(五五五八の2)

(五五六〇号行間朱書)

感之介様御法名 義光院殿天真祐明大禪童子

五五五九

(五五六〇号行間朱書)

一義光院様御忌日、御天亡ノ御事故、御精進日不被相

定旨被 仰出候、

五五六〇

(朱書)同

一御右筆頭

一御役格直触ニテ、聖堂奉行ノ次、

一拾人ノ賄料、

右之通、新規御役被相立候旨被 仰出候、

五五六一

(朱書)同三月

一皆勤ノ儀ハ無懈怠ト申来候ヘトモ、向後皆勤ト可申旨

(卷之四九 三七〇四)

御沙汰ノ段申来候、

五五六二

(朱書)同

一御一門方並鳥津左衛門登 城ノ節、休息所ヨリ何ソ用

向ニ付、誰ニテモ被為逢度由表坊主ヲ以被申達候節、

休息所へ罷通候儀不相成候間、敷居涯迄参用向承候様

伊賀殿ヨリ被仰渡候、

五五六三

(朱書)同四月

一樋之間之事、竹之間、

右之通被相改、竹之絵御額被相掛筈候、

(卷之三七 二六三三)

五五六四

(朱書)同五月

一前々 御前様へ差上来候分、向後 御内証様

(重豪側 於千方)

様へ進上物可仕旨被仰出候、

五五六五

(卷之四三 三二五一)

一大目付以上日勤、当分ノ行列ニテ手纏ヲ立サセ、家来

二人駕籠前ニ踏出可召列候、

一大目付以上へ御側役以上參逢候ハ、ヲノツカラ互ニ可有会釈候、尤、馬ヲ控、厚会釈等ハ夫々可応御役柄身分候、

但、歩行ニテ參逢候ハ、下乗可有之候、

一 無役ノ寄合並以上ノ儀モ家格ノ行列ニテ參逢候ハ、右同断互ニ可有会釈候、

一 御留守居以下ノ諸御役人並諸士、右同断參逢候節、不及辭儀候条、不敬ニ無之様相心得可罷通候、

一本行列ニテ通行ノ節モ右同断可相心得候、
(朱書「同」) 十六日 五月 伊賀

五五六六

(卷之三十七 二五〇七の1)

一 御在國ノ節、年始・五節句・八朔・月次等ノ御礼日モ、御一門方は迄ハ唐子ノ間へ被通來候へトモ、向後ハ休息所へ被在之、御座ノ間 御出座以前、御小納戸ヨリ奏者番へ可相通候、左候ハ、御目付ヨリ其段御達申被通候節、御目付水仙之間ニテ可相披候、奏者番ハ相控罷在、夫ヨリ椿之間迄御案内、象之間口ヨリ御小納戸御案内ニテ小鳥ノ間へ可被寄候、御礼相消退散ノ節モ

同断、將又御供目付一人浪ノ間辺へ罷在、諸向可相制候、

十二月

伊賀

五五六七
(朱書「同」) 一七夕・八朔

右、寄合以上二男以下並家内ニテ罷在候人、白帷子着服不相成候、

重陽

右、青ノ物着服ニ不及、持合人ハ勝手次第、

右之通可被相心得旨、御目付ヨリ無屹寄々致通達候様可申渡候、

五五六八

(朱書「同六月」)

一 御近習番所ヨリ御座へ通口之事、

一 御休息口 一大奥上ノ御鎖口

一 右同下ノ御鎖口 一大菊之間御鎖口

一 山アラシ御杉戸、奥口之事、

一 鳴子ノ口、唐子之間入口御鈴有之候所、

一 奥口

右之通相唱候様被仰付候、

五五七三

(朱書)同七月
一 磯奉行

右御役、此節被相立候、

五五六九

(朱書)同

一 富之進様当十二歳御成、御丈夫被為成候付、御二男様

ノ御届三月廿八日御用番様へ被 仰出、御順ノ儀ハ

敬姫様 明姫様 富之進様卜被 仰出候、

五五七四

(朱書)同
一 御庭奉行

(卷之五二 四一〇一)

右、磯奉行加役被仰付候条、磯御屋敷御茶屋並御庭其
外相掛候儀共、都テ可致受持候、左候テ、平日磯へ不
及相詰、御用ノ節々差越可申候、

五五七〇

(朱書)同

一 富之進様 御抱守

一 御役格御広敷番ノ上

五五七五

一 寄合以上ノ惣名

(卷之三〇 一八八九)
(卷之三〇 一八九五)

右之通、御役被相立候、

一 大身分

但、家格夫々相分候節ハ是迄之通、尤、是迄一所持

五五七一

(朱書)同

一 富之進様御実母、御内証様卜相心得可申旨被仰出候、

一 組頭之事、御小姓与番頭、

一 御番頭之事、当番頭、

一 御広敷頭之事、御広敷御用人、

一 御供御目付之事、御供目付

五五七二

(朱書)同

一 大御番頭座以下書役・小役人被召入候節ハ与頭へ相達、

与方支無之旨承候上申出候様可相心得候、

一 御広敷番之事、御広敷番ノ頭、

一 代官所之事、御代官所、

一 代官之事、御代官、

一 大奥御小姓之事、御小姓、

一 大番之事、御小姓与、

一 六組小与頭之事、組頭、

一 与方取次之事、進達掛、

一 郷士之事、大番、

但、身分ハヲノツカラ郷士ニテ、家格ノ唱大番ニテ候、

右之通被相改候、

(朱書)同 七月廿五日

(官之原通直) 主膳

五五七七

(卷之三〇 一九二四の1)

(五五七五身行間朱書)

一 郷士ノ儀、大番、身分ハヲノツカラ郷士ニテ、家格ノ

唱大番ニテ候間、去年申渡有之、諸書付等モ何方大番

ト相認候ヘトモ、大番ハ家格ノ唱マテニテ、身分ハヤ

ハリ郷士ニテ候間、以来片書等モ何方郷士ト相認候筋

可被相心得旨可申渡候、

天明七 正月

(島津久雄) 仲

五五七七

御家老座

御帳書役之事、御帳掛書役、

年中記清書方書役之事、年中清書掛書役、

御勝手方算用役之事、吟味役、

総方書役之事、総掛書役、

御用帳書抜方書役之事、御用帳調掛書役、

大御目付座

座横目之事、蔵方目付、

御城内横目之事、御城内掛横目、

大御番頭座

清書方書役之事、清書掛書役、

寺社奉行所

楮掛植付方書役之事、楮掛書役、

清書方書役之事、清書掛書役、

惣大工之事、御大工頭、

小仕夫ノ事、小仕、

御勘定所

古問付方書役之事、古問合掛書役、

御家老組所之事、大身分觸役所、

六組所之事、六与触役所、

与帳書役方書役ノ事、組帳改掛書役、

御用人座

鐘撞役、御厩、

飼見廻ノ事、飼方見廻、

諸所犬鬆ノ事、御牧犬打、

御使番役所

清書方書役之事、清書掛書役、

御作事方・御普請方惣鍛冶之事、鍛冶頭取、

惣大工之事、御大工頭、

賦大工之事、大工棟梁、

御作事方夫仕之事、夫賦、

御納戸糸物打物師之事、糸物師、

御船手惣船大工之事、御船大工頭、

御記録所

御家譜編集方之事、御家譜編集掛、
 諸人家筋書拔之事、諸家系図掛、
 高奉行所
 出物藏日用主取之事、日用頭、
 道奉行所道奉行付同心之事、道方掛同心、
 御細工所花作主取之事、造花師主取、
 弓作主取之事、御弓師主取、
 糸物師主取之事、糸物細工師主取、
 右之通被相改候、
(朱書)同一
 七月
(官之原通直)
 主膳

五五七八
(卷之四九 三七〇五)

一 御刀鍛冶主取 御研師主取 御矢師主取
 御鉄炮師主取 御鉄炮台子主取 御輿師主取
 御絵師主取 御塩焔合所 御塩焔藏
 御船藏 御雇大工
 右之通、御之字相用可申候、
 一 諸向寄役ノ儀、向後ハ無役ヨリ寄候者助ト可申候、本
 役ヲ持候テ他役ヘ寄候ヲ寄ト可申候、依之譬助ニテ候

へハ書役助或ハ重助書役、寄役ニテ候ハ、寄書役ナト、
夫々ニ応、聞得宜様相認可申候、

一書役・小役人ヲ初其以下迄、過半定書役・定何役ナト、
定ノ字相用候へトモ、定役ニテ候ハ、其役名計可相認
候、左候へハ自定役ト相見得候、寄・助等ノ外ハ相認
二不及候、

右之通被仰付候、

(朱書)同(廿五日)
七月

主膳

五五七九

(卷之四九 三七〇六)

(五五七八号行間朱書)

一寄役・助役ノ儀、先達テ申渡置候、定役ヲ持候者他役
へ差分リ切相勤候節ハ寄役ト可申、暫モ助相勤候節ハ
目助ト可相唱候、

同十二月七日

(喜入久福)
安房

五五八〇

(卷之四九 三七〇八)

(五五七八号行間朱書)

一諸役場寄役・助役ノ儀、寄何役・助何役扱トモ相認候
へトモ、寄・助ノ字ハ下、何役寄・何役助ト可申旨申
来候、

四月(十二日)

(高津久邦)
豊前

五五八一

(朱書)同(七月)

一於江戸 殿中ニ御留守居役所可相建旨被仰出候段申来
候、

五五八二

(昌男)

一奥平大膳太夫様御病氣不被成御勝、御妾腹ノ御女子様
被成御座候間、
御内々被仰進趣有之、表向御約詰迄モ被為濟候処、去

ル大膳太夫様御病氣被差重、
子ノ御願書被差出、且敬姫様御縁与被仰渡置候へトモ、

未御結納不被遣候トノ趣同日被差出、無御滞被成御請

取候、
八月

(朱書)同(一)

八月

(高津久健)
仲

五五八三

(五五八二号行間朱書)

一富之進様御事、御願之通大膳太夫様御躰養子被仰付、
御遺領無御相違被下置候、

同十月

(喜入久福)
安房

五五八四

(朱書)同九月

一若殿様御事、七月廿八日 (家治)
公方様へ初テ 御目見被遊、

(重憲)
太守様御礼被仰上候、

五五八五

(朱書)同

一大御目付以上台輪賀籠ニテ候処、今日ヨリ乗物ニテ登

城有之筈候、

五五八六

(朱書)同

一大戸番支配人足之事、小間使、

同刀差人足之事、小間使頭、

検者横目之事、下目付、

右之通被相改候、

五五八七

(朱書)同

一御広敷大番之事、御広敷番、

右之通被相改候、

五五八八

(朱書)同

一江戸 御発駕御定日、三月中廿一日 廿二日 廿八日

但、前三日後七日御掛日、

御国元 御発駕御定日、正月申四日 六日 九日

但書同断、

右之通、以来被相定候、

五五八九

(朱書)同十月

一聖堂掛ノ儀、御国之学校所ニ候処、未名目無之、是迄

惣名ヲ聖堂卜唱来候へトモ、造士館卜可相唱候、

五五九〇

一聖堂・諸稽古場御差分銀ノ儀、府学料卜可相唱候、

右之通被仰付候、

▽天明六年九月

安房△

五五九一

(朱書)同

(朱書)同

一恒姫様、向後 御縁女様卜可奉称候、御順ノ儀ハ 敬

姫様御上ニ被仰出候、

(卷之二八 一七三二)

五五九二

(朱書)同

一御小姓頭取、御役格御馬預リノ次

(卷之五一) 四〇三八
四〇四〇

一拾人賄料被下置候、

右御役、新規被相立、奥・表御小姓御近習番御小姓ノ

頭取被仰付候、尤、右御役々ヨリ差出候諸書付等モ取

次可申候、

一御側目付

一御役格御小納戸之上

一六人賄料被下置候、

右同断被相定、奥向ハ勿論其外 御名代被仰付候、

(行間朱書)

一御小姓頭取・御側目付、平日勤席ノ儀、奥へ相勤候

様被仰付候、

五五九三

(朱書)同

一御部屋御付御小納戸頭取

右人柄御見合有之迄之間、御付ノ御納戸奉行ヨリ相兼

(筋力)
可申候、

一同御小姓頭取

右同断、御抱守ヨリ相兼可申候、

五五九四

一諸人御奉公ニ付道之島・七島へ差越候節、他国拾年季

者ハ勿論永代者ニテモ、家来下人へ召連候儀致無用、

惣テ御国居付者モ其身代自分為稼候、右島々へ參候儀

差免間敷旨先年申渡有之候へトモ、程久敷儀ニテ近年

就中右体ノ者多為相成事候条、猶又右之趣無間違可相

守候、尤、琉球並屋久島・種子島ノ儀モ右同断申付候、

(朱書)同
十月

(島津入金)
伊賀

五五九五

一誓詞被仰付候人、神文拝聞ノ上血判ノ節、鍼相用來候

へトモ、以來ハ刺小刀相用可申候、尤、誓詞人無刀ニ

テ罷出候分ハ諛聞セ候者ヨリ小刀致用意置相渡候様可

相心得候、

(朱書)同
十月

安房

五五九六

(朱書)同十月

一御小姓与番頭 当番頭

(卷之五〇) 三九一五

右之通可致順席旨被 仰出候、

五五九七

(朱書)同閏十月
一 毎月八日

右、公義御精進日、諸事ノ儀十二日同前被 仰付候、

五六〇一

(卷之三七 二六二五)

五五九八

一 御内輪様方並御両敬之御方様へ、御使御口上等ニ富(重要)

進様御名相唱候節ハ様ノ字、御両敬外ノ御大名様方へ

ハ殿文字相用可申候、御役人様方へ御役場ニ付テノ節

ハ殿ノ文字モ不相用筈候、尤、他所へノ書通等右ニ準

候様被仰付候、

(朱書)同
閏十月

(喜入久福)
安房

五六〇二

(朱書)同
一 居屋敷・割屋敷ニテ取添又ハ譲渡候儀、向後ハ切坪讓

受卜唱、書付等ニモ被仰付候段申来候、

五五九九

(朱書)同閏十月
一 奥御小姓ノ内ヨリ以来御小納戸見習被仰付候節、座席

ハ奥御小姓上席ニ可罷在候、尤、格式ハ不相替、六人

ノ賄料迄可被下置旨被仰出候、

五六〇三

(卷之三〇 一九三二)

(朱書)同
一 被召出候者ノ儀ヲ御赦免者ト以前ヨリ申来候へトモ、

向後ハ御赦免卜唱、書付等ニモ致間敷旨 御沙汰ノ段

申来候、

五六〇〇

(朱書)同
一 御部屋様御事、蓮光院様、
(家治開室)

五六〇四

(卷之二八 一七三六)

一 先年様様ノ文字被相定候、是ハ御用向相用候節ノ儀ニ候、然ヲ自分事ニモ押並候者公私ノ無差別心得違ノ儀ニ候、仮令ハ此様相用候御二男様・御女中様方ニテモ、窺 御機嫌等ノ自分事ニ候者其向々振合ニ応シ様文字以上ヲ可相認事ニ候、

一 互ノ取替シモ支配頭又ハ右同前カ、格別重キ向ヘハ心入次第応、夫々様以上ノ文字随分相用可申事候、

一 御家老等ヨリ格別輕向キ直書遣候節ハ、書法ハ無之共手前欠名字等ノ儀共、向々心得ニテ相用可申事ニ候、

其外トテモ右ニ準、夫々ノ心得可有之、無役トテモ家格ノ向々右ニ応、夫々心得可有之事候、

(朱書)同
閏十月

主膳

五六〇五

(朱書)同

(家造)同
一 公方様御院号、奉称浚明院様候間、此段承知可仕候、
一 九月八日 薨御ニ付、毎月八日殺生令停止候、

五六〇六

(卷之四五 三三四三)

一家督ノ者他家ヘ養子差越候儀、且嫡子ノ儀サヘ部屋栖ニテ候ヘトモ、本家等ノ訳合無之外ハ御免不被仰付事候付、其身代別立家督ニ罷在者、嫡子又ハ二男等家跡ヘ残置、他家ノ養子罷成候儀不相成、尤、其者ノ嫡子トテモ同前ノ儀候間、以来心得違ノ儀共無之様、向々ヘ可致通達候、

(朱書)同
十一月

(島津久金)伊賀

五六〇七

(卷之三〇 一九〇四)

(朱書)同十一月
一 小番ノ儀、若年寄支配、

一 一代小番・部屋栖一代小番、右同断、

右之通、以来被相定候、

五六〇八

(朱書)同

(卷之三〇 一九〇四)

一新番ノ儀、大番頭支配、

一 一代新番・部屋栖一代新番ノ儀、右同断、

右之通、以来被相定候、

五六〇九

〔朱書〕同上月
一月次御礼之次第

〔卷之三〇 二四九〇〕
一九五二

一御座之間

御一門、島津左衛門、御家老座ヨリ大目付迄、御側御用人、御側役、奥向

一御書院

独礼ノ面々、御番頭以上、以前大目付以上相勤候大身分、以前御番頭以上相勤候同、無役ノ同、大目付以上ノ嫡子嫡孫、無役大身分ノ嫡子嫡孫、御用人以下寄合並、寄合並ノ嫡子、大身分ノ二男以下諸御役人、右之通被相定候、

一御一門方初家柄ノ向、其家々限ニテ家来ニ上下用サセ候儀ハ主人ノ心得次第可有之候、殿中其外他ニ掛候儀ハ有来通可有之候、

一御家老等公務ニ相掛候体ノ表向其外屹ト立候節、役人等上下用サセ可申、用達ノ儀ハ猶以テ相用可申候、是以殿中ノ儀ハ有来通可有之候、

一諸御役所へ家来差出候節ハ麻上下為致着可差出候、但、御用人等ハ有来通可相心得候、

一御付人・中抑等上下不致着格式ノ者モ、其勤内ハハ上〔行九〕
下相用可申候、

右之通、御沙汰ノ趣申来候、

〔行間朱書〕
一張紙 本文諸御役所向へ家来御用ニ付罷出候節、又ハ主人並自分願事等ノ儀ニ付罷出儀モ有之候ハ、麻上下為致着用、通達・返納等ノ節ハ是迄ノ通可相心得候、

五六一〇

〔朱書〕同上月
一役儀其外願事等申渡、是迄夫々ノ御役所ニテ申渡来候ヘトモ、向後其御役所ノ縁類カ、其席ニ相付候別席等ノ内見合申渡候様被 仰渡候、

五六一一

〔朱書〕同
一大奥定渡人足、以来御広敷人足ト唱、書付等ニモ認候様可申渡候、

五六一二

〔朱書〕天明七丁未正月八日
一若殿様、旧臘七日 御城へ被為 召於 御前御元服、御一字拝領、從四位下侍從被 仰出、御名豊後守様、

〔卷之二六 一五四九〕

御実名齊宣公ト被成御改候、

五六二一三

(朱書)同正月

一豊ノ文字名並名乗ニ用候儀、同唱迄モ遠慮、宣ノ文字

唱同様ノ実名遠慮、御任官ニ付向後侍從様ト奉称、

書付等ニモ其通、

五六一四

(卷之三十七 二五九四)

(朱書)同

一御家老平日出勤ノ節、立番ヨリ高声ニ何某様御上リト

呼、玄喚ヨリ先立ノ表坊主呼、次御座迄通シ候様可仕

候、尤、玄喚迄書役一兩人出迎、跡へ相付可参候、退

出ノ節モ同断、若年寄ノ儀モ同様相心得、大目付ノ儀

ハ大体右ノ振合ニ可準候、

五六一五

(卷之三十四 二二八八)

(朱書)同

一諸郷 御巡見ノ儀ハ 御一代一度ツ、御時節御都合次

第可被遊候、且又御家督脇(初カ)為御目代御側役へ御目付差

添ニテ諸郷為見聞可被差廻候、

一加世田日新寺ノ儀ハ格別故、御一代一度ハ可被遊

御参詣候、尤、四本御道具・御手廻可被召列候、

但、最寄ノ郷へ御光越ノ節、御参詣ノ儀猶又可奉

伺候、

一琉球人被召列候節、御道中一宿ツ、御跡へ可為致止宿

候、若差支候節ハ御相宿ノ儀モ可有之候、

一琉球人参府付差添ノ御側役へ御船奉行寄被仰付候へト

モ、向後兼務ハ不被仰付、御船奉行別段可被召列候、

五六一六

(朱書)同

一御隠居奥御小姓ノ儀ハ御近習番迄モ相兼可致勉役旨被

仰出候、

五六一七

(卷之四十六 三四四四)

(朱書)同

一御隠居・御家督ノ節、御役人ハ勿論書役・小役人其外

輕身分ノ者タリ共、勤方ニ付誓詞被仰付候向ハ都テ改

誓詞可仕候、

一御表御役ヨリ 御部屋御付並御隠居御付へ被仰付候向

ハ同御役場ニテモ改誓詞可仕候、 御部屋並御隠居御

付ヨリ御表御役罷成候向、其外御付相替候節々可為同

断候、

但、御座之間誓詞ノ分ハ 御部屋・御隠居等ニテ右
ニ準候、御屋敷ニテ可被仰付候、

五六一八

(朱書)同
一御隠居御供目付ノ儀ハ御側目付ヨリ兼帯、御小姓頭取
ノ儀ハ御小納戸頭取ヨリ兼帯可相勤旨被仰出候段申来
候、

五六一九

(朱書)同
一御隠居御高五万石被差分候付テハ所務代銀ヲ以諸向
可有之候、

五六二〇

(朱書)同
一是迄御部屋等入用向、御表ヨリ被成進来候分ハ以来
御隠居御入用向モ御表ヨリ被成進候様可有之旨被
仰
出候、

五六二一

(朱書)同
一御隠居御付御茶道頭
一御同朋頭次可罷在候、

右之通、新規御役被相立候、

五六二二

(朱書)同
一御隠居様御側御用人御用向ハ都テ御側役ヨリ相兼可相
勤候、書役其外モ可右準旨被仰出候段申来候、

五六二三

(朱書)同
一向後御家督後 御初入部ノ節ハ御願ノ上鎌倉へ御參詣
候様被仰出候、

(卷之三八 二七三二)

五六二四

(朱書)同
一御式大備並間之御上下御行列立三道中共ニ、御用簾
(筋力)
司・御用長持ノ間ニ御用櫃為御持被成等候、御部屋御
行列ノ儀モ御同様被仰出候、且右御用御長持ノ事、御
当用長持卜認替候様被仰付候、

五六二五 (卷之三十七 二五二四)

一(朱書同)向後江戸 御国元共ニ御座之間脇差帯候様被仰付候、

様御名代本多豊後守様・(空百)得(空百)様 御登城、御願
之通被仰出候段御到来候、

五六二六

一(朱書同)江戸御留守居

五六三〇

一(朱書同)太守様御事 中將様、侍従様御事 太守様卜奉称、
(卷之二八 一七〇九)

右、專 御前御用向御用ニ相掛候御役、殊ニ依御用筋
ハ 御直ニモ被仰合候御事故、日々奥へ罷通御目見仕
候様被仰付候、

御名御順 太守様 中將様卜書付等可仕候、

五六二七

一(朱書同)表 御出座ノ節ハ勿論 御先立並御簾御鎖役共、御同
(卷之三十七 二四九三)

五六三一

一上々様ヨリ御返下有之候ハ、向後都テ拜領物卜相唱、
書付等ニモ其通可相認候、
(卷之四七 三五八五)
(卷之四七 三六〇六)

五六二八

一(朱書同)何ソ書付等相認候節、 島津(忠持、佐土原)淡路守殿兄弟衆ナト、相
(卷之三十七 二四九三)

五六三二

一(朱書同)中將様へ向後御祝儀御礼等申上候儀ハ於表夫々可相唱
旨被仰付候、

認候儀モ有之候、向後ハ御兄弟方ト相認候様被仰付候、

五六三三

一(朱書同)中將様、 上総介様ト御改名御伺被置候処、其通被仰

五六二九

一(朱書同)御隠居・ 御家督御願被仰上置候処、先月廿九日 太守
渡候、

渡候、

五六三四

(朱書)同
一踊ノ内栄之湯ト唱来候ヘトモ、向後栄之尾温泉ト相唱、
書付等モ其通、

五六三五

(卷之四三 三一九四)

一書役・小役人等姓名申上ニ相成候節ハ御役名相記可申
事二候、

一無役ノ諸士、小番・新番ノ訳相記可申候、御小姓与ノ
儀ハ何ノ誰組御小姓与ト可相記、其以下モ右準可相記
候、

一部屋栖ノ儀ハ大身分ヲ初、都テ不依誰人、父ノ名相記
可申候、

但、大身分ノ儀ハ元服又ハ初テノ御目見相濟候分ハ
不及其儀候、尤、縁与願其外右類、依訳合ハ有来通
父ノ名相記可申候、

一郷士ノ儀ハ何ノ誰地頭所何方郷士何ノ誰ト相記可申候、
右之通被仰付候条、願書又ハ諸書付等ニモ右通片書可

相認候、

(朱書)同
三月

(喜入久福)
安房

五六三六

一毎月御忌日朝夕 御精進日

(忠久)
得仏様
(吉貞)
浄国院様
(重年)
巴徳院様
(継豊室、竹姫)
浄岸院様
(重豪室)
慈徳院様
(重豪室)
慈照院様
(重豪室)
正覚院様

御正忌日 御精進日

(忠久室、忠時実母) (綱貴継室)
貞嶽院様
(重年継室)
信証院様
(重豪継室)
智光院様
(重豪継室)
玉貌院様
(吉貞室)
靈龍院様
(吉貞室、継豊実母)
月桂院様
(吉貞室、継豊実母)
妙心院様

右之通被相定候、

(朱書)同
三月

安房

五六三七

一七月廿六日

(重豪女、悟姫)
照雲院様

六月十三日

(同於厚)
翠黛院様

五月二日

(同於克)
蓮心院様

七月廿六日

(同牧姫)
芙蓉院様

三月廿三日

(重豪男)
青林院様

七月廿九日

(同亀五郎)
香樹院様

四月十一日

(同感之介)
義光院様

右御七霊様、

(舟意)
太守様御兄弟様ノ御事故、御正忌日計

御精進日被立置候、

(朱書)同
三月

安房

五六三八

(朱書)同三月
一 太守様、先月十九日 御袖留被為濟候段御到来候、

五六三九(の1)

(卷之三〇 一九三六の1)

一 御納戸奉行・物頭・御鑓奉行・御弓奉行・御鉄砲奉行・

御広敷御用人支配ノ与力同心、夫々致組分置、向々名

前ヲ以申出候節ハ誰与何某ト相記、右外座付ノ儀モ右

二準可取計旨、先達テ申渡置候ヘトモ、直触以上御役

ノ儀ハ右申渡通相心得、其以下御役ノ支配与力同心ナ

トハ、タトヘハ御馬預支配与力何某、御口ノ者頭何某、

御口ノ者何某ト相記、其外御役々ノ儀モ右二準、御

役名支配何某ト可相記候、

八月

(五六三九の2)

(卷之三〇 一九三六の2)

右之通去年申渡候ヘトモ、御広敷御用人ノ儀ハ向後誰

支配与力同心何某ト可相記候、

(朱書)同三月

安房

五六四〇

(卷之三七 二五二六)

(重巻)
一 中将様、二丸へ被成御座候節、謁事左之通、

一 諸御役人ハ御本丸ニテ於席々可相謁候、

一 御一門方並大身分等月次御札罷出候無役ノ面々ハ御本

丸退出ヨリ二丸へ罷上リ、於席々可謁候、

一 御役・御役替・地頭職等、其外諸御役人其身ノ御礼事

並着出立等二付伺御機嫌者二丸へ可罷上候、

右之通可相心得候、江戸表ハ東御殿へ同断可罷上旨被

仰出候段申来候、

(朱書)同四月

(島津久邦) 豊前

五六四一

(朱書)同四月
一 御一門方御能拜見ノ節、江戸御国元共拜見席ニテ、以

来御菓子・御茶差出候様被仰付候、

五六四二

(朱書)同
一 太守様御儀、先月廿八日御城へ被為 召、 中将様御

任官被仰出候、

五六四三

(卷之三三 二二〇一)

一御先祖様方御年回ニ付、江戸御当地ニテ御法事被仰付

候節、両御地へ被成御座候御方々様ヨリ御双方共、以

来御香奠御進納可有之旨被 仰出候、

一正月廿八日 鬩斗目之事、

右之通被仰出候付、兼テノシメ着用ノ面々、以来ノシ

メ可相用候、

五六四四

(卷之三三 二二〇二)

一御相中使並惣代・小番・新番ノ儀、勤方ニ付 御目見

被仰付候節ハノシメ・長袴着用仕候様、尤、以前ヨリ

其通致着用来候節可相心得旨、無屹可申渡候、

五六四五

一御使被差立候当日、前々不差掛披露事等ハ不差出様先

年モ被仰渡置候、弥其心得ニテ不差掛儀ハ不差出様

(兼別表栞) 大炊殿御沙汰有之候、

五六四六

(卷之二六 一五五五)

一先年御誕生ノ御男子 (重書同六月) 雄五郎様卜奉称、近々 公迎へ

御届被仰出筈、尤、奥平富之進様御弟、御順ハ (昌西) 明姫 (重書)

様御次候条、雄ノ字名ニ付居候人ハ遠慮、 (兼心)

五六四七

一雄五郎様御付 御抱守 (朱書同)

右、奥平富之進様御抱守次可罷在候、

五六四八

一向御船手洲ノ番所並久見崎洲ノ番所ノ事、川口御番所、 (朱書同)

但、右外是ニ準候所ハ都テ唱同様、鹿児島郷坂元村

ノ内福ケ迫ノ事、福ケ廻、

但、右廻ノ字相用、サコト可唱候、尤、福ケ迫諏訪

社ノ儀モ自ラ同断、

五六四九

(卷之二九 一八五七の二)

一中将様御改名ニ付、人々心得ヲ以改名、又ハ此介ノ字 (重書同)

相用候向遠慮ノ儀申渡置候へトモ、不及其儀候、

五六五〇

(卷之三 五 一三六二)

一御領内旅行ノ節、是迄ハ角取紙ノ鍵印用來候ヘトモ、

向後不及其儀候、尤、(倍力)倍臣ノ儀ハ其家々ニテ相究候鍵

印可為用之候、他領へ罷候節ハ是迄之通、

五六五一

(朱書)同

一神農堂守之事、神農堂預、

右之通唱相替り候、左候テ、医学院相掛候節ハ医学院

預トモ可申候、

五六五二

(朱書)同七月

一水野志岐守様

右ハ、以來御両敬御取替被成度段被仰進候付被成其意

候処、表向御家老ヲ以御挨拶旁被仰進、猶又御用人御

使ヲ以御惣方様へ御祝物被進、此御方ヨリモ御用人ニ

テ御挨拶等被仰進、御留守居御使ヲ以志岐守様・悟信

院様へ御祝物等被進、都テ御引結相濟候旨申來候、

五六五三

(卷之四 五 一三三七二)

一是迄本家ト唱候者、二男家等ヨリ其嫡家ノ事ヲ可申候、

養子ニ參候者之出候家ハ実家ト可相唱候、

五六五四

(卷之四 一 一三〇二二)

一於御側御用人座申渡來候分ハ於縁頬可申渡候、

一表並御勝手方於御用人座申渡來候分ハ於廊下可申渡候、

一右外、夫々於御役座申渡來候分ハ都テ右ノ振合ヲ以可

致取扱候、

五六五五

(卷之三 〇 一九二〇)

一小十人組、新規被相立候、依之諸事左之通被定置候、

一持高四拾石余ヲ限、五拾石ハ不被差免候、

一家格御小姓与ノ次、与力ノ上、

一無役ニテ、江戸詰等ノ節ハ御小姓与ノ場ニテ可被差越

候、

一勤向、書役・小役人可被仰付候、

一初テ 御目見等ノ節、御書院闕内一疊目可差出候、

一小十人頭新規被相立、右支配可被仰付候、

一 小十人組頭モ被相立候条、小十人頭ニ相付可相勤候、

尤、仕向、御小姓与組頭之通可有之候、

一 小十人頭並小十人御番所、別段可被相建候、

右之通被仰付候条、此旨可致通達候、

(朱書同) 七月
(市田教國)
勘解由

五六五八

(卷之三〇 一九一九)

(朱書同)
一 御小姓与ノ二男以下別立候者、是迄御小姓与被入来候

ヘトモ、向後高五拾石以下分地ノ者ハ小十人可被召入

候、其余ハ有来通可有之候、

五六五九

(卷之三〇 一九二二)

(朱書同)
一 小十人頭

一 御役格直触ニテ、御右筆頭次、

一 十人ノ賄料

右之通、新規御役被相立候旨被仰出候、

五六六〇

(卷之三〇 一九二二)

一 小十人ヨリ養子ニ遣候儀、小番・新番・御小姓与共ニ

不苦候、其身代卑賤ヨリ被召出候体ノ者ヨリ子共養子

ニ遣候儀ハ是迄卑賤ノ者ヨリ御小姓与ニ被召出候通可

相心得候、其外是迄ノ通、尤、郷士ヨリ小十人ヘ養子

罷成候儀、是迄御小姓与家ノ養子罷成候通、父方従弟

ノ続又ハ所高五石以上持出候者ハ御吟味次第御免可被

仰付候、

(朱書同) 七月
七月

勘解由

五六六〇

(卷之四九 三七〇七)

(朱書同)
一 若年寄 大目付

右、御役ニ御ノ字用來候ヘトモ、不及其儀事候間、諸

書付等ニモ右ノ心得ヲ以可相認候、

奥医師 御広敷医師

右同断可相心得候、

五六五七

(卷之三〇 一九三二)

(朱書同) 七月
一 与力ノ儀、是迄御小姓与被入置候ヘトモ、此節ヨリ夫々

頭人ノ支配被仰付候条、御小姓与可相除候、

五六六一 (卷之三十一 二二一〇)

一 御能役者

右、新規被相立、格式・身分等左之通被相定候条、往々右者共限ニテ仕手・脇・狂言並囃子方其外御能方不殘相揃候様可致候、尤、於芸道者士役者無差別可相心得候、

一 平生ハ脇差計帶シ、旅行並火事場等ノ節ハ刀勝手次第可帶候、尤、上下ハ平生、ノシメ相用可申候、

一 諸士迄モ御祝儀罷出候節ハ同断御祝儀御帳ニ相付可申候、年頭・諸節句等於敷舞台諸士ノ後ニ罷在、御目見可仕候、

一 御能ノ節ハ勿論自分稽古能ノ節モ士役者打交可相動候、尤、其身共宅ニ舞台等モ構へ、稽古能イタシ候節モ是迄柏幾衛其外致来候通可相心得候、其節トテモ士役者打込可致稽古候、

一 江戸表諸家元へ入門ノ儀、其身共勝手次第可致候、其節外宿等モ申出次第可差免候、尤、彼方ニ罷在候内ハ当御家中ヲ離切、他ノ居弟子等同様混ト可致入熟候、

一 若年寄支配被仰候、

一 町人共、^(辟カ)倍臣其外役人ニテモ、下地相応ニテ相望候者ハ右場所へ可被仰付候、左候テ、被 召出候者自分子孫其芸道ヲ以可相統候、

一 郷士等ヲ初、御能方御用立候者ハ、向後トテモ士役者被仰付候儀ハ有来通可有之候、
七月 ^{(朱書)同}

勘解由

五六六一

一 御広敷寄醫師ノ儀、御広敷寄番醫師ト可申候、
^{(朱書)同七月}

五六六三

一 芸道ヲ以被召出候者ノ子孫、其芸道ヲ以致相統事候間、
^{(朱書)同}

家督・繼目等願出候節、其頭々随分可氣付候、

五六六四

一 養子ニ參候者致家督以後養子違変ノ儀、是迄願出来候
^{(朱書)同}

へトモ、向後御免被仰付間敷候、且又実家為相統如元立婦候儀モ同断ノ事ニ候、於養家部屋栖ニテ罷在候ハ、

依詔合ハ養子違変ノ儀可被成御免候、是迄モ実家為相

(卷之四五 三三四四)

(卷之四五 三三七三)

続立婦候儀ハ自由ケ間敷故、被成御免間敷候、

五六六五

一何方中宿卜認来候へ共、何方居住卜可認候、

五六六六

一年頭〔朱書〕同・五節句・八朔、御一門方・諸大身分・寄合並・

御側役以上・諸地頭ハ都テ長袴着可致候様、先達テ被仰渡置候、右ニ付、七月七日並八月朔日ノ儀、長袴着

可致向ハ都テ白帷子着可致候、

五六六七

一年頭御礼ノ節〔五六六六発行間朱書〕 一三月三日 一五月五日 一七月七日

一八月朔日 一九月九日

右ノ分殿中、御一門方・諸大身分・寄合並・御側役以上・諸地頭ハ長袴可致着候、尤、御目見無之トテモ同

断ノ事候、尤、二男以下ハ有来通可相心得候、

但、九月九日ハ有来通、花色小袖・長袴可相用候、

同七月〔廿日〕

五六六八

一雄五郎様〔重豪男、忠厚〕、御三男様ノ御届被為濟候、

五六六九

一唐通事之事、唐本通事、

同見習之事、唐稽古通事、

朝鮮通事之事〔以下欠カ〕

同見習之事、朝鮮稽古通事、

五六七〇

一福昌寺 浄光明寺

御正統様へ年首並御正忌日、帰出立等ノ節、御役人ノ儀ハ屹ト参詣可仕儀候、無役タリトモ家柄ノ向ハ勿論

諸士ノ儀モ心入ヲ以参詣候儀ハ其通可有之候、尤、右外ノ御寺ニテモ同断可相心得候、

但、御正統様外ニテモ心入ヲ以参詣ノ儀ハ自其通可有之事候、

〔卷之三三 一一三三三〕

〔卷之三三 一一一九六〕

〔卷之二四 一一三三三〕

五六七一

一御精進日ニモ間ニハ心得違、魚類等取ハヤシ候者モ有

五六七五

一諸御礼廻ノ儀、大目付衆以上ハ当日可致廻勤、尤、
(卷之四二 三〇七一)
(卷之四九 三七七〇)

之由候、諸士以下ハ公私共寄合等ヲ始、右体ノ事共

無之様急度可相慎事候、江戸表其外於他所ハ猶以余国

ノ見分モ候間、一入相守可申候、

五六七六

一先月廿八日 太守様増上寺火ノ御番被為蒙仰候段御到
(齊意)

五六七二

(卷之五二 四一四〇)

一都講

右名目、訓導師ノ次被相立候、

来候、

五六七七

一近年ノ内、琉球人被召連御参府ニ付、増上寺火ノ御番
(五六七六身行間朱書)

五六七三

(卷之二一 二二二三)

一琉球並諸島々諸郷浦方至迄、唐木類ノ寄木見当候ハ、

被成御免候、

向後御納戸へ差出候様申付候、

天明八年申正月

五六七四

一家督・繼目等願出候節、芸道ヲ以被召出候者ノ家ハ都

五六七八

一御一門以下寄合並以上、元服・家督・繼目・養子成等
(朱書同)

テ被召出候訳願書可相認候、

初テノ 御目見、且御役・地頭職ノ御礼申上候節、以
(重意)

来 中將様へモ 御部屋栖様へ被仰付来候通御礼・進

上物被仰付候、

五六七九

(卷之七 三四七)

一諸所境目御番所、是迄御供其外間ノ往来、下乗下馬ニ

テ罷通来候ヘトモ、向後諸士以上ハ其儀不及候、尤、

右以下並倍臣(陪力)ハ有来通可相心得候、

五六八〇

(卷之二八 一七四六)

一御領内ヲヒテハ自分ノ支配頭他ノ支配頭無差別様殿文

字等相用振合候ヘトモ以来ハ右差別可致候、仮令自分

ノ支配頭姓名ヲ他ノ支配頭支配ノ者等ヘ向候テ申達候

節ハ何某ケ様ニ申候ナト、様・殿ト相用申間敷、下役

等モ其頭役ノ儀ヲ同断可申候、尤、頭役中一統持(所カ)ノ支

配下ニテ候ハ、一統ヲ右通可相心得候、何某組誰何某

支配誰ト一人ツ、別段ニ其頭相分居候向ハ其頭一人ヲ

右之通可相心得候、

但、大目付以上ノ儀ハ是迄之通、

五六八一

一正月元日椀飯並御三献、以来ハ御留守年モ 御在国之

通御書院ヘ差上、其節御役々モ相詰可申候、尤、御給

仕ハ奥御小姓可相勤候、

但、奥御小姓不居合節ハ表御小姓差寄候様、御側役

ヨリ時々可相達候、

一右之節、御家老ヘハ於椿之間被下、

一九月九日御式同断、御同所ニテ差上之、

一右之節、御家老ヘハ於椿之間被下、

一御国元ニテ正月御馬乗初、御名代ニテ相濟候節ハ是

迄 御前ヘ上リ物無之候ヘトモ、以来ハ可差上候、

一同断御鎧御祝ノ節、於 御前御鎧ノ餅御家老御相伴有

之来候ヘトモ、以来其儀無之候、

八月

(市田教固)
勘解由

五六八二

(朱書同八月)
一獄屋頭

右ノ役目被相立候、

五六八三

一奥向御役人、直触以上以下トテモ何ソニ付取次ヲ以申

渡事、向後ハ表ニ掛候儀トテモ都テ身分ニ相掛候儀ハ

於奥可申渡候、繼日家督其外右体家格二相掛候分ハ是迄之通於表申渡可有之候、

五六八四

(朱書)同九月

一俊明院様御位牌、南泉院へ御安置二付、年中御渡方其

(俊明院方、家治)

外 惣御位牌様御同様被仰付候、

五六八五

(卷之三〇 一九六二)

一是迄倍臣(倍力)ノ内、侍ノ者ヲ差テ家来ト唱、或ハ小者・中間体ノ者共ヲ依家格下男・下人ナト、相分唱来候、以

来ハ侍・小者等ノ無差別、又者ハ都テ押並家来ト相唱

可申候、其内部ヲ相分候時ハ侍・若党、又ハ中間・小

者・下人・下男ナト、其家ニテハ唱之通可申之候、

一召仕候女ノ儀モ依家格唱相替候へトモ、是以奥女・召

仕女・仕女・下女ナト其外右体依其家向可相唱候、

(朱書)同三日月

(麥刈美祐)

大炊

五六八六

(朱書)同九月

(卷之二五 一四四五)

一慈照院様御正忌日ノ儀、遠島以下御咎目事其外無御構、

月次御忌日ハ都テ無構旨被究置候へトモ、今度 御家

督被遊候付、御精進日等ノ儀ニ付テハ先達テ申渡置通

候、依之以来右御忌日御咎目者其外申渡事等都テ五日・

十六日・廿日御同様被仰付候、

一十二月廿二日覺了院様

(一橋宗尹)

一七月十二日深達院様

(一橋宗尹)

右御正忌日、御部屋栖御朝夕御精進日被定置候、依之

今度 御家督被遊候付テハ御正忌日ノ分表向御精進日

被相定候、然共御咎目事等ハ御国政ニ相掛儀故、遠慮

ノ不及沙汰候、

五六八七

(朱書)同

一琉球館へ御使被下候節、以来ハ上使ト相唱、言付等二

モ可相認候、

五六八八(のし)

(朱書)同十一月

一明姫様御事、先年御内々 中將様被遊御養女、今度

(重巻)

御出府、追テ御相応ノ御縁与可被遊御願趣、(齊宣) 太守様
ヨリ御届書九月十三日被差出置、先月三日島津淡路守(忠持 佐土原)
殿へ御縁与御願書被差出候、

(五六八の?)

(行間朱書)

本文御願ノ通、御縁与御免被仰出候段御到来候、

同十二月

五六八九

(朱書)同

一御縁女様御事、(重養女、茂徳) 近衛右大臣様御養女ノ儀、御双方御

熟談ノ上御願書被差出置候処、先月廿二日御願通被

仰出候、

五六九〇

(朱書)同十一月

一明姫様御事、今般(重養) 中将様御養女ノ御届被為濟、太

守様御養妹ノ御統被為入候処、公辺へノ御書付等ハ

元文中御養弟・御養妹女ノ御願不相成趣ノ仰渡モ有

之、此度御縁与御願書モ御妹ト認方被仰付候付、以来

公辺ハ勿論表向ハ右ノ御振合相心得、御内輪ノ儀ハヤ

ハリ御養妹ノ御名目ニテ、諸書付等モ其通相認、中

将様ヨリハ 公辺表向共ニ御養女ノ御認振ニテ御差障
無之候、

五六九一

(五六九〇号行間朱書)

一明姫様御事、雅姫様、

右ノ通、從 中将様御名被進候旨申来候、依之雅ノ字

実名ニ用候儀遠慮、同唱ノ文字ハ心入ヲ以致遠慮候儀

ハ其通可有之候、

寛政四子二月

五六九二

(朱書)同十一月

一諸人訴訟書物、極月廿五日以後、不急儀ハ不請取様享

保四亥年申渡有之候処、問ニハ差出向モ有之候間、不

急儀ハ不差出様大炊殿ヨリ致承知候、(妻刈実祐)

五六九三

(卷之二六 一五九四の?)

一太守様、先月廿一日 御前髪被為執候旨御到来候、

(朱書)天明八年申

二月十四日 (實入八種) 安房

五六九四

(卷之二五 一四四七)

(朱書)同三月
一正月十三日

右、頼朝公御正忌日ニテ、鎌倉 御代參被仰付、御当

地ニテハ花尾山 御代參ヲモ被仰付事候付、以來御精

進日被立置候、

一御庭掛 一諸御礼掛

右ハ、以來若年寄詰之節ハ御当地仕向ノ通、於江戸モ

受持被仰付候、

五六九八

(卷之一九 一一三六)

(朱書)同
一是迄拾人賄料被下來候面々、御広敷番之頭へ被仰付候

へハ六人ノ賄料被下候へトモ、以來ハ拾人賄料可被下

候、尤、当分相勤居候面々ハ是迄之通可相心得旨被

仰出候段申來候、

(卷之三〇 一九〇六)

五六九五

(朱書)同
一小番ノ儀、騎馬役ニテ馬上ノ勤兼テ不心掛候テ不叶事

付、先達テ無役ノ人へ馬稽古ノ儀、若年寄衆ヨリ御沙

汰ノ趣有之、人別書付ヲ以申出候、就中御役人中專其

心得可有之事候、

五六九九

(卷之三七 二六七二)

(朱書)同四月
一寺院ニテ下乗ノ儀ハラノツカラ何レモ門前辺ニテ可有

下乗事候、且登 城並寺院へ參詣ノ節乘輿御免無之、

駕籠ニテ登 城又ハ參詣等ノ面々ハ下馬迄可相用事候、

五六九六

(島津久柄 佐生原)

(朱書)同
一明姫様御事、但馬守殿方へ御引取被置、追テ御婚姻御

整被成度旨御願書被仰出置候処、御願之通被仰渡、先

月廿一日三田御屋敷御引越被為濟候、

五七〇〇

(卷之三七 二六六九)

(朱書)同
一御城内供家來左之通、

御家老、侍四五人小者一人

若年寄ヨリ大目付迄、侍四人小者一人

五六九七

(卷之五〇 三八五八)

(朱書)同
一誓詞掛 一御厩掛 (御鷹掛) 一御数寄屋掛 一御能掛

大番頭ヨリ当番頭迄、侍三人小者一人

御側御用人ヨリ御側役迄、侍二人小者一人

御留守居以下、侍一人小者一人

右之通相心得、無役ノ面々モ右ノ振合ヲ以可召列候、

其外ハ下馬下乗等ニ可差置候、

五七〇一

(卷之三十七 二二六六七)

(朱書)同
一御城下下乗涯又ハ西辻番所ヨリ内垂水屋敷西角迄ノ間、

士以上着笠拔可申候、家来其外末々ノ者迄ハ下馬ニテ

着笠可拔候、

五七〇二

(卷之三十七 二二五〇二)

(朱書)同
島津筑後

一右格別ノ思召ヲ以、其身計ハ登城ノ節、水仙之間下ノ

休息所へ可罷在旨被仰付候、

五七〇三

(朱書)同五月
一姫君様、先月十八日御結納御祝儀被為在候旨御到来候、

五七〇四

(朱書)同
一敬姫様御事、旧臘ヨリ御虫氣ノ様被為入、段々御療養

被遊候ヘトモ、追日御勞倦御増被遊候段申来候、

五七〇五

(朱書)同
一大年様御忌日七月十一日ノ筋、大年寺ヨリ申出候ヘト

モ、御系図其外旧記等ニ七月一日ト有之候付、往年七

月朔日被究置候、

五七〇六

(卷之四十三 三二六六五)

一大番頭以下無役大身分、馬上ニテ登城ノ節、御作事

奉行以下御役人行逢候節、過半挨拶無之、乍馬上行ナ

リニ式礼ヲ受罷通候人有之、尤、右諸御役人ヨリ挨拶

不致内、右通行成リニ馬上ヨリ致挨拶罷通候向モ有之、

勿論御格之通致下馬罷通候人モ稀ニハ有之、不相並候

間、右通り御城下近辺ニテ行逢候節ハ、馬ヲトメラ

レ候ハハ御作事奉行以下諸御役人差寄、必致挨拶候様

相心得居、右応挨拶会釈有之被致通行候様、互ニ心入

ヲ以右通イタシ候様可被相心得候、此旨無吃寄々致通
達候様致承知候、以上、

(朱書)同
六月十三日 御目付

五七〇七

(朱書)同六月
一敬姫様御法名 淨信院殿本因即妙大姉

右之通奉号候、

五七〇八

(朱書)同七月
一太守様ヨリ於千万様へハ何被進卜申、於千万様ヨリハ

御進上下可申候、御子様・御内証様ハ御互ニ被進卜

可申候、(重奉) 中将様 真合院様ハ是迄之通被仰出候旨申

来候、

(卷之四七 三五四九)

五七〇九

(朱書)同
一櫛方郡奉行ノ儀、是迄櫛方一篇ノ受持勤被仰付被差分

置候へトモ、以来郡奉行兼務被仰付候、

五七一〇

(朱書)同
一四月廿四日 毎月御忌日

御精進、月次朝計、御祥日終日、御序ノ節御拜、

右ハ、(重奉女、惣態) 淨信院様御忌日、御当代右之通被定置候、

(卷之二五 一四三八)

五七一一

(朱書)同
一四月廿四日 淨信院様御正忌日

中将様朝御精進被遊候、

五七一二

(朱書)同八月
一勤向ニ付諸郷へ差越罷帰候届ノ儀、当日申出候様被仰

渡置候付テハ取違ハ無之筈候へトモ、万一実ハ前日罷

帰、翌日ニ及当日罷帰候由申出候テハ不可然事候間、

左様ノ儀無之様申渡、帰着ノ届申出候節、奉行・頭人

ヨリモ心里數日合相考、相違ノ儀無之様可取計候、乍

此上不都合ノ儀モ有之候ハ、可及迷惑候、

(卷之四二 三〇九五)

五七二三

一種子島彈正

(卷之三三 二五〇〇)

右、月次御礼等ノ節ハ以来独礼ノ面々御礼相濟候テ、

其身一人於御書院御敷居内一晷目御礼可申上候、其節

奏者番名披露可仕候、

右、格別ノ 思召ヲ以其身計被仰付候、

(朱書「同」廿四日) (喜入久福) 安房

五七一四

(朱書「同」十月) 一二ノ丸へ此節下乗下馬札被相建候、

五七一五

(朱書「同」) 一二ノ丸御家作御造立相濟候付、今日ヨリ小番御小姓与

一人ツ、御番被仰付候、

五七一六

(卷之四二 三一一三)

(朱書「同」) 一是迄御役等相勤候人、差迫ノ訳合ヲ以、琉球・島方付

役等名代勤被仰付度旨訴訟申出来候へトモ、以来ハ其

身相勤候筋力又ハ親類懇意ノ者ニテモ、誰へ被仰付被

下候ハ、合力等約諾致候趣ヲ以願出可申候、藏方願等

モ同断ノ趣意可有之旨 御沙汰候、

五七一七

(卷之二五 一四〇三の1)

(朱書「同」十一月廿日) (織豐御室(重幸実母)) 一嶺松院様御事、御病氣ノ処、御養生不被為叶、今未刻

御卒去、

五七一八

(朱書「同」十一月) 一嶺松院殿寒、心貞操大姉

右之通奉称候、

五七一九

(朱書「同」十一月廿一日) 一嶺松院様御遺体、来ル廿三日夜福昌寺へ御入寺、同廿

五日夜御葬送ノ筈候、

五七二〇

(卷之三三 一三〇六)

(朱書「同」十一月) 一南泉院僧止

右ハ、先般上京、正官成被蒙 勅許、出府有之、 公

義 御目見ノ儀ヲモ御願立有之、十月朔日 御目見被

仰付、同七日御暇拝領物被仰付、且又山門玉照院兼帯

ノ儀、是又御願立有之候処、同廿一日上野御殿へ被為

召、玉照院現住不依有無、永代南泉院兼帯令旨頂戴、

御礼勤向等相済候、

五七二一

(朱書「寛政元酉正月」)
一 諸御役人並書役・小役人相勤候人モ新類中へ何ソニ付

御咎目等被仰付、新族ニ相掛程ノ人ハ勤方ノ得差圖可
致出勤事候処、間ニハ不申出モ有之、不相並候間、向
後ハ申出候様可申渡候、

五七二二

(朱書「同正月」)
一 十一月廿日 嶺松院様御正忌日 御精進日

御代参ノ儀ハ年頭・益・歳暮、御正忌日若年寄、

御年回ノ節御家老、且盆御番頭御使ヲ以御灯炉御寺納
被遊、御下国脇 御発賀前ノ儀ハ福昌寺、(兼書)宥邦院

様ヨリ正覚院様迄ノ御位牌前へ御参詣ノ御序 御拜可
被遊候、尤、年頭・益・歳暮等ニ付福昌寺へ 御参詣

ノ御序 御拜被為在候節ハ別段 御代参ハ不被仰付候、
(重書)一 中将様御事ハ毎月御忌日、御精進、月次朝計、御禪月

終日、御代参ノ儀ハ、御七回忌迄ハ月次御側役、御
正忌日、御年回ノ節御家老、益ニ御側御用人、御側

ノ間ヲ以御灯炉御寺納被遊候、

五七二三

(朱書「同二月」)
一 今年度年号寛政ト被相改候旨、来ル三日於江戸被被仰渡

候段申来候間、去ル三日ヨリ諸書付等モ寛政ト可相認
候、

五七二四

(朱書「同三月」)
一 姫君様御事、先月四日 御婚禮被為整、御当日ヨリ

御台様ト可奉称旨被仰渡候、
(兼書「家齊室、茂徳」)

五七二五

(朱書「同」)
一 御台様へ 太守様・ 中将様ヨリ、以来御祝儀事・御

礼事諸事表立候儀ハ 御本丸御老女迄御文ヲ以被 仰
上、其外ノ儀ハ 御台様御付御老女衆宛ノ御文ニテ被
仰上、式日御文モ御同様被仰上候、
(兼書「衆脱力」)

五七二六

(朱書「同」)
一 御縁女様御事、御双方被仰合 中将様御方へ御引取被
(兼書「有馬頼黄迄」)

置、追日御婚姻被為整度旨、先月九日御願書被差出候
処、御願通被仰渡候、且又當時御逗留ノ御事故、表向

御引越ノ不被為及御沙汰、直御当分ノ通被成御座、右
通御引取被仰渡候付テハ同廿五日御内祝被為濟候段御
到来候、

五七二七

(卷之五九 四六〇一)

(朱書同五月)

一 太守様、先月十五日御登城、御礼濟御老中様御列座、

先達テ五節句・八朔 御白書院、月次 御黒書院ニテ

御礼被仰上候様ニト被 仰出候、猶又以来右ノ節 御

着座ニテ御祝儀被仰上候様被 仰出候、

五七二八

(朱書同)

一 江戸詰ノ面々、町方廻船ヨリ大坂迄相廻候荷物、是迄

八間屋喜三郎引受、銘々相對ニテ為頼遣由候処、此節

浦賀御番所御改ノ上、武家荷物役人手形無之、町人荷

物ノ筋ニテ相廻候儀不相成御法付、浦賀御奉行ヨリ御

達之趣有之候、依之以来大坂廻船早駄荷差遣候面々ハ

品立ヲ以物奉行所へ申出、御留守居名印ノ手形ヲ以相

廻、尤、大坂ヨリ江戸へ相廻候早駄荷ノ儀モ、品立ヲ
以手形所へ申出、是同様ノ仕向ニ申渡有之候、

五七二九

(朱書同)

一 今度御誕生ノ 姫君様、 淑姫様ト奉称候付、ヒテト

唱候名ハ末々迄モ遠慮可仕候、

五七三〇

(五七二九身行開朱書)

一 淑姫君様御事、 御台様御養被 仰出候旨申来候、

同十二月

五七三一

(朱書同五月)

一 築地御屋敷、此節御引払、以後同所御茶屋地一囲ニ被

仰付候付テハ向後築地御茶屋ト可相唱候、

一 五本松御茶屋、此節 中將様へ被進候付、以来 御隠

居御方五本松御下屋敷ト可相唱候、

(卷之三三 二六九六)

五七三二

(朱書同六月)

一 明姫様、御婚姻以後トテモ御格式等其外此御方ニテハ

(卷之二八 一七六七)

是迄之通可相心得候、三田ニテ御内輪ノ儀ハ彼御方御仕向之通可有之候、

五七三三

(卷之三三 二二八九)

〔朱書〕同

福ヶ追諏訪神主 井上左膳

花尾山神主 井上右内

右ハ、先達テ神主職叙爵ノ家被仰付置、此節京都吉田家ヨリ神主号裁許有之候付、以来年頭其外屹卜致登城候節ハ諏訪神主本田彈正同様、虎ノ間東脇雁木ヨリ罷上リ虎之間へ相控、門首席ニテ御礼可申上候、進上物ノ儀モ同様被仰付候、

五七三四

(卷之四五 三三七七)

一諸芸練熟ノ上被召出候家ノ儀ハ子孫ニ至其道ヲ御用立候様可心懸、若取違候者ハ本ノ俗生ニ可被仰付旨、先年仰出被置候、直子無之者養子相尋候節、家業ヲ継候程ノ者無之候ハ、自禿候外ハ無之候間、向後ハ血筋断絶ニ及候カ、又ハ無抛詛合ヲ以願出候趣ニ依テハ其節ノ吟味次第、御格ニ不迦者候ハ、其身一代ハ家業ヲ不

得継者ニテモ養子可被仰付候、左候テ、嫡孫ヨリハ屹卜家業為致稽古御用立候様可致候、若心得違其芸不得継候ハ、弥本ノ俗生可被仰付候、

右之通被仰出候、

〔朱書〕同
閏六月

(喜久久福
安房)

五七三五

〔朱書〕同閏六月
一射手へ申達役

右、御座弓ノ節御矢答ノ儀、右役目被仰付候、

五七三六

〔朱書〕同
一御縁女様御事、今般 中将様御方へ被遊御引取、追テ

御婚姻被為整候儀、御願通被仰渡、御引越被遊候付テハ向後御祝儀・伺御機嫌・進上物等モ都テ御子様方ヨリモ重立候方被仰付、尤、太守様御方ノ儀ハ御互ニ是迄ノ通被仰出候、

五七三七

〔朱書〕同
一先月十九日江戸東御殿ニテ御男子様御誕生、御名 時

之丞様卜奉称、御順ノ儀ハ (重兼男、忠厚) 雄五郎様御次、時ノ字並
同唱迄モ遠慮、

五七三八

(五七三七身行間朱書)
一時之丞様御事、都テノ儀、雄五郎様御同様被 仰付
候、

閏六月

五七三九

(朱書同)
一先月廿七日 (重兼兼女) 明姫様・ (忠持 佐土原) 島津淡路守殿御結納ノ御祝儀御
取替、則日御婚姻被為整、同廿九日上御屋敷へ被為入、
御三ツ目ノ御祝且御婚姻被為整候付、同晦日 太守様
以御名代御礼被仰上候、

五七四〇

一御作事奉行以下へ与方御用等ノ節ハ我々名前又ハ座書
ニテ御用申渡来候へトモ、以来ハ進達掛名代ヲ以、衆
ノ字又ハ殿文字ノ間相付向合等申遣筋ニ、先達テ御沙
汰申上仕向被相替候、其外ノ儀モ御用ノ依向ハ右ノ振

合ヲ以掛合等モ可致候間、此段致通達候、
(朱書同) 閏六月廿九日 御小姓与番頭

五七四一

(卷之四八 三二七〇)

(朱書同七月)
一今度島津淡路守殿御婚姻被為濟候、以後御会釈諸事御
取持ニテ御丁寧成方ニ相見得候様有之度候、是迄ノ御
格式ヨリ宜方被相改候儀ニテハ無之、仮令御出ノ節御
取次番薄縁へ罷出候儀、薄縁ノ端へ進候テ罷出或ハ奥
へ御通ノ節、御先立ヨリ奥へ相通候へハ御鎖口ニ御待
被成儀モ有之由候間、右体ノ節ハ別人ヨリ前以可成程
奥へ相通候様可致候、御末家ニ候へトモ御大名御身分
ニ付テハ、御相当ニ御会釈不被為在候テハ御差別無之
候間、淡路守殿御一世不限、往々御同様ニ可被為在候
間、於向々其程合ヲ致勘弁、当分ヨリハ猶又尊崇ノ方
ニ向々ニテ相心得、万一難決儀モ有之候ハ、可得差圖
候、彼御方御家老ヲ初御役々迄モ右ニ準、諸向致取扱
候様於江戸申渡有之候、

五七四二

一他国ヨリ御使者被差越候節、於御対面所 御目見被仰

付来候へトモ、向後ハ於御書院 御目見被仰付候、

五七四三

(朱書)同八月

一御内証様御事、御部屋様、

於千万様御事、御内証様、

右ハ、思召被為在、右之通被 仰出候、

五七四四

(朱書)同

一直触以下諸御役人、御国旅又ハ湯治帰等付、御在府

中是迄ハ伺御機嫌不及筋被仰渡置候へトモ、御在国

中右様ノ節々於席々相唱伺御機嫌可申上候、

五七四五

(朱書)同九月

一銀一枚 但、年限中 白銀三両、

得仏様

一金子二百疋ツ、但、年限中 白銀二両ツ、

貞嶽院様 浄国院様 瑞仙院様

一金子三百疋 但、年限中 白銀三両、

右一行、御惣靈様

右、浄光明寺

一金子二百疋ツ、但、年限中 白銀二両ツ、

慈昭院様 有邦院様

浄岸院様 靈龍院様

慈照院様 玉貌院様

一金子三百疋 但、年限中 白銀三両、

右一行、御惣靈様

右、福昌寺

一金子五百疋 但、年限中 白銀五両、

惠磴院 御惣靈様

右ハ、年頭ニ付太守様御参詣又ハ御代參ノ節、是迄御

進納物無之候へトモ、以来右之通御進納被遊筈候、

五七四六

(朱書)同

一諸座互之問合書等、御役名ニテ遺候節ハ宛書御役名相

認、御役所ヨリ遺候節ハ御役所宛ニ可認旨、先年申渡

候趣有之候処、御役所ヨリ御役名宛認候モ有之、不相

(卷之四七 三六一九の一)

(卷之二八 一七一一)

(卷之四三 三一九六)

並由候間、向後不並ノ儀共無之様可認候、尤、依御役柄御役名難認向ハ取次並進達掛等ノ御役名可相認候、

五七四七

(朱書)同十月

(有馬頼實女)

一御縁女様、御病氣御養生不被為叶、先月廿六日被遊御逝去候、

(卷之二五 一四〇八の1)

五七四八

(朱書)同

一御縁女様御法名 貞心院殿端嚴妙相大姉

五七四九

(朱書)同十一月

(殺田)
一市田勘解由

右、御由緒柄ニ付テハ先年家格ヲモ結構被仰付置候ヘトモ、此節猶又格別ノ思召ヲ以家格一所持被仰付、家筋連名伊勢播磨順次被 仰付候、

右同人

右、格別ノ御問合有之段々結構被仰付候ヘ共、厚思召被為在、御役被成御免、其身 御座之間御礼被 仰

付候条、五節句・月次大目付御礼相濟罷御礼可申上候、年始・八朔ハ家格通可相心得候、且御近習ヘモ罷通

五七五〇

(朱書)同十一月

一式日御使ノ儀、江戸御国元共兩度又ハ一度隔月被差立

(卷之二〇 一一七九)

来候ヘトモ、十二月ノ儀ハ以来一度前ニテモ兩度被差立筈候、

五七五一

(朱書)同二年戊正月

一御刀鍛冶

奥孝左衛門 大和守

伊地知平覚 伯耆守

右、受領被仰付候段、先達テ申渡置候通、此節右ノ通勅許有之、朝臣ノ二男相用候様被仰付候間、口宣案等相渡候条雖有可奉承知候、

五七五二

(朱書)同

一御馬預見習

一 御役名順物奉行見習次

一 支配並勤方御馬預同前

右之通、御役新規被相立候、

五七五三

(朱書)同二月
一 御鳥預頭取

一 御役順尾畔奉行次

一 輿支配

右之通、御役新規被相建候、

一 二月廿一日・同廿五日、士小踊被遊 御覽候、

五七五四

(朱書)同三月
一 正月十一日御鏡ノ餅被下候故、御酒被下来候処、御儉

約中不被下候へトモ、格別成御祝候間、江戸御国元共

御酒可被下候、

五七五五

(朱書)同三月
一 蓮心院様御忌日、二日ニ被仰渡置候へトモ、以来三日

二可相心得候、

五七五六

(朱書)同四月
一 御直元服等被仰付候節、父ノ御礼以来大目付以上ハ於

與御礼申上、御留守ノ節ハ於梅之間御礼申上候様被

仰付候、

五七五七

(朱書)同
一 御一門家元服ニ付、髮御(モウシ)以後御礼ノ節、長袴着用

被究置候へトモ、此節島津兵庫殿嫡子善次郎殿元服ニ

付、同断ノ節、素袍着用被仰付候、島津若狭殿(忠教)・島津

備前殿(實隆)・今和泉家三家ノ儀モ同様、以来素袍着用被仰

付候、

五七五八

(朱書)同七月
一 御牧掛ノ事、「モウシ」 牧司、

駒掛之事、「コマミマハリ」 駒見廻り、

右之通、唱被相替候、

五七五九

(朱書)同
一 太守様へ佐竹右京太夫様御妹様御縁与御内約ノ儀、御

互以御使御取結被為濟候段御到来候、

五七六〇

(卷之四七 三五八八)

一八朔進上物仕御祝儀申上来候人、忌中其外差支候訳有

之、当日進上無之節ハ追テ願進上不及旨為被究置儀候

ヘトモ、以来追テ進上可被仰付旨被仰出候、

五七六一

(卷之三六 二四七三)

一八朔二付、以来 御部屋栖様へ進上物 御隠居様御同

様被仰付候旨被 仰出候、

五七六一(の1)

(卷之二六 一六二五)

一太守様へ佐竹右京太夫様御妹幸姫様御縁与御願書、先

月廿五日御用番様へ被差出候段御到来候、

(五七六一の2)

一本文御願ノ通被仰渡候段御到来候、

同十月

五七六三

(五七六二号行間朱書)

一御名ノ文字并唱遠慮、

五七六四

(卷之三七 二六九七)

一宗門掛御用屋敷ノ事、宗門方吟味所、

右之通、唱被相改候、

五七六五

一太守様、先月廿七日被為召御登城、 從四位上中将御

官位御昇進ノ旨御到来候、

五七六六

一旧臘廿一日江戸於東大奥 御男子様御誕生、御名為次

郎様ト奉称、御願ノ儀ハ時之丞様御次ニ候、為ノ字並

同唱迄モ遠慮、

五七六七

(五七六六号行間朱書)

一為次郎様今度御宮参迄モ被為濟候付、向後御取扱向、

時之丞様御同様被仰出候段申来候、

五七六八 (卷之二六 一六二七)

一(五七六六号行間朱書)為次郎様御五男ノ御届被為濟候、

同五月

五七六九

(朱書)同三月

一中将様御事、島津静山殿去ル十日夜死去ニ付、御母方

御定式ノ御忌服御掛候、

一(行間朱書)「一本文ノ通申渡有之候へトモ、(重年)円徳院様加治木家ヨ

リ被遊御相統候付、半減ノ御忌服被遊御掛筈候、」

五七七〇

(朱書)同三月

一先月廿七日、太守様御結納御婚姻首尾能被為濟候段

申来候、

五七七二

(卷之二八 一七二六)

一幸姫様御事、御婚姻御当日ヨリ御前様卜奉称候様被

仰出候、

五七七二

一(朱書)同太守様 中将様 御前様 (重養男、忠厚)雄五郎様 時之丞様

(重養御室、茂姫実母)御部屋様

右之通御名御順等ノ儀、以来書付等ニモ相認候様申来候、

五七七三

(朱書)同四月

一御位牌殿後御用御門之事、東御長屋御門、

右、此節ヨリ諸人通融被仰付、右之通唱被相替候段申

来候、

五七七四

(朱書)同六月

一大目付以上ノ御役ニテ家督・継目ノ御礼、進上物納ニ

被仰付候節、以来於台子之間奏者番へ相付被相納候様

被仰付候、

五七七五

(朱書)同

一白銀一枚 築城 神明宮

御代参 御家老

(卷之四七 三五六九)

(卷之三七 二六二六)

右ハ、此節 御官位御昇進ニ付、御側御用人御代參ニ
テ青銅百疋御進物有之候トモ、神明宮ノ儀ハ江戸芝神
明宮御移御勸請ニテ 太守様御産神ノ御事故、向後右
式御慶事ノ節ハ右之通御代參ヲ以被遊 御進納候、

(五七七六の2)

右之通、從 公義被仰渡候旨申來候、
(朱書)同
七月 (伊勢貞矩) 播磨

五七七六(の1)

(御触書天保集成 五一号)

一 献上ノ御太刀・切羽・鉏・鷄目等不及金無垢事、

一同断梵字等彫有之身ニハ候トモ、無差別可有献上事、

但、増上^{措ケ}有之類モ不苦候事、

一 御大小ノ拵、其家々ノ風ニテ拵方少々、ノ替リハ不^{ナシ}

苦候事、

一 惣テ献上^物ノ箱台等上品ニ不限、手輕^ニ可致事、

但、少々ツ、取縮候儀モ候ハ、其段ハ可被相伺候

事、

一 鮮鯛献上ノ儀、鱗摺・尾鱗等少々ノ損シハ無構可有獻

上事、

右之通、万石以上ノ面々ハ可被相触^候、万石以下ニテ

モ相触、可然向ヘハ可被達候、

五月

五七七七

(朱書)同八月

一 御抱守 富之進様御付

右、御部屋栖様御抱守次、

一 雄五郎様御付

右、富之進様御抱守次、

一 雄五郎様御付

右、中将様奥御小姓次、

一 雄五郎様御付

御小姓

右、太守様御小姓次、

右之通、御役順被相定候、

五七七八

(朱書)同九月

一 諸国御関所通行ノ儀ニ付、從 公義被仰渡趣有之、先

達テ申渡通候処、以来 御目見仕候家来ハ一同駕籠ニ
テ罷通候様被仰渡訊ハ無之、只今迄 御目見仕候倍臣(陪力)
ノ内ニハ駕籠ニテ通来候モ有之候間、右ノ分ハ是迄ノ
通ニテ相替儀無之事候旨、猶又被仰聞候段、御目付衆
ヨリ被相達候旨申来候、

居、右同断書役場御暇ノ願申出、御免被仰付差越候者
モ可有之候条、以来右様ノ節ハ其支配頭ヨリ日数何日
ノ御暇ニテ何方御藏へ何日差越候段、御裁許掛へ居可
有之候、
五七八二 (卷之二九 一八五三)

五七七九

(朱書)同
一 富之進様御事、奥平九八郎様、

一 御両殿様御名ノ文字並唱、紛敷文字実名用候儀、可致
遠慮候、

右之通被成御改名候段申来候、依之右御名又ハ八九八ト

但、介ノ字ハ不苦候、

申名遠慮、

一 寔 茂 幸

右文字実名ニ相用候儀、可致遠慮候、

五七八〇

(朱書)同十月
一 清貌院殿、心月麗光大姉

一 明 雄 邦 時 為
右文字実名用候儀、可致遠慮候、同唱ノ文字ハ其儀不

右ハ、為次郎様御実母於(重兼男)「(里江方)」法号右之通ニテ、以来諸

及候へトモ、人々心入ヲ以遠慮致候儀ハ可為其通候、

書付等ニモ此殿文字相用候様被仰付候、

一 貴 吉 繼 信 宗 年 竹

右文字実名ニ用候儀、遠慮被仰渡置候へトモ、最早不

五七八一

(朱書)同
一 諸郷藏役相勤居候者ノ内、間ニハ病氣等ニテ親類又ハ

一 治 基 洪 堯
及其沙汰候、人々心入ヲ以遠慮致候儀ハ可為其通候、

心易者為看病方差越願申出、其外書役・小役人等相勤

右文字前条同断被仰渡置候へトモ、最早遠慮ノ不及沙

汰候、

右外遠慮被仰渡置候文字ノ儀ハ是迄ノ通可相心得候、

(朱書「同」)
十二月
(島津久親)
求馬

五七八三

(朱書「同四年子正月」)
一憲之助様御儀、奥向御内々ノ御取計故、先此様ノ字相

用候様内分可申聞置候、

五七八四

(卷之三三 一一二一〇)

(朱書「同閏二月」)
一初テノ 御目見並諸御礼被仰付候節、小番・新番・大

身分ノ二男以下、其外御小姓与ニテモ御役等ニ付熨斗

目致着用候者ハ家格又ハ進上物ニ無構都テ熨斗目可致

着用候、尤、右外応進上物熨斗目致着用来候分ハ是迄

之通可有之候、且小番以下進上目録料紙ノ儀、小奉書・

杉原ノ間可相用候、

五七八五

(卷之四五 三三七八)

一嫡子初テノ 御目見相濟又ハ手札等申受候以後相果、

或ハ本家致相統等候節、二男初テノ 御目見不相濟者

ハ嫡子成ノ願不申出モ有之候ヘトモ、向後右体ノ者ハ

二男初テノ 御目見不相濟候テモ嫡子成ノ願可申出候、

(朱書「同」)
七月
(市田教因)
勘解由

五七八六

(朱書「同七月」)
一堀田相模守様

右ハ、御由緒柄殊当時無拗御縁家ニモ候故、御互二御

両敬ノ御取遣被成度旨、彼御方ヨリ被仰進趣有之、被

応其意御引結迄被為濟候段申来候、

五七八七

(卷之三三 一二五九二)

一御勝手方ノ儀、是迄直触以下役人ノ内並吟味役・書役

等ニ至リ御用ニ付罷出候節、本間ヨリ無差別罷出来候

ヘトモ、表方御家老座ヘ縁ノ間ヨリ罷出来候御役々並

吟味役・書役等表方同前、縁ノ間ヨリ罷出候筋、此節

表方ヘモ申談相改候、

(朱書「同」)
廿一日
八月

(名越恒應)
右膳

五七八八

(卷之二八 一七二三)

一今度(朱書)同八月(家斉男)若君様御誕生、

御台様被遊(家斉室、茂姫)

御養旨被 仰出、

御名 竹千代様卜被進、

御官位迄ハ 若君様卜奉称

候、依之御名ノ文字名並実名相用候儀、且同唱ノ文字

迄モ遠慮、

五七九二

(朱書)同十月

一年頭・五節句・八朔・月次其外屹立候節ハ 二丸御門

相開、御一門方・島津左衛門同列ノ面々、大目付以上(久定)

並着座門首・琉球人ノ分ハ通融被仰付候、其外ハ都テ(折九)

小門通融被仰付候、

但、御一門方被罷通候節ハ平日トテモ時々御門相開

通融被仰付候、

(卷之二五 一四〇六)

五七八九

(五七八八号行間朱書)

一若君様、御不例御養生不被為叶、先月廿四日被 御逝

去候段御到来候、

五七九三

(朱書)同十一月

一中将様、二丸へ被成御座候節諸謁事、御役・御役替・

地頭職等其外諸御役人、其身ノ御礼事並着出立等付、

伺御機嫌ハ二丸へ可罷上旨被仰付置候、大目付以上御

側御用人・御側役・奥向・御近習通ノ面々、都テ二丸

於奥可申上候、表御役人ハ二丸へ罷上候筋ニテ於御本

丸可相謁候、

(卷之二八 一七七四)

五七九一

(朱書)同

一公方様

御台様

若君様

種姫君様(家治養女)

淑姫君様(家斉女)

右之通、御順二候旨被仰渡候段申来候、

五七九四

(朱書)同十一月

一花島御門ノ事、西口御門、

右之通、唱被相改候、

(卷之三七 二六二七)

五七九五

(朱書)同十二月
一 御葉園奉行

一 御役順御勘定小頭次

一 奥支配

右之通、御役新規被相建候、

五七九六

(朱書)同
一 御兵具方並御広敷其外同心ノ事、足輕、

右之通、唱被相替候、

御領地境ノ諸郷町人ノ内、是迄ノ同心ノ場召仕候者共、

同心、

右之通可相唱候、尤、同心ノ場相動候節計右ノノ名目

候間、平日町人唱ノ儀ハ是迄之通、

五七九七

(朱書)同五月正月
一 乘馬白絹沓不依誰人是迄相用來候へトモ、白絹沓ノ儀

ハ不相成事候間、以來花色其外何色ニテモ染絹沓可相

用候、

五七九八

(朱書)同二月
一 太守様、當時月次御礼御黒書院

右ノ内ハ若菜御礼ニモ被遊 御登城候様被仰出候旨被

仰渡、先月七日 御登城初テ御祝儀被仰上候段、御到

來候、

五七九九

(朱書)同四月
一 諸家ノ乘馬ヲ家來共乘廻ノ儀被差免候、依之重御役ハ

勿論近付ノ諸士等ニ行逢候節ハ可致下馬候、往来余多

ノ儀故、近付ニテ無之向ハ乍乘馬不敬無之様、其外通

路ノ障リ相成候カ、右類其身ヨリ氣相不相付候節ハ自

ラ先方ヨリ申聞モ可有之、其節ハ致下馬可罷通候、往

還筋ノ儀共何方トテモ同断相心得、聊往来ノサマダケ

ニ不相成様堅可被申付候、

五八〇〇

(朱書)同五月
一 德川刑部卿様、御不例御養生無御叶、去月八日被成御

逝去、依之 太守様御従弟ノ御統故、御定式ノ御忌服

被為請候旨申來候、

敦様卜奉称候、

五八〇一

一奉_(朱書)行・頭人等御役替又ハ何ソニ付相祝、支配下ノ面々

五八〇五

一御軍師_(朱書)同八月

相招候節ナト其支配下平服ニテ差越候向モ有之由候、

但、御近習通、

頭役等へ相對候儀候間、以來ハ上下着用ニテ差越可申

右之通、新規御役被相立、諸事御目付同格被仰付候、

候、

五八〇二

一今度御出生_(朱書)同六月_(家齊男、後家慶)ノ御男子様、松平敏次郎様卜奉称候旨、從

(卷之二八 一七一八)

公義被仰渡候段申來候、依之右名ハ勿論同唱迄モ遠慮、

五八〇六

一御_(朱書)樓門下ヨリニ丸通、駈付火元見外ハ馬乘通候儀、遠

慮ノ筋候へ共、出火ノ節ハ以來馬乘通候儀、且荷付馬

五八〇三

一敏次郎様御事御弘有之、_(五八〇二發行同朱書)若殿様卜可奉称旨被仰出候、

(卷之二八 一七一九)

一敏次郎様御事、_(家齊男、茂徳)御台様御養被 仰出候、

五八〇七

一乘_(朱書)連院様御出生ノ御男子、徳川_(又、齊朝)愷千代様卜御名被遊御

拝領候段申來候、

五八〇四

一奴之助様御事、_(好力)一橋様御嫡子被 仰出、御元服御一

五八〇八

一御上下ノ節末々ノ者共、是迄寒中ニモ脚半相用來候処、

字御拝領被為任、從三位中将民部卿卜御改、御実名齊

冬向ノ御旅ニハ脚半ニテハ甚可致難儀卜被思召上候、

依之以来ハ冬向御道中ノ節ハ末々迄モ都テ股引用候様被仰付候、

但、惣体是迄脚半用來候節ノ儀ハ自ラ其通可有之候、

五八〇九

(朱書「同六年寅正月」)

(重書「同」)

(重書「忠厚」)

一中将様 雄五郎様、出火 御立退ノ節ハ 御陣笠可被

為召、御供廻モ相用候様、尤、御火頭巾ノ儀ハ為御持可被遊候、

但、御刀番以上頭巾為持、陣笠致着用候様被 仰付

候、

右之通被 仰出候段申来候、

五八一〇

(朱書「同正月」)

一誓詞被仰付候節、諸向小刀而已相用候ヘトモ、以来小

刀、鉞勝手次第相用可申候、尤、以前ノ通針可差出置

候、

五八一二

(朱書「同」)

一医道其外諸稽古方ニ付、江戸其外他国へ入門等被仰付

置候者共、随分深切ニ致修行、芸道鍛練往々御用立候様精々可心掛候、就中医道ノ儀ハ年功不致鍛練候テハ

難御用立事候間、猶又尽精力可相属候、且他所稽古ノ

儀ニ付テハ容易不被仰付事候ヘトモ、依訳以来右式稽

古被仰付候節々、頭人・支配頭等ヨリ人々性質能々遂

吟味、先々可御用立者相撰可申出候、

右之通、 御沙汰被為在候、

五八一二

(朱書「同二月」)

一 種姫君様、御法号 貞恭院様卜奉称候旨申来候、

五八一三

(朱書「同八月」)

(重書「忠厚」)

一 為次郎様御事、 御部屋様御養被 仰出、六月廿八日

御弘メ有之候段申来候、

五八一四

(朱書「同九月」)

一 御一門方登 城休息所へ被為居、何ソニ付被為逢候人

有之候節ハ相詰居候御目付へ其段相達可罷通旨、寄々

致通達候様可申渡候、

但、御用人・御側役等ハ是迄之通、

五八一五

(卷之二五 一四五九)

(朱書)同十月

一御正統ノ 御夫人様御年回御法事ノ儀、以前ヨリ被仰

付来候通、三十三回御忌迄ハ御物執行被仰付、五拾回

御忌ヨリ寺役被仰付候、併五廟ノ内へ被遊御当候御方

様ノ御夫人様ハ為御遠忌共御物執行被仰付候、

一貞獄院様御年回御法事、是迄不被為及御沙汰候得共、

以来御年回ノ節ハ御法事被仰付候、

一信解院様御法事ノ儀、三十三回御忌迄御物執行被仰付

五拾回御忌ヨリ寺役被仰付、盆御灯炉ノ儀、三十三回

御忌迄ハ御番頭御使ヲ以被遊御寺納候、左候テ、年頭

其外 御代參ノ儀、三十三回御忌迄ハ是迄之通被仰付

候、

一淨信院様御法事ノ儀、右御同様三十三回御忌迄御物執

行被仰付、御代參ノ儀モ其節迄ハ是迄ノ通ニテ、其

後ハ前条御同様被仰付置候、

右之通被仰付候段申来候、

五八一六

一三拾三回御忌迄 淨信院様

四月廿四日 毎月御忌日 御精進日

月次朝計、御禪月朝計、

右之通被 仰出候段申来候、

五八一七

(卷之二五 一四五八)

一妙心院様

嶺松院様

右ハ、御正統ノ御夫人様、

信解院様 淨信院様御法事ノ儀、三十三回御忌迄御物

執行、五十回御忌ヨリ寺役可被仰付旨、先達テ被究置

候ニ付、右御両靈様御法事ノ儀モ御同様被仰付、從

御両殿様御代參等ノ儀モ、三十三回御忌迄、是迄ノ通

被仰付候、

一嶺松院様御事、中將様ニハ格別御崇敬ノ趣被為在候

付、三十三回御忌後ハ御法事 御代參等 御一世是迄

ノ通、御隠居御方御構ヲ以可被成進旨被仰出候、

右之通被仰付候段申来候、

五八一八

(朱書)同閏十一月

(重泰女、敬姫)

一 淨信院様へ盆御灯炉ノ儀、御七回迄ハ御番頭御使ヲ以可被遊御寺納旨被究置候へトモ、三十三回御忌迄ハ是迄ノ通、御番頭御使ヲ以御寺納被遊筈候条、此旨可承向へ可申渡候、

五八一九

(朱書)同七年卯二月

(忠持、佐土原)

一 島津淡路守殿御女子於章殿、今月四日御夭亡被成候、

五八二〇

(卷之三五 二三九八)

(朱書)同三月

一 御家老其外諸御役人等、於他所持高答振、是迄不同有之候付、以来押並候様被仰付、答振別紙ノ通ニ候、

一 五千石高

御家老 御側詰

一 四千五百石高

若年寄

一 四千石高

大目付

一 三千石高

大番頭・寺社奉行・御勘定奉行

一 二千五百石高

御番頭

一 一千五百石高

御側御用人ヨリ町奉行迄

一千三百石高

御側役

一千石高

御留守居

一九百石高

御納戸奉行ヨリ物頭迄

一七百石高

御船奉行ヨリ御小納戸頭取迄

一五百石高

御広敷御用人ヨリ小十人頭迄

一三百石高

十人賄料ノ面々

一二百石高

六人賄料ノ面々

一百五拾石高

五人四人賄料ノ面々

一百石高

御小姓与

一五拾石高

諸与与力

右、以上ノ知行高有之面々、其通相答可申候、

五八二一

(卷之四七 三五九〇)

(朱書)同

一年頭・八朔進上物仕御祝儀申上来候人、当日遠慮等ノ御答目被仰付置候人ハ赦免後進上物被仰付、

一年頭ノ儀、御役・地頭職並継目・家督等ノ御礼、正月

十五日ヨリ内相濟候人ハ有来通進上物被仰付、八朔ノ

儀ハ一日限ニ付、当日右御礼等不相濟人ハ進上物流ニ

被仰付候、

五八二二

(朱書)同四月
一大與人足ナト、相認候儀モ有之候へ共、以来右体御広

敷へ相掛候人足等ハ御広敷人足ナト、可相認候、尤、

不限人足右ノ心得ヲ以、御広敷支配ノ分ハ其趣ニ可相

認候、

五八二三

(朱書)同五月
一先年於当地御出生ノ 御男子様、当卯年御七歳御成虎

(興) 寿丸様ト奉称、追々御丈夫被為成候付、此度 (齊宣書) 御前様

御養御嫡子御届被仰上候ニ付テハ無程御出府可被遊ノ

処、未御幼年ノ御事、長途御旅行難被成整、御国元へ

可被為入旨、御用番様へ被仰出候処、被成御承知候段

被仰渡旨御到来候、

五八二四

(朱書)同
一虎寿丸様御事、 若殿様ト可奉称、且御順ノ儀、 御

前様御次被仰出候、

一右ニ付、虎ノ字並同唱可致遠慮候、

五八二五

(朱書)同五月
一若殿様へ松平出羽守様御息女富姫様御縁与御書、先月

廿一日御用番様へ被仰出候段御到来候、

五八二六

(朱書)同六月
一御役人ノ内、島方勤被仰付御役ノ内ニテ致渡海勤向相

仕廻罷登候節、本ノ通相勤候儀、支配へ相付可得差圖

候、

五八二七

(朱書)同
一若殿様へ松平出羽守様御息女富姫様御縁与、御願ノ通

被仰渡候付、御縁女様ト可奉称、御順ノ儀モ若殿様御

次ニ被 仰出、且御結納被進候迄ハ此様ノ字被相用候

旨、是又被 仰出候、

一右ニ付、御名ノ字並同唱ノ名付居候者可相改候、

五八二八

(朱書)同
一御屋敷一ヶ所

鹿尾島中村 一万三千九百六拾八坪、御家作有、

(卷之三十七 二六九九)

(卷之四九 三七六〇)

右、今般御取立ニテ、以来御用地相成、中村御茶屋卜相唱、尾畔・磯同様ノ振合被仰付候、

五八二九

(朱書)同七月
一御屋敷一ヶ所

鹿兒島坂元村ノ内田之浦四千七百拾坪、御家作有、

右ハ、此節新御取立ニテ、思召ヲ以御内証様へ被進候、

五八三〇

(御触書天保集成 五二号)

(朱書)同
一献上ノ御刀・切羽・鍬・鴉目等金無垢ニ不及段先達ケ

相達候処、銀台金着七ニテ献上有之候、以来不及銀台、

銅台金着七ニテ不苦候、此段万石以上並万石以下ニテ

モ相達、可承向ハヘモ寄々可被達候事、

右之通、從 公義被仰渡候旨申来候、

五八三一

(朱書)同八月(久柄)
一種子島佐渡

右、月次御礼等ノ節ハ以来其身一人於御書院御礼申上

候様被仰付置候、依之謁ノ儀ハ於松ノ間独礼、一同謁

(卷之三十七 二五二四)

相濟候上引次相謁、登 城ノ節ハ杉ノ間へ可相控候、

五八三二

(朱書)同
一今度江戸於東大奥 御男子様御誕生被遊、御名 乘之

助様卜被進、御順ノ儀ハ 為次郎様御次ニ被 仰出候、

乗ノ字並同唱ノ文字遠慮可仕候、

五八三三

(朱書)同
一操姫様

右ハ、今度於江戸御誕生ノ御女子様、御名右之通被進、

御順ノ儀ハ 乗之助様御次ニ被仰出候、右文字並ミサ

卜唱候名付居候者ハ遠慮可仕候、

(行間朱書)
一操姫様御事、寛政七卯春御出生被遊候筋、諸帳面相

見得候事」

五八三四

(朱書)同九月
一今度 御帰国ノ御礼御献上物ノ内相損候御品有之段被

仰渡、御差控ノ御伺書今日江戸表へ被差出候、

(卷之四六 三三三八)

五八三三

(五八三四号行加朱書)

今度 太守様御差控ノ御伺書被差出候処、不及御差控段被仰渡候旨御到来候、

同十月

五八三六

(朱書)同十月

一 疱瘡・癩瘡・水痘看病人、発熱ヨリ廿一日致遠慮、右相過候テモ三番湯不相濟候ハ、御暇ノ願可申出候、

但、表方勤ノ向モ右日数ノ通、御目通ニハ不可罷出候、

五八三七

(朱書)同十一月

(卷之四五 三三四八)

一 他家養子ニ參居、病身相成、養家相統致体無之訳ヲ以違変被仰付候者、無間モ御奉公方相願候モ有之由、不都合ノ儀ニ候間、右式取違ノ儀共無之様相心得、尤、往々致快氣御奉公方相勤体罷成候節ハ其支配頭へ申出、何分差図ノ上可取計旨被申渡置候様、可承向々へ可申渡事、

五八三八

(朱書)同

一 御手鍵一本 対御鍵二本 御長刀一振

御鍵一本 御馬一疋

右ハ、

(齊興)

若殿様御嫡子ノ御届被為濟候ニ付、從 太守

様此節右之通被進、右御道具ノ儀ハ表御番所へ被備置候、

五八三九

(朱書)同

(卷之四七 三五四六)

一 御小姓与ノ内ヨリ書役・小役人相勤、其勤内不念等有之、退役以後差控相伺候節、御小姓与番頭へ相付申出モ有之候へトモ、向後ハ右差控書物御小姓与番頭入内見、勤内ノ支配へ相付可差出候、別勤候ニ相成候以後同断ノ節ハ右ノ振合ニテ其節ノ頭人へ書物入内見可申候、尤、御小姓与外ノ儀モ前文ノ趣ニ可相心得候、

五八四〇

(朱書)同

一 書役・小役人無調法有之、役儀差免御咎目被仰付候節、夫々奉行・頭人へ申渡、赦免ノ節ハ其身ノ支配頭へ申渡有之趣ニ候へトモ、御咎目被仰付候趣意不存向ニテ

赦免迄ヲ致取扱候儀ハ不相当故、向後ハ以前ノ通相心得、最初申渡ノ奉行・頭人へ可申渡候、左候テ、赦免ノ段ハ其身ヨリ支配頭へ届可申出候、

五八四一

(朱書)同
一東御中間

右ハ、是迄東奥御中間ト相唱、諸書付等ニモ認来候へトモ、右通被相改、於御当地ハ二九御中間ト相改候様被仰付候段申来候、

五八四二

(朱書)同十一月

一若殿様へ年頭御太刀進上、左之通、

一御一門方並部屋栖於台子ノ間、以使者奏者番へ相付納太刀、

一大目付以上其外御役・地頭職並家督等ニ付御太刀進上ノ面々、夫々ノ於席納太刀、

一江戸詰ノ大目付以上其外御役・地頭職又ハ家格等ニ付御太刀進上ノ面々、於御当地夫々ノ於席名代ヲ以納太刀、

一御太刀進上ノ面々、御当地へ不在合又ハ病氣ノ人ハ夫々ノ於席名代ヲ以納太刀、
右之通、来辰年頭ヨリ進上被仰付候、

五八四三

(朱書)同十一月
一年頭・歳暮ニ付、御両殿様へ御肴並御茶等は迄進上

仕来候通、当歳暮ヨリ 若殿様へモ御同様進上被仰付候、

五八四四

(朱書)同八年辰正月
一諸郷・私領並三町役々宗門加役ノ事、宗門方掛、

右之通、唱被相替候、

五八四五

(朱書)同
一今度 御男子様御誕生、(家斉室、茂姫)御台様御養被 仰出、松平

ツカ(家斉男)敬之助様ト奉称候旨、公義ヨリ被仰渡候段申来候、
敬ノ字並同唱遠慮可致候、

五八四六 (卷之三十七 二五二二)

一御一門以下寄合並以上、元服・家督・継目・養子成等

並初テ 御目見ノ節、且又御役・地頭職ノ御礼申上候

面々、以来 若殿様へモ 中將様御同様、御礼進上物

被仰付候、

(山田有儀 伯耆)

学校中へ

学問ハ人ノ人タル職分ヲ尽ス儀ニテ、臣子トシテハ忠

孝ノ実ヲ好ミ、節議ヲ嗜ミ候ヲ真ノ学問ト可心得候、

仮令数万卷ノ經史ヲ博覽強記シ、講説イカホト巧ミニ

有之候トテモ、其実行ニ薄キモノハ却テ風俗ヲ破リ候

間、其段能々弁別イタシ可相慎之候、

五八四七

一御前様御事、 敦姫様ト御名替被遊候間、御名ノ字並

同唱ノ名付居候者ハ可相改候、

一文芸モ学問科中ノ一端ニ候ヘトモ、夫ノミニフケリ候

モノハ多ク本業ヲハスレ浮靡輕薄ニ陥リ、其害不少候、

但、文芸ヲ学問ト心得、実行無之モノハタトヒ才学

スクレ候テモ擢用有之候間敷候、

五八四八

一高輪御茶屋ノ儀、高輪御殿ト相唱、且同所御屋敷西御

門諸人通融被仰付候、

(卷之三十七 二七二二)

一学校ハ礼義第一ノ場ニテ、尊長ヲ崇敬候ハ勿論等輩モ

互ニ遜讓ヲ先トシテ可相交候、師員専ラ此旨ヲ能々可

致教導候、

一師員ハ子弟ノ教育ヲ專ト可致事ニ候、若自己ノ読書作

文等ニフケリ、其職ヲユルカセニイタシ候モノハ可被

退候、

一学問相進ミ、行儀正敷、才幹有之モノハ自其身相当ニ

五八四九

一講堂学規ノ次第ハ先年被定置趣有之候処、猶又此節別

紙之通御沙汰被為在、学校中へ申渡候、依之致学問候

向等ヲ初、何レニモ承知仕候様、諸向へ可申渡置候、

(卷之四〇 二八七〇)

(市田教國)

勘解由

擢用可有之候、

右、学規ノ次第八先年被定置候へトモ、猶又此節前条ノ通御沙汰被為在候間、何レモ慎テ可相守之者也、

五八五〇

(朱書)同三月

一 淑姫君様御事、

(齊朝)

徳川愷千代様へ御再縁被仰出旨被仰

渡候段申来候、

五八五一

(朱書)同

一 雄五郎様御妾腹ニ先達テ御女子様御出生、於礼様卜御

名被遣、

(池田善生)

今般松平但馬守様御養女御届被仰上、先月廿

九日彼御方へ無御滞御引越被為済候段申来候、

一 御名順ノ儀、

(齊直女)

操姫様御次、書付等ニモ其通相認候様

被仰付候、御名文字ノ儀人々心得ヲ以可致遠慮候、

五八五二

(朱書)同

(卷之二八 一七五四の1)

一 松平但馬守様御両敬被仰合候、依之何ソニ付彼御方御

惣方様へ被仰進候節、書付等ノ儀ハ此様ノ字、此御方

御惣方様へハ此様ノ字相認候様被仰付候、

五八五三

(朱書)同四月

一 中将様御事、先月十三日高(輪之)輕御殿へ御引移被為済候段

御到来候、

五八五四

(朱書)同

一 操姫様御事、

(池田治通)

松平相模守様御嫡子銀之進様へ御縁与御

内約被為在、先月十九日御互御先手衆ヲ以御取結被為

済候段御到来候、

五八五五

(朱書)同

一 先月十九日

(家齊室、茂姫)

御台様御安産、

(家齊男、敦之助)

御男子様御誕生被遊候

旨御到来候、

五八五六

(朱書)同

一 操姫様御事、松平相模守様御嫡子銀之進様へ御縁与御

内約被為済候付、此涯御三殿様

(齊直卷)

御前様 操姫様御通

融、其外様ハ追テ御始リノ筈、彼御方ニテモ相模守様

並奥方様・銀之進様・

(池田直道兼卷)

桂香院様迄御通融被成、

(池田宗泰卷)

以来御

両敬被仰合候旨申来候、

五八五七

(卷之三十七 一五二五)

(朱書同)

一中將様、此節高輪御殿へ御引移ニ付、諸謁事等左之通、

一諸御役人、月次並年頭・五節句其外御祝儀・御機嫌伺

等申上候儀ハ当分ノ通上御屋敷ニテ可申上候、

一御役・御役替・地頭職等被仰付、其外諸御役人其身ノ

御礼事並着出立等ニ付御機嫌伺ハ高輪御殿へ可罷出候、

右之通被仰付候旨申来候、

五八五八

(卷之二十六 一六三二)

(朱書同)

一中將様御事、高輪御屋敷へ御引移被遊候ニ付テハ、何

ソニ付 上使御給ノ節ハ上御屋敷ニテ御受可被遊旨、

御用番様へ御届被仰上置候旨申来候、

五八五九

(朱書同)

一今度御誕生ノ (家齊男) 御男子様、松平敦之助様ト奉称候旨、

從 公義被仰渡候段申来候、依之敦ノ字並同唱可致遠

慮候、

五八六〇

(卷之四十七 三五九五の1)

(朱書同五月)

一年頭・八朔共ニ遠慮等被仰付置候人、赦免已後進上物

可被仰付旨被究置候、年頭ハ二月中、八朔ハ九月中迄

進上物被仰付、右月限過候得ハ不及其儀候、

五八六一

(卷之三十七 二七三三)

(朱書同)

一高輪御屋敷東裏御門前御屋敷之事、高輪向御屋敷、

右之通、唱候様被仰出候段申来候、

五八六二

(朱書同)

一東御中間ノ事、高輪御中間、

右之通相唱、諸書付等ニモ相認候様被仰付候段申来候、

五八六三

(朱書同)

一御前様御事、美栄姫様、 中將様御名被進候、依之

美栄ト統候文字並同唱ノ名付居候者ハ可相改候、

五八六四

(朱書同)

一琉球並諸島へ罷下候諸向、一身者以下家来下人等於彼

地女雇置、致出生候男子、依願直子成御免ニテ御当地

へ招呼候者共、他国出不相成事候条、右ノ訳手札面並

諸証文等記置候様可致候、尤、当分江戸表其外へ差越

居候モ有之候ハ、急度差下候様於向々可取計候、

但、琉球島方出生ニテモ郷土・与力以上ハ無御構候

得共、右身分ノ者ニテモ御雇足輕又ハ家来凡下ニテ

罷在候ハ、其訳役々証文ニ可相記候、

五八六五

(卷之四七 三五九九)

一当八朔ヨリ

(齊魯)

若殿様へ進上物、

中将様御同様被仰付

候、

五八六六

(卷之四七 三六三四)

一御前様御病氣、極々御太切ノ御容体被為入候旨御到来

(齊魯)

候、

五八六七

(卷之二五 一四二八)

一御前様御逝去ニ付、御領國中慎ノ儀ハ別段申渡通候、

(朱書)

若殿様御事、御定式ノ御忌服被為受候間、御忌内ハ人々

心得ヲ以可相慎候、

五八六八

(朱書)

一御前様御法号

芳蓮院殿華尊清心大師

右之通奉称候、

五八六九

(池田治道)

一操姫様御事、

(齊魯)

松平相模守様御嫡子銀之進様へ御縁与

被為濟、御願書被差出置候処、五月十九日御願之通被

仰渡候段御到来候、此旨承知仕、銀之進様御同名遠慮

可仕候、

五八七〇

(卷之三三 一二二四)

一御中陰御法事ノ節、着服ノ儀ハ先年被究置、御葬送ノ

(齊魯)

節ノ服沙汰不相知候処、此節 芳蓮院様御葬送ニ付、

御側役以上白帷子着用被仰付候段申来候、

五八七一

(朱書同)

(重書思)

一為次郎様御事、去ル二日夜ヨリ御急病、極々御太切ノ

段御到来候、

五八七二

(朱書同)

一為次郎様御法名 麗珠院殿本光慧明大禪童子

右之通、奉称候旨申来候、

五八七三

(朱書同八月)

一姫君様御事、

(家齊女)
綾姫君様卜奉称、

(家齊室、茂姫)
御台様御養被

仰

出候段申来候、依之御名ノ字並同唱ノ名付居候者ハ可

相改候、

五八七四

(朱書同)

一高輪町並御屋敷、是迄町人名前ニテ被召置候処、以来

直御名前ニ御書替ノ書付、御留守居付役名前ニテ屋敷

御改へ被差出候処、先月六日其通相濟候、左候テ、町

家作不被残置候テハ都テ武家ノ家作御免難被成旨御達

有之候付、家守居八軒程残置、其外武家ノ家作土蔵等

造立ノ筈候^(筋力)候トモ、未暁卜治定不致趣之御答申出有之候、

一先年御取入相成候大崎御屋敷続ノ地面、是迄中目黒村

百姓甚兵衛名前ニテ候処、此節 中将様御讓請、御抱

添地ノ御願屋敷御改、御役所へ御留守居付役名前ノ書

付被差出候処、六月六日御願通被仰渡候、

右之通申来候、